特63
603

學生文庫

第參編

新訂

益軒十訓

与

大町桂月校訂

東京 至誠堂 發兌

明治
44. 6. 14
内交

學生文庫に冕す

われ聞く、獨逸の中等程度の教育にては、力めて多く古典を課すと。其意に曰く、古典の知識なければ、人物、學問、事業、共に淺薄なるを免れずと。獨逸は新進の國なるが、學問歐米に冠たり、工業亦英國を壓せむとし、國富み、兵強きも、亦以ある哉。我日本は獨逸よりも猶一層新進の國なるが、一躍して世界一等國の列に入り、新興の勢、さすがの獨逸をして後に瞠若たらしめむとす。而して我國は三千年の金甌無缺の歴史を有し、萬世一系の天皇を戴き、世界無類の國體を有す。卽ち我國は世界最古の國なると共に、世界最新の國也。其新興の原因を討ぬるに、獨逸の識者が認めて中等教育に實施せる所は、猶一層早く我國の識者が認めて實施せる所也。然るにわれ近時讀書界の趨向を見る

に、徒に奇を趁ひ、新を求め、皮相なる自然主義にかぶれ、危險なる外來思想にかぶれ、よろづ物質的となり、早く生活の安樂を求め、本を忘れて末に趨り、終に淺薄なる人間となり了らむとす。邦家の前途、嗚呼危い哉。余玆に慨する所あり。學生文庫を編み、古典的名著を選び、初學の士の讀誦に充てむとす。益ありて毫も害なきは、余の深く期する所也。前途有爲の士、願くは之に由りて、精神上の好食物を得よ。修養に供せよ。人格の深厚を致せ。餘裕を得よ。清き娯樂を得よ。猶謹んで告ぐ、善く書を讀め。書に讀まるゝこと莫れ。

大町桂月

益軒十訓に題す

書を讀まむには、先づ其作者の何たるかを知れ。修養の書に至りては、猶更の事也。貝原益軒は我國の一大哲人也。福岡藩醫の家に生まれ、藩侯黒田家の儒臣となりて一生を終りたれど、一藩の儒者に非ずして天下の儒者也。天下の儒者のみに非ずして千載の儒者也。足跡天下に徧く、天下の學者に重んぜられて、其名朝廷にも聞え、幕府にも聞え、上は公卿より下は布衣に至るまで、布も文字を知れる者にして益軒を景慕せざるはなかりき。今日、三尺の童子もなほ益軒の名を知る。學ひろく、識ふかく、其人物溫厚恭儉、仰げば愈高し。もと虚弱なりしが、修養の效に由りて、八十五歳の高齢を得たることは、世上讀書子の先づ師とすべき所也。余は玆に益軒の一逸事を錄して、其人物の一斑に觸れむとす。

益軒湊川を過ぎ楠公の忠節を追慕して感慨に堪へず。石碑を建てむと思

ひ立ちて、之を石工に託せり。然るに歸國して後、之を中止せり。其曰實に曰く、淺學の身、到底楠公の碑文を作る能はずと。これは表面の口實なるが、其眞面には、陪臣の身を以て出過ぎたることをして、却つて楠公を辱しめ累を藩主に及しては相濟まずといふ益軒の高偉なる人格がこもれる也。善い哉、翁が楠公を旌表せんとすることや。更に善い哉、翁が其擧を中止したることや。其後『鳴呼忠臣楠子之墓』の碑は、水戸義公に由りて建てられたり。鳴呼楠公の墓は天下の名儒よりも天下の名侯によりて建てらるべき也。讀者諸君一考せられよ、今でこそ湊川神社が別格官幣社に列せられ、祠宇堂々賽者麕集すれども、義公益軒の頃は、寥々たる寒村、蓬蒿離々として、ほんの印ばかりの小祠か土饅頭かがあるのみなりし也。とにかくにこの楠公の建碑事件を以て益軒が熱血ある快男子なるを知るべく乘じて謙遜の德ある君子なるを知るべし。

益軒書を著はすこと百種の上に及べり。いづれも實踐躬行より出でたる哲人の深言にして、其文章は力めて平易にしたり。この用意は明治の偉人、福澤諭吉の文にも見えたり。翁の著書の中にて、十訓は近年多く世に行はる。學生の是非とも一讀すべきもの也。この卷には、まづ文訓、武訓、五常訓、童子訓の四書を採りたり。文訓は學藝に關する教訓也。經學和學の要旨より説き起して、其重なる書籍を示したり。學問を修むるに、「道を明かにする」と「事に達する」との二要道あることを説きて、前者は經學に後者は史學に俟つべき旨を論じたり。和歌と漢詩とを説きては、和歌は日本の國風なれば、詞音自から通曉し易くして、深く之を稱揚し、詩は國俗に背き、詞音また通じ易からず。之を學ぶとも勞多くして裨益する所少なかるべしとて之を抑へたり。これ漢詩人は或は不服なるかも知れざれども、余は識者の至言なりと思はるゝ也。書狀に關しては、敬意を失はざるべきことを、難解の字句を用ゐざるべきことを諭したり。淡文の綴り難く、解し難きを排して、國文を勸奬したり。其他

學問する者の心得べき幾多の要件を懇切に記述せり。

武訓は武道に關する教訓書也。忠孝義勇は兵法の本、節制謀略は兵法、弓矢劍戟等の武藝は、兵法の末也。されば武道に携はる者は、先づ其の根本なる忠孝義勇の精神を修むべしと云ふより說き起して、軍器、武藝の種類、性質を略敍したり。死に處する道と覺悟とを論じて唯義に從ふべきを諭したり。眞の勇氣を揚げて血氣の勇を抑へたり。戰には豫め萬全の計策を講じ置くべく、決して暴虎馮河の行あるべからざる旨を說きたり。將たる者の心得、卽ち平素に於ける士卒の訓練より戰場の掛引に關する注意等を論述せり。

五常訓は仁義禮智信の五常の道を、和漢古今の格言實例を引證して深切丁寧に講述せるもの也。

童子訓は兒童教訓の事項を記せり。自序に「民間小兒の輩、蒙養正しからず。其平生見聞習熟する所、みなこれ德性を戕賊し、禮法を蔑棄する事のみ多し。予此に於てか自から僭率を揣らず、古人子弟を訓ふるの意を取つて、書するに國字を以てす。窮鄉村童の師なく學なき者の玩讀に便せんと欲してなり」と云へり。

總じて益軒の書を著はすや、人を益し物を濟ふを以て要とす。其文章多く假名を交へ、平易率直にして、牧童樵穉も容易に理解し得んことを旨とし、決して文句を飾らず。童子訓の中に、「この事、前にも既に言ひつれども、老の癖にて、同じ事するは、聞く人いとふべけれど、年若き人に能く心得させんために、返へすゞ告ぐるなり」と云へり。獨り同書のみならず、翁の書中には、さばく斯の如き文句の繰りかへさるゝを見ても、翁の懇到深切なる用意を知るべし。益軒の文、既に通俗を旨とするが故に概して平坦洗著にして光彩の陸離たるものなしと雖も、敢てまた瑕疵の指摘すべきものなく、平坦の中自から謹嚴なる筆法を存し、洗著なる間に奇警なる文句を挿む。蓋し文としては、和漢混和文の上乘なるものにして、獨

り教訓上の效果偉大なるのみにあらざる也。

大町桂月

新訂益軒十訓上卷目次

目次

文訓

上……一
上の末……一三
下……二八
下の末……四四

武訓

上……六三
下……八〇

五常訓

卷の一　總論……九七
卷の二　仁の上……一一五
卷の三　仁の下……一三九
卷の四　義……一六〇
卷の五　禮……一七二
　　智……一八八
　　信……二〇九

和俗童子訓

卷の一　總論上……二二一
卷の二　總論下……二四一
卷の三　隨年教法……二五七
　　讀書法……二六一
卷の四　手習の法……二七二
卷の五　教女子法……二八三

新訂

益軒十訓

上巻

貝原益軒著
大町桂月校訂

文訓上

士は、農工商の上に居て、民をさむる位あれば、一心を以て、萬事に通ぜずんばあるべからず。故に、古人字を作るに、士の字、下は一に从ひ、上は十に从ふ。一は、一心なり。十は、數の極なり。萬事萬物をすべていへり。然れば、農工商の一事一藝にかゝはりては、萬事の用にかなはず。故に、本を先にし、末を後にし、先後の次第にしたがひて、廣く事を學びしるべし。讀書學問するは、本を勤むるなり。たとへば、草木の、本幹立ちて枝葉しげるが如し。本を本とし、末を末として、本末兼ね備はるべし。學問は、四書（大學・中庸・論語・孟子）六經（易・書・詩・春秋・周禮・禮記）を專とし、史學と諸子に及ぶべし。藝術は、六藝（禮・樂・射・御・書・數）文武の法を學ぶべし。六藝は、貴賤ともに、知らずし

てかなはざる日用のわざなり。中につきて、幼より、禮を早くならふべし。禮なしらざれば、よろづのわざ、法にかなはずして、人道たゝず。古禮は、もろこしの古書にしるせり。わが國にも、今もちひて宜しきこと多し。又、宜しからざることも多し。考へて用捨すべし。小兒の時より、父母につかへ、兄なうやまひ、孝弟を行ひ、君をたふとびつかへ、賓客朋友に交り、飲食言語立居ふるまひの法を、まづまなばしむべし。中につきて、飲食の禮、つゝしむべし。禮は飲食にはじまると、古人いへり。飲食ほしいまゝに貪り無禮なれば、いやしくして、人閒の法にあらず、禽獸に似たり。今世に傳はる和禮は、足利氏の時におこれり。すこぶる、わが國土の宜にかなひ、古禮にそむかざること多し。小兒の輩、まづ、其の要用をまなぶべし。次に、書狀をかくに禮法あり。年やうやく長ぜば、是をならふべし。是れ亦、日用の要事なり。手跡よくしても、書禮を知らざれば、法に合はず、ひがこと多し。音樂は、古より、もはら、朝廷に傳りて、衆人のまなぶことなりがたし。俗樂も、淫聲にあらずんば、忠孝義理の道、其のふる事など、風雅なる詞を以てつくりて、歌章として、小兒の時より習はしめば、をしへとなり、義理をたすくべし。今の俗樂の章歌は、教とならず。又、其のほど拍子のいそがはしきも、心をさわがしくして害あり。弓馬は、いにしへより、わが國のくはしき教

あり。幼より學ぶべし。書法は、からやまとの古筆をまなぶべし。風體よき書をえらびならふべし。風體あしければ、書法にかなはず。凡そ、手跡は、筆法正しくして、讀みやすきをよしとす。川あるふみなど、よみがたければ、巧甚だいやしく拙し。本邦の書も、古はよし。もろこしの人もほめたり。只、其の風體は、中華に及ばなれども川ひがたし。よみやすき書も、いやしければ、本法にかなはず。國字は、別にわが國の法あり、ならふべし。眞字は、もろこしの書を學ぶべし。日本流の眞字、から流の假字、いづれもあるまじきことなり。中華の書は、淳化法帖、殊に、王羲之以下諸名家の法帖など、法とすべし。一書によく通ずれば、諸家も學びやすし。算法は、日用に切要なり。たかきいやしき、必ずならふべし。わが國の風俗にて、高位の人は、算をならはず。大名高家にうまる〻人は、貧賤なる人より、殊更、算法をしらずんば有るべからず。其のゆゑは、士卒の數、領内の民數、國郡の廣狹田數、年貢所納の多少をかんがへ、國家の用分を制し、分限をはかり、入るをはかりて、出すことをさだめ、軍法において、敵身方の人數をはかり、土地の遠近廣狹をかんがふるにも、皆、算數なる用ひざれば、其の詳らかなること知りがたし。是を以て、算をしらざれば、萬の事をはかるに、

おろそかにして拙し。

◎經學は、四書・五經など、聖賢の書を、幼より、はやく讀んで、義理をしり、古の道に通ずべし。

◎史學は、左傳・史記・漢書・通鑑などをよんで、古の事をしるなり。六藝の内、禮・樂は文藝なり。射・御は武藝なり。書・數は文藝なりといへども、武事にも、此の二事なくては行はれず。

◎經術義理の學問をつとめて、本とすべし。又、經學のいとまに、左傳・史記・通鑑などの史學をすべし。是れ、末なり。經學は、古の道をしり、史學は、古の事をしる。經傳をよんで、其の間には、史學をすべし。學問は經史に專らなるべし。

◎和學は、まづ、日本紀以下六國史（日本紀・續日本紀・日本後紀・文德實錄・三代實錄）を見、それより後の東鑑以下の野史、近世までの小錄をも考へ見て、わが國歷代の事をしるべし。又、律令格式などの、本朝の古法を考へ知るべし。もろこしの傳記のみを見て、我國の事にうときときは、近きを捨てゝ、遠きを勤むるなり。緩急の次第を失へりといふべし。しかれば、日の本にうまれたる人は、必ず、和學に通ずべし。もはら、もろこしの事のみまなんで、やまとの事しらざる人、今の世にも多し。かゝる人は、世にまじはりても、わが國をしらで、事かけぬべし。日本紀・萬葉集の二書、わが國上代の事をしり、和語に通ずる

益多し。和學をする人は、まづ必ずよむべし。日本紀を見、次に、六國史など、次に、東鑑以下の野史を見るべし。

◎學問の要二あり。道を明らかにすると、事に達するとなり。道を明らかにするには、經學をすべし。經は、四書・五經なり。是れ、學問の本なり。事に達するには、史學をすべし。史は、左傳・史記・漢書以下の記史、及び、通鑑なり。經學のみにて、史に通ぜざれば、古今にくらくして、用に達せず。經學なく、史學に偏なれば、道理にくらし。

◎わかき時は、書をよむに、三のよきことあり。氣つよくして、書を多くよんでもつかれず。是れ、一なり。いとま多く、妨なくて、書を多くよみやすし。是れ、二なり。わかく氣さかんなれば、記憶つよくして、おぼえやすし。是れ、三なり。此の三の事、書をよむによし。又、年たけて後、書をよむに、あしきこと三あり。一には、すでに、君につかうまつりて、つかさどることあり。人のまじはり繁くなり、家の事又多くしては、書をよむにいとまなし。二には、年やうやくたけぬれば、氣よわくなりて、つとめて、書を多くよむこと難し。三には、三十より後は、としどしに、おぼえよわくなりもてゆけば、少年の時、一たび讀んでおぼゆるほどの事を、年たけぬれば、十たび讀んでもおぼえ

ず。こゝを以て、いとけなく若き年、早く書をよむべし。もろもろの藝は、年たけてもならひやすし。只、書をよむことは、年たけては、おぼえ弱く、氣力すくなく、ひますくなし。この故にいとけなき時より、まづ、藝などのことわざはおろそかにしても、もはら、つとめて書を讀みならふべし。是れ、一生の身のたからとなるなり。書をよまざれば、道に暗きのみならず、萬の事に暗し。書をよまざる人は、わがくらきことをしらず。はかなしといふべし。弓馬の藝をならひても、文字なければ、藝の理にくらくして、其の藝いやし。次に、六藝をならふべし。ものゝふは、つるぎ、ほこ、拳法などの術、ならひしるべし。文學は本なり。文武の藝は末なり。本なければ、人のわざ行はれず。文學を勤めずして、時をうしなふ人は、一生をむなしく過して、身をはる。なしむべし。藝なければ、人事にうとし。一生の閒、事かくること多し。わかき時、つとめてしるべし。凡そ、はじめにつとむれば、後に樂おほし。わかき時まなばざれば、老いて悔ゆれども益なし。

◎智ある人は、一紙のふみをよみても益あり。やがて用にかなふ。愚なれば、百千卷をよみても用なし。益に立たずしてをはる。こゝを以て、わがごとき輩は、寶の山に入りても、手を空しくしてかへりぬ。書をみる人も、崑山に入らば、寶をもとめ得てかへるはかりごとをなすべし。是れ、書をよむ

人の、必ず心得べきことなり。しかれども、近年は、又、四書・五經をよまずして、假名がきわづかなる書をよみ、文盲なる師の、わづかなる教をきゝて、道を得たりとて、人にたかぶり誇りて、數十年、經傳を見たる學者をもないがしろにす。是れ、井蛙の、大海をしらざるにたとふべし。孔孟（孔子・孟子）の聖賢、博學をもてさきとし給ふを以て、其の非をしるべし。聖人の道は、廣大精微なり。今なしへ、皆、博學をもてさきとし給ふを以て、其の道理しりがたかるべし。

◎詩を作り文をよむことをきらふは、人々の生れつきによりて、其の好み嫌ふこと。各〻かはれることと、たとへば、上戸下戸の、酒をこのみきらふことのかはれるが如くなれば、さもあらばあれ、只、學問をきらふことは、心にも忌み、口にも憚るべし。いかんとなれば、學問とは、なにごとぞや。親に孝を行ひ、君に忠をなし、凡そ、人倫にまじはりて、義理を行はすがためなり。この道を、古の聖人の、なしへおき給へるをまなぶをいふにあらずや。されば、詩文つくることをきらふにはかはるべし。人となりて、忠孝以下の人の道をきらはば、不孝の子、不忠の臣となりて、天地の閒の大なるが人にあらずや。かゝる人は、世に立ちがたし。しかれば、學問をきらひて、世に立たんとするは、狼藉の人なるべし。

◎孔孟また生れ給ふとも、論孟（論語・孟子）の二書のをしへにかはることなかるべし。しかれば、今論孟を見る人は、即ち、孔孟に、まのあたり教をうくると同じかるべし。此のおもひをなして、よく心を用ふべし。其の上、孔門の顔子のきける所は、子路きかず。子路のきける所、子貢きかず。論語の一書に、みなあつめて記せり。しかれば、まのあたり教をうけたるにもまさり、大なる幸にあらずや。

◎むかしは、和歌は、好色の媒にかぎらず、人倫の交に、たかきもいやしきも、をりふしにつけてやまと歌をよみおくり返して、情をかよはし、志をあらはせしこと、後代の及ばざる所なり。今の人、我身のよむまでこそかなはずとも、和歌は、わが國の風俗にて、其のことばは、知りやすく、其のこゝろわりも、さとしやすければ、すこし心にかけてまなばゝ、などかしりがたからん。萬葉集・古今集を先として、諸集をよみ、その内の秀歌を誦しおぼえて、をりふしにかなひたる古歌を詠じてこゝろなぐさめば、わがよからざる歌を、心をつくしてよむにはまさるべし。

◎もろこしのひじりの説き給へるは、わが日本の人、其文字もことばも目なれず、きゝなれず。況んや、其の道理いたりてふかくして、通じがたけれど、それだに、わが輩のつたなき才にても、つとめならひて後は、頗る其の理のかたはしに通ず。況んや、やまと歌は、わが國のことばなれば、其のことばよみやすく、其のこゝろ知りやすし。是をまなばゝ、心をやはらげたのしましめて、性情をやしなふ助ともなりなん。わが國、いにしへより、和歌を以て、好色の媒として、心をそこなふことなかれ。戀とは、人をおもひしたふをやしなふ道を以て、好色のならはしなりとて、あしきことはまなぶべからず。歌は、心をやしなふ道なり。心俗あり。わが國のならはしなりとて、あしきことはまなぶべからず。

◎ものゝふも、和歌の道しらぬは、他の才藝ありても、風雅なる心なくて、むげにいやしく、人に見おとさるゝくちをし。千載集の序にも、和歌のことをさして、是をまなびたづさはらざるは、面をかきにしてたてらんがごとしといへり。學問のいとまあらば、少しの力を用ひて、是をならふべし。

◎和歌は、わが國俗の宜しきわざにて、ことばさとしやすく、心も通じやすし。此の故に、古人の歌、極めてすぐれてよき事、もろこしのすぐれたる唐詩におとらず。いにしへ、婦人といへども、歌をよくよみたるともがら多し。もろこしの才女といへど、及ぶべからず。これ、わが國俗によくかへる故なり。

◎詩は、わが國の風俗にそむけり。國土に宜しからず。こゝろことば同じからざる故に、かよひがた

く知りがたし。中夏のことば意に通じがたし、故に、いにしへ、本朝の才士名家といへども、詩は、はなはだ、歌におとりて拙くして、中夏の作には大におとれり。中華の詩に及ばざるのみならず、やまと歌にも大におとれり。もろこしの詩にも和歌にも、及ばざることかくの如し。わが國に宜しからざることを作るは、土宜にかなはず。古今の序にかける、詩賦の作、日本に行はれしより、和歌の道おとろへしよし、げにも、わが國俗にあらざれば歌をよまずして、詩を作るは、本末たがへるなり。博學多識にして、詩才あらば、作るも可なり。しからずんば、わが心にかなひがたく、つたなき詩を人に見せて、笑はれんも恥かし。和歌をよまば、情をのぶるに、事足りぬべし。古は、賢しき人まで、和歌をよみて、たがひに、其のなさけをかよはしけること、うるはしきことに聞え侍れ。風體を正しくせば。好色の媒とせずして、人倫のまじはりに、心をあつくし、なさけをふかくするたすけともなりなん。されど今は、世くだり、心ことばもいやしくなりにたれば、其の才なき人、あながちによまんとせば、これになづみて、學問のさはりともなりなん。其の上、和歌は、官家のたしなうけざるゆゑか、みだりによみがたし。ただ、萬葉古今集以下、ふるき歌書を見おぼえて、なりにふれたる古歌をうち誦せんこそ、わがつたなき歌をよまんより、心のなやみなくいたづがはしからで、かへりて、いとおもしろかるべけれ。

◎詩も亦、風雅の道なれども、わが國の俗にあらず。わが國の作者は、いにしへより、さばかりの名家といへど、多くは、風體正しからず。其の詞も意も、おそらくは、から人の下品なるにもくらぶべうも見えず。書生にあらずんば、つくらずともありなん。わがともがら、詩學なく、其の才器なくして、拙き詩文を作るは、瓦工の目より見れば、かたはらいたきことなるべし。鄙俚なる詩文をつくり、わが才のつたなきを世にあらはして、人にそしらるゝは、おろかなりといふべし。顔之推がいへる、詭擬符のそしりもはづかし。わが拙き詩をつくらんよりは、古人の詩の、その興にかなひたるを誦せば、かへつて、面白からん。拙き詩を一首作らんいとまには、好書一巻をばよむべし。しからば、よからざる詩を作るは、讀書のひまつひえて、無益なるいたづらごとなるべし。只、天性詩才すぐれたらば、其の心にまかすべきか。それも、五箇の字を吟じ盡して、一生の心を用ひやぶるは益なし。

◎からの詩三百篇をはじめ、風體よき詩の秀でたるをばよみならひ、吟咏して、性情をやしなふべし。拙き詩を、みづから作るは、無用の閑勞擾なるべし。三百篇の後は、楚辭の賦、文選の古詩と、とりわき淵明が詩、唐詩の風體よきを見るべし。すべのいやしき風を見ならふべからず。ことに、我

が國の詩文は、古今ともに、風體も詞藻もいやしく、ひがこと多く拙くして、中華に及ばず。是を見ならふは、あしき僻となる。凡そ、詩文も、あしきくせつきては、後に改めがたし。はじめより、風體をえらびてまなぶべし。

◎我が國の俗、和歌にて、情をかよはし志をのべ、事たりぬべし。詩は、わが國俗にあらざれば、あながちに作らずともありなん。義理を論じ、行事をしるすにいたりては、國字を用ひては、そのことわり、思ふやうにかきつくしがたし。必ず、中夏の文字を用ふべし。博く書をよみし人も、かれて、中夏の文章を學ばざれば、時にのぞみ筆をとりて、文を作るべきすべをしらず、みだりに作れば、法にあはず、文字のおきやうつづけやう、布置成語連續助字の法をしらずして、ひがこと多く、文字顚倒して、置きやうちがひ、文理をなさず、識者の譏免れがたし。殊に、中夏の人の見て、誹笑せんもはづかし。故に、學士は、必ず、文章を學ぶべし。是を學ぶの法、まづ、六經論孟を本とし、左傳・史記・漢書・文選・韓・柳・歐・蘇等の文を學ぶべし。其の中について、心にかなへる文をえらびて、三十篇ばかりそらんじ、書きおぼえて、熟誦すべし。斯の如くすれば、おのづから文法をさとり、文字の置きやうをしるべし。經史を見るいとまには、少しの力を用ひて、作文を學ぶべし。本邦の古文、淫靡柔軟の風なれば見習ふべからず。麗飾を事とし、奇巧をこのむは、儒者の文にそむけるのみならず、文人の文においても、貴ぶ所にあらず。凡そ、わが國の詩文は、國俗にあらざれば、和歌和文の絶妙なるには、いさゝかくらぶべうもなくおとれりといふべし。本朝、いにしへの名家、詩文にたくみなりといはれし人の作も、近代もろこしの名もなき末の世の作に及ばず。文字を業とする人にあらずんば、詩は作らずともありぬべし。されど、今時は、世に詩をよく作る人多しといへば、古にもまされるなるべし。かく天才あらば、つくりてもはぢなかるべし。

文訓上之末

和歌は、いにしへ、賢者といへど、これをよんで心をかよはしけり。今は、世くだりぬれば、只、堂上のもてあそびとなりて、地下人、殊に、かたゐなかには、此の風をつたへがたし。都の人だにも、堂上の傳をうることかたし。ゐなかの人は彌遠くして及びがたし。故に、わが日の本の内にても、堂上は遠くして、和歌をつたへ知りがたし。況んや、詩は、はるかなるもろこしの風俗にて、わが國のことばにあらざれば、和歌の道、堂上にあるよりも、いよいよ遠くして、其の道に通じがたし。地下

の人、又、遠きゐなかの人の歌をよむは、堂上の詠に及ばずといへども、其のこゝろことば、かなへること多し。是れ、わが國のことばなればなり。わがくにの詩は身を終るまで、もはら、是に心を用ふる人にあらずんば、もろこしの下賤にも及びがたかるべし。是れ、わが國の風にあらざればなり。しかれば、わが國に生れたる人は、只、わが國の名にしたへる和歌をこのんで、其の志をいふべし。詩は、學職にある書生の外は、やむことを得ざるにあらず。天才なくんば、作るべからず。このことわりを知れる人は、詩をこのんで作らず。作れども、つゝみて人にあらはさず。詩を知る人に、らはれんもくちなし。古人、詩の才なくして、このんであらはすをば、顔之推が家訓に、詞癡符といふ。わがおろかなることを人にほこり、わが恥をあらはすふだなりといふ意なり。詩をしらざらん人に見せば、さもいふべからず。詩をしれる人、是を見ば、此のそしりをまぬかれがたかるべし。況んや、もろこしの作者に、わが國の詩を見せば、おほくは詞癡符なるべし。はづべし。

◎詩文章を作るに、故事を引用ふること、用意あるべし。其の所にひかでかなはざる所に用ふべし。さなき所に用ふるは、是れ、廣才にほこりかがやかさんためなれば、かへつて拙くして見ぐるし。和文も、亦、斯のごとくなるべし。

◎其の才品ありて、詩歌を作らんは、誠によし。そのうつはものにあらずば、しひて詩歌をつくりて、人にわらはるべからず。もし、詩歌を作らば、詩歌をよくしれる人を師として、其の人に見せて、其の、あしきを改むべし。もし、明師にあらずんば、略、詩歌をしれる正直なる友に見せて、其の評論をうけて改正し、其の後、人に示すべし。わが作れることは、わが心のわたくしにひかれ、そのほどよりよく見えて、ほこる心もあれど、人はさも思はず、かへりて、あざけりわらはるゝこと多し。

◎なまじひのつたなき詩歌を作り出して、心をくるしめ、人に笑はれんよりは、古人のつくれるよき詩歌の、其の時とその事にかなへるを吟ぜば、心をつくしてあしき詩歌を作らんよりは、遙かにまさりて、たのしみふかかるべし。俊頼も、折ふしにかなひたる歌を詠ずるは、よむにまされりといへり。俊成も、折ふし面白き所がらなどに、なまじひの歌よまんよりは、時におひたる古歌を吟じたる面白しといへり。

◎はかなき筆のすさびにて、人の心の内も見ゆることわりなれば、詩文をつくり、ものかくことも、つゝしまざらんや。

◎書狀のことばこそ、殊に、心を用ふべきことなれ。本邦、先代定められし書禮の法、今に至りて、

世にこれを用ふ。もろこしの賢哲の定められし禮法にはあらざれども、世俗の宜しきにかなひて、すでに、國法となれり。書禮しらぬ人は、わが身の分をわすれ、おごりて人をいやしめ、或は、うやまひすごして、へつらひとなる、二ながら無禮といふべし。書禮をしらば、おごりなく、へつらひなくして、過不及のあやまり少かるべし。されど、ふみには、つれのことばよりは、すこし人をうやまひ過したるが、書禮の法なりとぞ。等輩にも、啓上と恐惶などかくを以てしるべし。此の心得ありてかくべし。おごれる文言かくべからず。文字しれる人も、書禮をしらざれば、日用のちかきことにうとく、ひがことありて無禮なる故、人にわらはるゝことあり。少し心を用ひて、これをしるべし。もろこしの書簡をまなぶにくらべば、まことにいと易きことなるべし。

◎文字しらぬ人は、つれの言語にもあやまり多く、かたことありて、聞きにくし。又、書狀の詞もつたなくして、理もきこえず。かくの如くなれば、つれの才行よりも、はるかに、人に見くだされ、人にわらはれて、辯の人にすぐれたるも、貌のうるはしきも、むなしくなるこそあさましけれ。又、世に行はるる通用の文字言語の字、諸物の名の文字をしらざれば、世事にうとく、事ゆかざること多し。世間通用の文字をも、つとめて知るべし。經史の文字をしるにくらぶれば、きはめてたやすきことなり。少し心にかくべし。それだにしらざるは、むげにいやしむべし。

◎凡そ、世俗の書狀などにかく文字に、ひがこと多し。察すべし。又、そら字多し。是れ亦、其のあやまりを知るべし。但し、あやまり來りて、改めがたきこともあり。それを強ひてあらためてことやうなるは、時宜にそむきてあしゝ。

◎われ、文字しりたりとて、しらぬ人に對せるふみに、ことやうに、むつかしくふるびたる、からの文字をこのんで書くは、わが才學あるをあらはさんとにや。其の心おしはかられて、いと見ぐるし。只、其の人のよく心得べき文字を、さすがにつたなからずかきたらんこそ、目やすかるべけれ。

◎わが名をあらはさんとて、わがともがら、いやしき詩文を作り、人に見せ、世に傳へんとすること、無益のことなり。われら、文學ともしければ、つくる文字つたなく、其の上、ひがこと多し。わがひがことは、みづから見えず、人もいはず。かげにて人に笑はれ、後人にそしられんもくちなし。名を得んとて、名をうしなひ、ほまれを得んとて、そしりを得ること、おろかなることなるべし。されど、天才ありて、巧なる人は、其の心にまかせ給ふべきにや。わがかゝるあさはかなるつたなき書を作るは、只、小兒の戯にしらしめんため、又、わが志す所あれば、やむことを得がたくして、わが拙き

を忘るるなり。

◎人の文字を見ば、よきことは譽め、さほどなきは、かげにても誹るべからず。人のつとめて作れる文字を、一言にたやすくそしりおとさんもなさけなしうらみいかるべし。作れる人、そしりを聞かば、ほいなく思ひ、又、あしき文詩をほむるも、いつはりにてほいにあらず。只、其のよしあしをいはざらんにはしかじ。

◎今時の人の作れる文字にも、所々にはよきことありなん。しかる故に、人の作れる文字を見ば、よきはほめ、あしきはかくす。是れ、人の文字をみる法なるべし。人の作れる文字を、そしることなかれ。

人も、まれまれには、よきことをいひ出すこともあり。是れ、古人の言をとりてしるせる故。又、凡好むくせある人あり。是れ、不仁無禮、戒むべし。古人の作れる文字すら、よきあしきあり。況んや、今時の人の作れる文字、などかよきことのみあるべきや。それをとがめてよきことをばすてゝ、あしきことのみいひあらはすは、不仁なり。是れ、文字を見る法をしらざるなり。わが作れる文字は、よきもあしきも、いひおとすはあさまし。

◎わが日の本の人、義理の學をせんには、四書、六經などの書をよまずしては、道を知りがたし。國

字にて書きては、其の理くはしからず。風雅の樂は、からの詩を用ひざれども、ふるきやまと歌をよみて、心をたのしましめ、才あらば、みづから歌をつくりて、其の情を通すべし。詩を作るよりやすくして、心かよひやすし。しかれば、義理の學をするには、からの書をよまざれば通ぜず。風雅の樂志をいはんには、からの詩を用ひず、やまと歌を用ふべし。わが國の風俗をすてゝ、からのことばの通じがたきを用ふるはなんぞ。

◎わが日の本の人、いにしへは、やまとうたにはたくみなれど、詩文章は、わが國のことばにあらざれば、久しく心を用ひて作れる人も、中夏の作には及ばず。法にかなはずして、ひがこと亦多し。いはんや、わがともがら、いやしきことばを人にあらはし、みづからいみじとおもへど、人のわらはんことはづかし。

◎詩歌は、只、なりにあひたる古人の作を吟じたらんこそ、心をくるしめて、つたなき詞をつくらんには、はるかにまさりて、なさけふかゝるべし。もはら、詩をこのめる人は、古人の五個の字を吟じなして、もつて、一生の心をやぶるといへるがごとし。いと、ふようなり。益なし。やまとうたも、ひろくいにしへの歌集をしらずして、みだりによむ人は、ひがこと多くわらふべし。知らずして、み

だりに詩をつくり、うたをよむべからず。しれる人の見るめはづべし。

◎眞字の文章をつくるに、文字の置所をあやまり、助字をあやまり、連字をあやまり、俗語を用ふる、まづ、此の四の誤を去るべし。

◎和文を作るに、文をあやまり、字をあやまり、かなづかひをあやまり、てにはをあやまる、まづ、此の四の誤を去るべし。

◎詩は、もろこしの詞なれば、文學せざる人の作れるは、ひがこと多し。和歌は、わが國の詞なれば、たやすかるべけれど、これ亦、いにしへの世々にえらばれし萬葉集・古今集以下に通じ、伊勢・源氏などのふるきふみを多くよまずして、歌をつくれば、言葉も心もひがこと多くして、歌とはいひがたし。すべて、詩も歌も、いにしへをかうがへず、みだりに作るべからず。しかるに、詩歌をしらざる人は、わが作れるつたなき詞に誇らしくいひさわぐも、をこがまし。すべて、詩も歌も、其の道しらで、たやすくは作りがたし。

◎わがともがら、詩歌のつくりがたきことをしらで、みだりに、このんで作れば、さこそ、見ぐるしくいやしきことは、人にわらはるべけれ。人つげざれば、あしきことをしらず、かへつて、みづからはよしと思ひて、誇りて人にかたり、掴きことをしらで、人にあらはすは、いとおろかなり。ひろく人に見せざる内に、わが師友に、ひそかに見せて、其の非をただされば、尤もよし。それも、わが作にほこりて、師友に見するはあし。詩文のあしきこと、師友といへど、正直の人にあらざれば、其のあしきことは、つげがたし。

◎文學なき人の、漢字の文をかくは、文理ちがひて、ことわりきこえず。又つづかざる字をみだりにつづけ、字の置所ちがひ、文字筆畫も、あやまり多し。故に、文字なき人、事を記さんとせば、ふつつかなりとも、只、國字を以てかくべし。或は、世間通用の俗文を以てかくもよし。假名と俗文はあさはかなりとて、漢文を以てかくべからず。文學なき人の漢字をつられかくは、ひがことのみ多くして、よみがたく理きこえず。人のわらひぐさとなるもはづべし。漢字をしらざる人は、みづから、そのひがひがしき事をしらずしてはぢず。又、かなにて事をしるすも同じ。ふるき和文をしらざれば、ひがこと多くして、文理ちがひ、かなづかひ、てにはは、皆、あやまり多くして、わらふべし。必ず、しらずして、みだりに書くべからず。事をしるすに、かざりて拙き文を以てしるさんよりは、俗語を以て、かざらずして書きたるは、いやしけれど、かへつて、文理明らかにして、見やすし。凡

そ、文字を作るには、人の見やすく心得よきをよしとすべし。

◎もろこしにて、むかし、人に對し、其の時にかなひ、其の席にあへることを、古き詩をうたひて、其の情をのべしこと、左傳など古書に多し。上代の才たかき人、其の時にのぞみて、詩をつくることかたからず。しかるに、古語を引きたるは、今新しく作らんより、其の情ふかくして、よく人の心を感じうごかすこと、今あたらしく作れるにまさるによれり。今の人も、なまじひの、わがつたなき詩歌をつくらんより、古人の詩歌の、其のなりにかなへるをとり出して吟ぜば、われも人も、感をおこすことふかかるべし。

◎天才なき人、みづから、つたなき詩歌をこのんでつくらんより、古人のたくみにつくれるよき詩歌を吟ぜむこそ、わが心をくるしめずして、樂しかるべけれ。詩は、ことに、わが國の風俗にあらず。つたなくしてみづからつくるは、心も勞し、いとまもおほくつひゆ。其の力を以て、書をよみたらんには、樂も益もおほかるべし。もし、天才あらば、みづから詩をつくるもよし。およそ、學問の道六藝なども、道しれる人に學ぶべし。其の外、萬の事は、その事をよくする人のわざを取用ふれば、わが身いたづがはしからずして、其のわざつたなからず。たとへば、身の病をれうするに、良醫にゆだねたらば、わざはひなかるべし。しかるに、わが少しまなべる、つたなき醫術をよしと思ひ、みづから藥を用ひてあやまらんは、むげにおろかなりといふべし。

◎何事も、しらぬさましたるぞよき。みづからは、わたくしにひかれて、よく知れりと思へど、いまだよくしらぬこと多ければ、わが心にゆるしがたし。よく知らで、知れりとするかほつきなるにくし。子路のしらざるをしれりとするは、偽りて知れりとするにはあらず、わが心にはまことにしれりと思へど、わが氣あらく、心くはしからずして、あやまりて、すでに、しれりと思へるなり。ひとへにおもへば、まだ知らぬことを、すでに、よくしれりと思ひあやまること多し。うらのはまゆふの百重なることを思ふべし。

◎義理の學、文字の學ある人、又、文學なくとも、一材一藝に長ずる人にあはば、わが才學と藝能にほこらず、みづからは、もだしていはず、只、其の人のしれることを尋ねて、其の言語を、つつしんで聞くべし。必ず、益あるべし。わが智を先だてて、才學にほこり、わが少ししれることをよくしりがほにかたれば、われに益なし。みづからは、才學をあらはさんと思へど、識者のいやしむ所なり。學藝ある人のいへることを聞きてこそ、益あるべけれ。人にいはせずして、我れひとりいはば益あ

べからず。又、藝ある人にかぎらず。其の人の居る處の國土の名所舊蹟土產などのこと、又、其の人の家業のことに付きても、尋ね問ひてよくきかば、必ず、益あるべし。凡そ、人に問ふは、智を求むる道なり。

◎われに學ありて、われにしたがひきく人あらば、心をつくして教へさとすべし。しからずば、とくべからず。又、わが心に自得せることありとも、其の理ふかくして、其の人きゝ得がたきことならば、人にかたるべからず。達識の人に非ればさとしがたし。孔子も、共にいふべからずしてともにいふは、言を失ふとのたまへり。

◎世に文學なくしてみだりに道をとく人あり。孝弟忠信などの道を行ふことは、一文不通の愚夫愚婦も、其のはしをば知りやすく行ひやすし。これを以て、學なき人にときかするはよし。かなの書をよみ、人の物語をきき覺えても、淺近なることはしりやすし。草醫の、近世の名醫の作れるかな書の方書をよみても、輕き病をばいやすが如し。しかるに、義理の學は、天地人の大道をしることなれば、まづ、文字をしり、四書五經以下、歷代の聖賢の書に通じ、三史（史記・前漢書・後漢書）通鑑など、古今の事にもひろく通じて、やうやく知るべし。かくの如く、博く書を見ても、道をしらざる人は多し。聖賢の書

に通ぜず、文學つたなくしては、大道に通じがたし。文學なくして道をしりがたきこと、たとへば、通事なくして、異國の人の言語に通じがたきが如く、又、小刀にて、大廈を作らんとするがごとし。文學つたなく、經傳にくらくしては、大道はしりがたかるべし。

◎一師五友は、學者の、閑居して師友なき人の、しひて名づけしなり。されど、理なきにあらず。一師は書なり。聖賢の書は、師としてたふとぶべし。次に、筆硯紙墨案の五は、わが學をたすくるものなり。つれになれて友とすべし。學者のまじはる所、此の外にいでずして、其の樂きはまりなし。貧家には、一師を求め得ること、殊にかたし。其の次に、五友のよきをえらび用ふることもたやすからず。もし是を得ば、其の樂多かるべし。

◎人は、只、わが身をかへりみて、わが身のさかしおろかなると、ざえあるとつたなきとのほどをしりて、つれに人にへりくだり、わが身にほこるべからず。才智ありてもなくしても、わが身にはこりたかぶり、人をこのんで見くだし、又、そしるはつみふかし。いとおろかなりといふべし。

◎朝夕、古の書を見れば、わがともがら、愚なる者も、かけまくもかしこきひじりの御をしへを、まのあたりうくるがごとく、次には、古のもろもろの賢者にまみゆるが如くにて、心より外にたふとき

まじらひかなと思ひ、わが身をかへりみれば、ひがごとおほかりしありさまなど、思ひ出づるもはづかし。

◎凡そ、詩文章をつくらば、ことば平實にして、たくみにかざらず、ことなる怪しきことをいはず、やすくすなほにして、さすがに、いやしく拙からず、ふるめかしかるべけれ。て、わが志をいひのべんこそよろしかるべけれ。

◎今の人、詩を作るは、其の人わが身に私して、みづからつたなきことを知りて、わが作にほこらざれども、其の人おもへらく、古人の如くうるはしくはならずとも、只、時々の景氣をながめ、情をのべて、心をなぐさめんれうなれば、つたなくとも害なしとおもひて、詩を作ることを好めるなるべし。今時の人の作れる詩つたなくしても、大やう詩の法にかなひて、ひがことすくなくば、其の人に應じ、情をのぶる助ともなりなん。わがともがらの、文學つたなく、詩を知らざる者の作れる詩は、文字のつづき、字の置所、意を用ふること、皆、法にかなはず。かかる詩は、拙きと巧なるとを論ずるにもいまだ及ばず、ひがこと多く、法にそむきて、詩とはいひがたし。たとへば、和歌をよむに、歌學なく、久しく心を用ひず、又、官家の傳を得ずして、みだりによめば、詞のつづきも、古のことばにあらず、てにはも、法に違ひ、一首の心きこえざれば、和歌とはいひがたし。かかる歌をよんでは、わが心をなぐさむべきやうなくして、必ず、人にわらはる。しかれば、和歌をしらずんばよむべからず。和歌は、わが國の言葉にあらず、文學つたなく詩を知らずんば、いかにしてか法にかなはんや。文學すぐれ、詩に久しく心を用ふるにあらざれば、惡詩も作りがたし。吾輩の作れる詩は、詩をしれる人のそしりわらはんことはづかし。才學すぐれ、詩に巧なる生れつきならずんば、詩を作るべからず。才學ありても、天性につたなき人あり。曾南豐が詩のよからざるがごとし。わが得ざることは好むべからず。わが國にては、さいはひに、和歌をよんで、情を述ぶるにあまりありて事たりぬ。たとひ。文學ありて詩を作るだに、わが國の歌をすてゝ、異國の風俗の詩を好み作ること、近きをすてて遠きにはしるあやまりあり。況んや、文學つたなくして、詩をつくり、かへつて、わが國俗の和歌をずつるはつつみあり。

◎和歌は、日本の風俗なれど、天性歌よむにつたなき人あり。歌學ありてもよみがたし。況んや、和歌の道しらずしてよめば、ひがこと多く、必ず、人に笑はる。勞苦してはぢを求むるは、益なくして

損あり。歌學して後、人のをしへをうけて歌をよむべし。

文訓　下

父兄たる人は、其の子弟の、いとけなき時より、はやく師をもとめて、書をよませ、道を學ばしむべし。又、いとけなき人も、みづから、わが身をかへりみて、はやく書をよみ、文字をおぼえ、道をまなぶべし。わかき時おこたりてつとめざれば、年長じ老いて後悔すれども、かひなし。およそのこと、はやく後の事をはかりて、悔なからんことをおもふべし。

◎富貴長命にて、福多き人も、學問なければ、人の道を知らざるのみならず。古今の事に通ぜず、萬物の理にくらし。只、草木と同じくくち、禽獣とおなじくいけるばかりを思ひ出にして、人となりていける樂なし。むげにあさましといふべし。

◎かたちうるはしく、ものよくいひ、よききぬきて、貧客に對し、すがたことばすぐれて、人のもてなしよく、其のふるまひうるはしく、目たつきほどなれど、文字をしらず、古今の事にうとく、かたことといひて、人の耳にたてば、すがた言葉のうるはしきもむなしくなり、人に見おとされ、あさましく、下ざまに見ゆるはくちをし。

◎世の中に、生れつきすなほなれども、書をよまず、又、書はよめど、道に志なき人あり。をしむべし。つとめて書をよみ、道に志あれども、正學のすぢを知らずして、身をはるまで、大道にうとき人あり、これ亦、をしむべし。これ皆、聰明のたらざる故なり。

◎常人は、わが身をしるにくらし。是れ、私の一字まぬかれがたければなり。わが身に才智なけれど、ありとし、少しあるは、大いにありとす。學問藝能つたなけれど、すぐれたりと思ひて、人に對してほこるは、わが身をしらざるなり。是れ、愚なるなり。又、わが詩歌文章のつたなきを、よしとおもひて、人にしめすこと、世に多し。殊に、詩文は、わが國のことばにあらず、作りがたし。其の上、文學ひろく、文字を多くしらざれば、作りがたく、作ればひがこと多し。文學つたなくて、このんで詩文を作れば、意も調もふつつかに、法に合はざることのみ多きをしらず、わが身に私して、かへつて、よしとおもひて、みづから誇り、わが美をあらはさんとて、人にしめす。これ亦、わが身をしらざればなり。不智なること甚し。詩も歌も、古人の作、わが心にかなへるもの多し。其の境地の風景と、其の時節の情懐に合へる詩歌、亦多し。是を吟ぜば、勞せずして、わが惡しき詩歌

を作るにまさりなん。是を吟詠して、興をやるべし。

◎およそ、晉邦の人、詩文を作るに、只、奇異なる文字を多くつらね、故事を處々に引出したるのみにて、まことの志をあらはし、情をふくめることなく、義理なし。質實ならずして、奇異をこのむは、文章の本意を失へり。詩は、志をいふを本とす。文は、理を論ずると、事をしるすを本とす。たくみを好み、かざりを專にし、無用の言葉をつらぬるは益なし。詩文を作る本意にあらず。

◎よく書を見る人は、一句を見ても、其の理を得て、用ふれば、用をなして益あり。よく書をよまざる人は、千萬巻のふみをよんでも、其のよきことを取用ふることをしらず、益なし。たとへば、石をわりて玉をとる人あり。これ、よく玉をしればなり。寶の山に入りても、手を空しくして歸る人あり。是れ、玉をしらざればなり。書を見る人、益あると益なきとも、亦、かくのごとし。

◎假名づかひといふは、國字四十七字の内、いぬ、をお、えゑ、此の三は同音なり。上中下の在所につきて、用ふる字かはるなり。はひふへほの五字、和訓の下にある時は、わゐうえをとよむなり。是は、同音に非ず。上のいぬをおえゑは同音なり。上のつづきによりて、轉じて同音として、字を書きかふるなり。はひふへほと、わゐうゑをは、同音にあらず。同音にあらざれども、下にある時は、同音としてよむなり。又、漢字の音も、韻の開合にしたがひて、文字づかひかはる。又、てには字によりて、かなづかひかはる。

◎不學なる人、或は、書をよんでも、粗學なる人は、人の言行の善惡を評論し、又、人の作れる詩文章のよしあしを評論すること、多くは理にあたらず。學問なく不智にして、人の是非を評することなかれ。おろかなる人は、事の善惡をしらず、只、人のいふことを信じて迷ひ、みだりにほめそしること多し。是非をしらざる人のいふことを信じて迷ひ、みだりにほめそしるべからず。凡そ、不知にして人の是非をいふことは、理にあたらず、ひがこと多し。又、少し書をよんで、みづから是として、わが才智にほこり、人のよしあしをほめそしることなこのむは、知なきが故なり。

◎凡そ、わかき人、智なき人、無學なる人、此の三品の人は、つつしんで、人をほめそしるべからず。必ず、理にかなはず。ほめそしり理にちがへば、其の愚なることあらはれてはづべし。

◎詩文章をしらずして、人の作れる詩文の善惡をほめそしるべからず。手跡をほめそしるも同じ。手跡をしらずして、人の手跡の善惡をほめそしるべからず。

◎儒とは、學者の稱といへば、本邦近世の書生をも、儒者と稱すべきか。其の儒者の内、其の性と習

により、學術の品、各〻かはれり。詩文章を專らつとめとし、奇異の文字をこのみ、詞をかざれる學あり。もし、心を用ふることくはしからず、其の學びやうよからざれば、其の好んでつとむること久しけれど、其の文詞つたなきあり。又、近世の儒に、文學つたなくいやしく、殊に、異學をまじへて、正道をしらざれども、其の守約に、其の素行頗るよくして、俗學にまされるあり。されど、聖賢の書、多くよまざれば、道理にくらくして、學術よからず。正理をしらで、みづからほこる儒あり。又、程朱（程顥・程頤・朱熹）の書を信じて、學術雜ならず、其の制行も、頗る謹しみて正なれど、聰明たらず、義理にくらくして通ぜず、訓詁になづみて、かへつて、みづからほこり、人にたかぶりて、人に對するに、刻薄にして、善をこのまず、仁愛すくなく、古禮にかかはりて、當世の時宜をしらざる儒あり。かかる人は、みづからは道學と思へれど、是れ卽ち、訓詁の學なり。終身つとめ學べども、自得のしるしなし。又、頗る聰明にして、義理に通じやすけれど、文學足らずして廣博ならず、窮理の功すくなく、其の趣せばきあり。或は、雜書小說を多く見て、義理をこのまず、經史にうとく、佛老（佛家・老子）をまじへたる雜學あり。是れ各〻、其のオの長ずる所、性のこのむ所によりてしかり。只、聖學に志ふかくして、經傳に明らかに、よく思の功ありて、義理に精しく、且つ、史書にひろくして、古

今に通じ、子集にわたり、文章詩賦をしり、字學に精しき通儒、もし、あらばたふとぶべし。

◎わが邦の作り出せるつたなきふみは、漢字も國字もあさはかなれば、人の見るめも恥しけれど、もとより、天地の御めぐみ、殊にふかくかうぶりぬれば、其の萬一をむくい奉らんとするも、おほけなくて、そらおそろしけれど、字をしらぬ人と、小兒のともがらのために、かゝるよしなしごとを書きつづけ侍り。凡そ、人と生れては、官位の高下、財祿の多少によらず、諸人のために、益となることをつとめなすべし。若し、わが名をとらんとて、人に益なきことをなすゝむるは、世のたからをつひやし、人の補ひとならず。わが著はづべし。もし、民用の助にだにならば、鄙事小說をしるしあらはすとも、いやしみて、益なしとすべからず。道學の名を立つる君子のそしりもはづべからず。中華の文字をよみ、義理の學のため、書を作らんこと、中華の先正の說、すでに、明らかにして備はれり。わが著愚不肖のつくれる書は、かへつて無用の贅言なるべし。

◎文學ひろく、聖賢の書をあまねく讀んでも、道をしらざる人、古今多し。かくひろく聖賢の書をよんでは、道をしるべくしてしらざるは、志なく聰明なきゆゑなり。文學に通ぜず、聖賢の書を多く讀まずして、道をしれらん人は、古今これなし。是れ、道理のなき所なり。舟橋なくして、海河をわた

り、梯なくして、高きに登らんとするが如し。近世、一種の學問文學をせずして、聖學をせんとするも、文學して義理を知らざるも同じ。たとへば、歌學をせずして、和歌のあしき人はあり。歌學なくして、うたよくよむ人はなきが如し。但し、學問なく、すこし師の口傳をきゝて、頗る、心をなやめんとする人あり。これ亦、聞かざるにはるかにまされり。稚稗の熟するは、五穀の熟せざるにまされるが如し。

◎四時につきて、いつともわかず、ふるきふみ見ることを樂しみ、つれにしてやむべからず。なんぞただ、三餘の時にかぎるべきや。春夏は、日の長きを愛し、秋冬は、夜のながきをよろこぶ。折を得てたのしむべし。日ながけれど、事しげく、客おほければ、いとまなし。夜はしづかにして、書を見るに功多し。およそ、日ひとひ夜ひとよ、ふみ見る益は、いかなる富貴の樂にもかへがたし。經傳をよめば、見るたびに、聖賢のをしへを、まのあたりきくが如し。たふとぶべきことかぎりなく、むなしく過ぎぬる隙をしむべし。狄仁傑の、名教の内至れる樂あり。なんぞ俗人とかたることを好まんやといへるも、うべなり。古語に曰く、讀レ書一日有二一日ノ益一、讀レ書一卷有二一卷益一。又曰く、人の神智をますは、書にしくはなしといへり。歐陽子は、至レ哉天下樂、終日在二几案一といへり。智をま

して、且つ樂あるは、大なる益にあらずや。無學なる人は、學問の樂、かくの如くいたりて大なることをしらず、たしむべし。たとへば、わが國にうまれて、富士のたけ吉野の花見ざらん人だに、いとうらみ多かるべし。かゝる人には、見せまくほしくぞおぼゆる。況んや、人となりて、人の道をしらぞ、富士吉野にくらぶべきや。只、さいはひありてよく學ばん人は、此のうらみなかるべし。

◎凡そ、世の中のこと、すべて、わが心にまかせがたく、我がまゝならぬことのみぞおほかる。只、讀書の一事のみ、わがなさんと思ふ志だにあれば、つとめて思ふやうにせんも、我心のまゝなり。それだにおこたりてなさず、いたづらに、月日をつひやせば、いふがひなくて、まことにをしむべし。

◎君父につかうまつりて、いとまあらば、經史を讀むべし。經をみて道に通じ、史をよんで古をしろ、其の樂きはまりなし。又、その間、少しのいとまを用ひて、古の文章を見るも、亦、樂しむべし。古文は、左傳・遊嗣・文選をはじめ。漢・唐・宋より明にいたりて、諸大家の文集多し。只、詞のうるはしきをのみ好むべからず。義理を發明し、知識を開くべし。又いとまありて閑なる折々は、からやまとの詩歌をもてあそぶも、心をなぐさむるわざなり。

◎和歌は、萬葉集をはじめとして、古今集より下つかた、世々にえりあつめられし、二十一代の歌集、次に家々の集あり。いとまあらば見るべし。又、歌物語などの和文を見るも、いにしへの、わが國のことばにて、風雅なれば、情をもよほしやすくして、興をやるべし。和語を見るには、伊勢・貫之・紫式部・清少納言が作れる和文の類、只、ふるきことばの、いやしからずえんなるをもてあそぶべし。此等の書には、淫靡なること多し。只、其の詞をとりて、不經なるをばすつべし。ことわりたがへりとて、貴むべからず。いかんとなれば、聖學のいたれる道を以て、かゝる、道しらぬおろかなる婦人などのつくれる、あさはかなる書のひがことを正さんとする人は、かへつて愚にこそきこゆめれ。ことに、其の時の風俗、彼の物語にかけるごとく、たはれたるならばしなれば、取わきて貴むるにたらず。莠の苗をみだるをにくむは、其の似て非なるゆゑなり。これは、似て非なる類にはあらず。たとへば、大なる岩を以て、鳥の卵にくらぶるが如し。似るべくもあらざることを、いひけさんこと。いはほをもて、鳥の子をおすが如し。なさけなしといふべし。又、今の人、彼の物語の、其のことばのえんなるにめでて、道理のたがはざるとて、みだりに道理をつけておもれるも、いとおろかに、ひがひがしくきこゆ。およそ、よきをとり、あしきをすつるこそ、廣く書を見る人の知るべきことわりなれ。しかれば、かゝるあさはかなるふみの内にも、しかるべきことあらば、取りて用ふべし。全體を用ふべき書は、聖賢の書の外には、もろこしの書にだにすくなし。

◎詩は、三百篇をはじめ、文選の古詩よりしもつかた、明朝にいたるまで、巧なる作者多し。されど、中庸より以上、とりわき、古雅なるをえらび玩ぶべし。わが國の詩文は、古代の名家といへど、其の習艶麗を事として、古雅ならず拙し。其のことばのえんなるにめでて、道理のたがはざるとて、みだりに道理をつけておもれるも、いとおろかに、ひがひがしくきこゆ。およそ、よきをとり、あしきをすつるこそ、廣く書を見る人の知るべからず。

◎韓・柳・歐・蘇・曾・南豐などが文の内、心にかなへるを、三四十篇えらび出し、別本にうつし、そらによみ、そらに書きおぼゆるは、文章を作ることをまなぶ良法なり。朱子の言にも、此の意見えたり。斯の如くすれば、文字の置所、助字の用樣を、おのづからしりて、顚倒の誤なく、連續せざる文字と、俗語とを用ひたる誤多し。殊に、風體軟媚にして、奇巧をこのんでいやし。巧をこのめば彌拙しと、古人のいひしも、うべなり。

◎凡そ、日本の人、古より、經書をときて、義理を講じ、詩文を作る、皆、粗にやぶる。精密の工夫

なし。是れ、學の中華に及ばざる所なり。秀でたる作者數輩の外は、皆、拙俗にちかければ、和歌和文のみやびやかにしてよきには、くらべがたし。これにならはば、恐らくは、なづみて作文に妨あるべし。

◎暇ある時は、もろこしのふるき法帖にのぞみてうつすも、みなこれ、閑中のたのしみ、凡上の消玩なり。手跡も、六藝の一にて、日用に益あるわざなれば、古今のよきすぢを學ぶべし。いやしき俗にならふべからず。古畫を見るも亦めでたし。わが國の人のかける文字も、いにしへのは、はるかに、今にまさり、もろこしの筆法にかなひていやしからず。中華の人もほめたり。凡そ、古人のなせる文章詩歌書畫などのわざの、その道をきはめたるを見るも、わが心を樂しましめ、理をきはめしる助とすべし。かゝるわざにも、皆、物のことわりありて、これを玩べば樂となり、又、世俗のはかなきあそびにかはりて、益を得ること多し。學者も、讀書のいとまに、をりをりは、かゝるわざをまなぶも、亦、心をなぐさむる助なるべし。是れまた藝にあそぶの樂ならし。

◎往事を記すの文は、つたなくとも、誠實にして虛飾なかるべし。是れ、實錄にして、後の證となれり。世寶とすべし。もし、誠實ならずして、かざりを專とし、詞をたくみにせば、其の記す所、偽

あるべくして信じ難し。實錄とすべからず。もし、斯のごとくならば、文章たくみなりとも、事なしるすに實なくして、かへつて、人をまよはし、益なくして害あるべし。司馬遷・班固・韓退之・歐陽永叔などは、古來文章の大家なるが、其の文實實にして、奇巧ならず、飾なし。奇巧をこのむは鄙拙なり。

◎富貴の家の子として、つかさかうぶり心にかなひ、世の中さかりにおごりならひぬれば、うき世のはかなきたはぶれあそびにのみ心をうつし、學問などのしづかなるつとめに、まめやかに、心をよせんことはいとかたくして、身終るまで人の道をしらず、驕樂にふけりて、人のうれひをわきまへず、文字をしらで、ふみ見るにちからなければ、ひじりの教をしらざるのみならず、からやまとの、古の世々の史にうとくして、今のかがみにすべきやうなし。此の比ありし事のみしりて、わが日の本の、百年の內、近き昔をだにしらざれば、況んや、中夏の唐・虞・夏・殷・周・秦・漢・晉・唐・宋・元は、いつの時やらん、五帝・三王は、是れ、何物といふことをしらず。かくばかりにて年月を過ぎぬれば、いにしへのいたれる道にくらく、天地萬物の理をしらず、富貴の勢にまかせて、人をなやましくるしめ、不仁にしてあはれみなく、不智にして人の苦しみを知らず、むなしく一生をすぎもていき、とりけだも

のと同じくいき、草木と共にくちなば、人と生れしかひなくして、何の樂かあらん。かくの如くならば、家とめるとも、まことにさいはひなき人なるべし。貧賤なる人も、此の樂をしりて樂しまば、さいはひあつき人なるべし。又、よはひ久しくたもつとも、はかなくて命長くば、樂なかるべし。たとへ、神武天皇の御時より、今の世までいきたりとも、只、長き夢見たる心地して、長生の樂なかるべし。夫れ富貴は人のねがふ所、貧賤は人のきらふ所なり。されども、右にいひし如く、富貴によりて道をうしなひ、貧賤にして道を得やすくば、貧賤なるは、かへりて、富貴にまさるべし。是れ、胡氏が知言の訛なり。もし、富貴にして道を行はば、其のめぐみひろく、其の樂も亦大なるべし。しからば、富貴をねがふも、うべなり。

◎もろこしの王抑巷といひし人は、わが意にかなはざることあれば、其の事に相似たる古人の詩をよんで、わが心をなぐさめしとなり。和歌は、猶わが國の詞なれば、わが心にかなはざることあらば、古歌を吟じて、其のこゝろをなぐさむべし。是れ亦、心を樂しましめ、うれひをさる一の術なるべし。

◎古詩三百篇をよく吟玩して、わが心を養ひ、詩の教の道をしるべし。詩のをしへは、温厚和平にして、心を内にふくみてあらはさず。是れ、風雅の道、詩の本意なるべし。後の詩も、此の風あるは、まことによし。ことばをたくみにしかざり、ことやうなる文句をつくりて、人にほめられんとするは、詩の本意にあらず。故に、詩を作る人、學のひまをつひやし、心をくるしむるは、物をもてあそんで、志をうしなふなり。かくの如くにして詩を作るは、益なく害ありて、無用のいたづらごとなり、もろこしの韻語に通ぜず。詩を作るは、わが國の土宜にかなはず。

◎貧賤なる人も、もし、よく書をよんで、古の道をしり、古の事に通ぜば、はるかに、富貴にまさるべし。何ぞ、貧賤をくるしみて、富貴をうらやまんや。

◎文章和歌のざえともしくば、只、ふみをよみて、道をしり、事をひろくしりたらんこそ、樂おほかるべけれ。又、いにしへの人の作れるよき詩をよむは、たやすくして、其の樂、わが作るにまされり。つとめて筆をとりて、みづからは、いみじきことといひ出すと思へど、つたなきことを世にひろむること、われも人もしかり。

◎和歌は、わが國の言葉にて、あさはかなるやうにきこゆれども、言葉風雅にして、古にちかく、心和平にして、情ふかし。しかれば、もろこしの名家の詩にも、其の品格をさをさおとるべからず。

只、日本の人の作れる詩文は、わが國のことばにあらず、其の上、習あしくて、いにしへの名家の作といへど、もろこしの下等の作にも及びがたし。よくつとめ學ばずんば、中夏の下品にも及びがたかるべし。身を終るまで、詩を作るにもはらにせば、詩は大かたよかるべけれど、さあらば、經史にうとく、其の餘の事にも通ずるにいとまなかるべし。

◎日本の人、むかし今、佛をたふとびて、佛を念じ、佛經をよみて、成佛せんことを、實心に好む人多し。世間に、聖人の書をよみて、聖人のたふとぶべきことをしれる人、まだ、古今に多し。しかれども、聖人の道を、實心にこのみて、わが身のひがことをあらため、聖人にならんとおもへる人、一人もなし。成佛をねがふ人に及ばず。是れ、いかにしてかかくの如くなるや。學者みづからはづべし。

◎およそ、事を記す文は、後世に傳はる故、おもき大事なり。わが記すこと、後代の證となれり。慎みて、みだりにしるすべからず。實實にしていつはりかざりながるべし。もし、實ならずして、詞を巧にし、飾を專にすれば、其のしるす所誠としがたし。實錄とすべからず。益なきのみならず、して、僞をつたふれば、後の害となる故に、事を記す文は、寧ろ、いやしくつたなくとも、すなはに實なるべし。かざりて實を失ふべからず。其の上、かざり多ければ、無用のことばなく、簡要ならず。人に益なし。事ながくして、見る人うめり。いにしへの、文章に、名ある人の作れるは、事を記すに、いつはりかざりなく、實實にして、無用のことばなく、言約に、事詳にして、理明らかなり。其の文のうるはしく綺巧なることは、かざらずして、おのづから其の中にあり。かざり多き文は、其の作者の心に實なきこと、思ひやられ侍る。益なきことを作りて、我が心の僞飾をかきあらはすは愚なり。われ人のため、益なくして害あり。人のよきをあやまりてあしゝとし、あしきことをよしとして、いつはりを記すこと、天道のせめのがれがたし。おそるべし。凡そ、かゝることにつきても、天道にそむきぬれば、當時のせめ、目に見えれども、後のわざはひのがれがたし。かへすがへす、天道をばおそるべし。又、めづらしくあやしき文字を用ふるは、必ず淺才のわざなり。

◎すこし才ありと見えて、物かき藝ある人も、其の心平實にして、わが才をかくして、ほこらざる人は、おくゆかしくうるはしと見ゆ。多才なる人もわが才をほかにかがやかして、ほこる人は、多くは、人をそしる。おのれにほこり、人をそしるは、其の不德なるくせのほどあらはれてあさまし。かゝらざりせばよからましとおもひて、あたら才學あるも、玉の盃のそこなきが如く思ひくだされて、其

のきずうらめし。

文訓下の末

もろこしの聖人、いにしへの詩をえらびて、教を立て給ふ。詩をまなべば、おのづから、よきことあしきことを見きくにしたがひて、感をおこして、善きことをきらふ。是れ人の心をみちびきて、しらずおぼえずして、正しく善きかたにうつりゆかしむる教なり。いにしへの詩三百篇の内にも、賢人君子の作れるはまれなり。國風などは、里巷歌謡とて、其の國其の時、いやしき民俗男女のうたへる、村里のいやしき歌多し。ことごとくに、道理の至れる詩はまれなり、されども、それを教とし給ふは、愚なる民俗のいひしことも、皆、人情をのべて理あり。これを見きゝすれば、人の心を感ぜしめて、善にうつり悪をいましむる助となれり。和歌も亦かくの如し。いにしへ、和歌をよくよめる人、必ず、賢人君子にもあらざれども、其の内に、人情をよくいひかなへたること多し。是れ亦、其の歌に感じて、善心をおこし、情をもよほす助となれり。この意を以て、歌をこのみもてあそばゝ、もろこしの詩の教と同じく、善にうつる縁多かるべし。されど、和歌には、好色

の歌多し。是は、詩にていはば、鄭衛の風なれば、教とならず、かへつて、淫風をみちびく媒となりぬべし。あしきなれば、いましめとすべしといふ説あれど、それは君子のみさをある人は、さも有るべし。かゝる人はまれなれば、あしきにうつる助となならんことおそるべし。詩三百篇は、聖人のえらび定め給へり。和歌も、かゝる明哲の人ありて、よきあしきをえりとゝのへば、皆、教となるべし。されど、今いにしへの和歌を見ん人、此の理をもてえらばゝ、教となるべし。和歌をよくえらび用ひば、其の益などかなかるべき。近き世の和歌は、只、言葉をたくみにして、かざれるをこのみて、其の志をいふことはすくなし。詩も和歌も、志をいふをむねとすべし。言葉は、只、ふるきを用ひ、いやしからざるを以てよしとすべし。言葉をたくみにせんとすれば、和歌の本意をうしなふ。わが身、和歌をつくることかなはずとも、古人の歌をえらび用ひば、かへつて、わがよむにはまさりなん。

◎學問などの道理を人にとくに、其の人の識見いまだ至らず、或は、學力よわき人に對して、高く深きことをとくべからず。博學なる人も、或は、聰明ならず、かはれる人に、高深なることをとけば、わが說を心得ず信ぜずして、そ、りあざける。凡そ、かやうのこと、其の事を歷されば、其の禍あることをしらず。

◎富貴の家に生れて、道に志なければ、人にあはれみなく、物に情なく、萬の理をしらず、おこたりて書をよまず、よき道を學ばずして、知惠ひらけず、人の道しるべきやうなし。財多く勢ありて、善を行ふにちからあれども、善をこのまざれば行はず。是れ貧賤にして、道をこのむ人に劣れり。もし、智ありて、幸にして富貴に生れたる人は、善をこのみて、ひろく人をすくひたすけば、富貴なるかひありて、甚だ樂しむべし。

◎古の學を好みし人、財祿の養なく、貧賤にして、みづから田をつくり、薪をとりて、身を養ひ、艱苦して書をよむ。或は、貧しくして燈なく、雪に映じ螢をあつめて、書をよみ、又、かべをうがちて、隣のともし火を用ひて、書をよみし人あり。或は、貧家に、よむべき書なくして、書ある家にやとはれ、ちからのはたらきして、其のかはりに、書をかりてよみし人あり。かゝる艱苦をなめて、書をよみし人おほかりき。其の志たふとぶべく、其の艱苦あはれむべし。かくの如く、くるしみてつとめし人は、其の功業を成して、道をしり、世に用ひられたり。

◎日の本も、近き世まで、都に板行の書なく、ゐなかには、書をしふる師なく、寫本だになくて、もとめかれて、他國に遠く行きて、師をたづれ、書をかりもとめ、夜を日につぎてよみならひ、書を

寫して歸りぬ。其の艱苦甚し。今も、家貧しき人は、書をよむことをこのめども、書なく師なく、筆硯紙墨もともしく、書をよむべきやどもなく、明窓淨几なく、夜は燈なければ、書をよむことかなはず、田をつくり、薪をとるひまにも、すこしばかり書をかりとめてよむ者あり。あはれむべし。しかるに、今とめる人の子は、衣をあたゝかにき、食にあき、家居よくして、書をよむに師あり。財多ければ五車の書も求めやすく、明窓淨几あり、筆硯紙墨精良をきはめて、不足なることなし。又、賢父兄あれども、其のいましめをふせぎ、良師あれども、其の教をうけず、書をよむことをこのまざれば、いたづらに、日をむなしくするのみならず、無賴の惡少年を友とし、酒色をこのみ、美食をむさぼり、博奕し、淫樂をこのみ、非禮を行ひて、學問をきらひそしり、道義をこのまず、一生おろかにして身をはろ、わが身のさいはひも富貴も、一も用にたゝず。をしむべし。昔、もろこし張騫武といひし人、十一の可レ惜說をつくりて、昔、貧しき人の書をよむことを好みしこと、今の人、家富み師あれども、書をよむことをこのまざるは、をしむべきことなりといへり。

◎わが國の書生詩人、多くは、もろこしの歷代の故事をば記すれども、わが國の、日本紀以下の國史にくらく、又、律令格式をしらず。萬葉以下の歌集を見ず。故に、わが國の古今歷代の事、本朝

の典故にくらく、和語に通ぜず、和漢の文をかき、わが國の事を記せば、あやまる。ちかきわが國のことをすてゝしらず、遠きもろこしのことを專にするは、あやまれるなり。

◎わが日の本上古の言は、もとより風雅にして、中臣祓の詞の如く、又、歌のことばに似て、今の俗の俚語に大いにかはりていやしからざるべし。神功皇后新羅を征し給ひしよりこのかた、ひとの國とわが國と、やうやく交り通じて漢字傳はり來り、太子以下聖經をよみならひ給ふ。其の後、漢字の音は、わが國の人の口にかなはずして、和音五十字の相通を以て、五音を相かなへて、別に和音をつけて、漢音を改めて和音とす。今の漢字の音是なり。こゝを以て、文字は中華の字にして、音は、唐音にあらず、和音なり。和音なれども、五音相通ずる道ありてしかり。其の後、又、佛書傳り來り、是を誦する者多し。是より後は、上古の和語はやうやくすたり、佛書の連續せる文字を以て、俗語とすること多し。又、佛書にあらざれども、漢字を以て、妄につづけて作り出せる俗語多し。儒書は、佛書より早くわたりしかど、よむ人多からざりしにや、これを用ひて、俗語とせしはすくなし。時俗の語と、漢字の音と相まじへて、和語を作る。言語の字をつらぬること、多くは、文理いやしくつたなくして、且つ字義かなはざること多し。近世の俗語は、又、いよいよいやし。文理義にあたらざること多し。もろこしの俗語だにも、後世ばいやしきこと多し。況んや、わが國文字のつたなきをや。

◎およそ、世俗のなす所、習つて察せず、むかしよりあやまり來りしに打まかせて、改めざること多し。本朝の官職の名は、わが國の古制なれば、頗る、正しくして、鄙俚ならず。文章を作るにも、わが國古昔朝廷の法制にしたがひ、本朝の官名を用ふるも、我が國の規模なるべきに、危異を好む書生は、わが國の古制の官名をば用ひずして、かからのめづらしき官名を書きかへて用ふるこそほいなけれ。しひて、異名を用ふるゆゑ、和漢合はざること多し。國の名も、陽の字をつけて、河陽、丹陽、播陽、藝陽、紫陽などいひ、又、州名にかぎらず、伏見を伏陽といひ、華人も、其のあやまりにならつて、長崎を崎陽と稱す。笑ふべし。およそもろこしにて、陽の字を地の名とすること、山の南、河の北にある所には、某陽と稱す。所謂、咸陽・漢陽・丹陽の類の如き是なり。さもなき所におしなべて、陽の字をばつけず。本邦にて、みだりに陽の字を付くること、叢林の徒よりはじまりて、其の後は、老師宿儒といへども、其のとがにならつて、皆因循せり。習而不レ察といふべし。

◎書をよめば、千歲の後より、千歲の前の人にあひまみゆ。わが如き愚者といへども、いにしへの

聖賢に、みづから對して、まのあたり其の教をうくるが如し。其の理高くして大なること天の如く、ふかくして廣きこと海のごとし。學問の道の大なること、天と海との外には、たとふべき物なし。此の故に、天下の樂、是に似たるはなし。世人、此の樂をしらず。大なる不幸なり。たとへば、日本に居て、富士のたけ吉野の花を見ざる人だに、みせまくほしく、此の道をしらせまくほし。人となりて、書をよまずして、此の道をうかがはざる人は、きはめて不幸の人にて、人となれる樂なし。あはれむべし。

◎世間の人の好むわざ、皆、友に對し、或は、從者を待ちて行はる。われひとりなしがたし。碁をかこみ、連歌し、太刀をつかひ、矛をふり、弓を射、馬にのり、音樂を奏し、漁獵するの類、皆しかり。只、讀書のみ、獨なして友を用ひず、古人に尚友する樂ふかし。いまだ見ざる書をよむは、良友にあへるが如し。すでに見たる書をよむは、故人にあへるがごとし。

◎わが輩のごとき、才なく愚なる身は、老きはまりても、才德を成しがたし。されども、およそ、人の才德をなし、學にすゝむことは、長壽をたもたざれば、なし得べからず。學をつとめて長壽なる人は、其の幸ひ甚し。長壽ならん人は、學に進んで、自得すべき計をなすべし。無益のことをなして、なしむべき月日を、むなしくすぐすべからず。わかき時よりしとすること、老いて後おもへば、ひがこと多し。義理の精明なることは、年わかく氣あらければ、なし得がたし。老いての後のことなり。わかき時は、只、おほくよんでそらんじおぼゆることをつとむべし。書をよんでそらにおぼえ、ひろく書を見ること、年老い氣おとろへてはなりがたし。

◎巫祝のともがら、其の家に祕して、上古の和字と稱して、符まもりにかく所の字あり。これ、漢字を以て作れるなり。邉生八歳・不求人等にのせたる、符章の僞字と頗る同じ。是れ、其のもと、もろこしより來れる僞字なることをしらで、上古の和字とおもへるはひがことなり。

◎學問も藝能も、人に難ぜられそしられてこそ、わがあしきことを知りて、よき道にすゝむべけれ。みづからよしとおもひ、人にほめられては、わがあしきことを聞かで、よき道にすゝむべきやうなし。わがすることは、よきと思ひてほこり、人のことは、あしゝとおもふは、世の常の人のならひなり。かくありては、よき道にすゝむべきやうなし。

◎わが日の本は、神武天皇よりこのかた、今にいたるまで、二千餘年、もろこしは、堯舜より以來、今まで、およそ、三千五百年、其の間、天下の事變、世々の治亂盛衰、其の世にありし人のありさ

まのふるき迹、からやまとのむかしをしるせし歷史、通鑑等の書にのせて詳なり。もし、よく其の書を考へ見る人は、其の事は久しくふりにたれど、吾が身はながらへて、其の間の世々を久しく歷て、まのあたり其の時のありさまを見たるやうに覺ゆ。しかれば、日本のいにしへ、二千年、中夏の三千五百年のよはひをたもてるに同じかるべし。豈、たのしまざるべきや。

◎和漢の人、古今、書を著せる多し。豪傑の作れる書は、まことに、わが如き愚者は、開然しがたし。才俊の士といへども、若し、其のあらはす所、聖賢の學にあらず、有用の言にあらずんば、文章ことにうるはしくとも、民用の資とならず、無用の書なるべし。民用の助とならば、居家必用・農政全書・濟民要術の類といへども、有用の書とすべし。今の時、わが輩才學つたなき者の作にていはば、ぬかみそひしほの製法をしるせる書も、民用の助とならば、有益の書なり。もし、宋儒に阿り諛ひて雷同し、發明することなく、同じことといはるべし。

◎小學の書、註多し。朱子本註は、去るべからず。諸法に、是を去るは何ぞや。陳選が句讀、王雲鳳が章句を可とす。されども、句讀には、小學の本旨にそむけること多し。王雲鳳が章句、猶まされり。所謂後出のもの巧なればなり。近年は、もはら、句讀を、世こぞりて用ふ。陳選は、まことに賢儒なれども、其のあやまりには、從ひがたし。立教の初に、朱子中庸の卷首を引用ひられしは、聖人教を立つるの本意をしらしめんとなり。しかれば、唯、其の字義を淺く說きたらば、小子のためさとしやすかるべし。然るに、句讀に、中庸の章句をそのまゝもち來りて說きて、高深をきはむ。かゝる高深なることをときかせば、初學の兒童に宜しからずして、聞くにうみて學をうとんずべし。其の餘にも、陳選が注、宜しからざること多し。およそ、小學は、小兒の學ぶ所なり。其のをしへ、淺近にしてさとしやすく、易簡にして行ひやすきが宜しかるべし。

◎日本には、中世以後、正史なし。野史も、まれにして詳ならず。此の故に、天下の大事だに正しくしるしたるふみなければ、野史に少ししるしたるにては、其の事詳ならず。實否うたがはし。況んや、國々のこと、其の國に文字をしれる者なければしるさずにまかせて記せるは、多くはそらごとあるべし。正史なく後年に、他方より、そのありしを、聞傳へまさりたる上國なるに、此の事かけたること、異國人のきくもあさまし。

◎道理なきことを見きゝして、信ずるは愚なり。理なきいつはりごとをまことゝ心得て、みだりに信

ずるは、知なきが故なり。又、理あることをしらずして、信ぜざるは尤も愚なり。理あるすぢを以て、いつはりて、人をあざむくは、智者も欺かるゝことあり。

◎學のすぢを學術といふ。書をよみ學をする人は、同じく聖賢の書をよめども、世の中の學術、正なると偏なると、さまざまあり。初めて書をよむより、此の心得ありて、よくえらびて、おしき學術なれば學ぶべからず。同じく聖賢の書をよみて、おのれはよしとおもへど、かへつて、道にそむけるあしき學術あり。みづからあやまるのみならず、おほく人をあやまるは、うれふべし。聖人の言、及び、人情と時宜とにそむけるは、學術あしきなり。よくえらぶべし。

◎學者、無用のことをしらざること多し。有用のことをばなさずして、無用のことをなすこと多し。おやにうとくして、他人の交したしきあり、急なることはさし置きて、不急なることをつとむ。聖賢の書はつれによまず、雜書を多くよむ、日本の書にうとく、中夏の古事を專にし、皆是れ、本末緩急を失へり。

◎いとまある人、詩歌の才ありて、詠作を好みて、心を樂しましむるはよし。家業いとまなき人の、心なくるしめて、つたなき詩歌を多くつくるは益なし。

◎天地の道、人倫の教、萬物の理、數千年の人、數千年のこと、まことに、天地、古今、人物、極なき廣大の理、廣大の事なり。しかるに、書をよみ學問する力を以て、坐ながらよく知る、其の樂大なるかな。豈、つとめて書をよみ學ばざるべけんや。是を以て見れば、書をよまざる人は、富貴なりといへども不幸なり。書を多くよむ人は、貧賤なりといへども幸大なり。

◎湯桶文字といふは、和俗文學にうとき故に、音と訓とを一にあはせて、物の名にも、ことばにもきつづくるをいふ。湯は訓なり。桶は音なり。訓と音とを合せて、ゆをけに名づけたり。猶かくのごとく、あやまりて名づけしものおほし。

◎書をよまば玩味すべし。唯、一とほりよみたるのみにては、其のこゝろを自得しがたし。よくしづかに心にあぢはひて、其の理をしるべし。くはしく熟すべし。多くむさぼり見るべからず。益なし。

◎書をよんで、つづまやかに、其の要を守るは、まことによし。廣くして守なきにまされり。されども、義理は廣大なり。ひろく學ばざれば、義理詳ならず。熟せずして要約をも失ふ。たとへば、あみを以て鳥をとるに、鳥のかゝる所は、唯一目なれど、あみ廣からざれば、鳥かゝらざるが如し。學ひろからざれば、要をしりて守りがたし。

◎君子と名づけたるは何ぞや。君の位に居て、下民を子の如く、いつくしむゆゑに名づく。是れ、孝經正義の說なり。又、聖人或は賢人をも、善人をも、君子といふ。其の位なしといへども、其の德あればなり。小人とは何ぞ。耳目口鼻の欲にしたがひて、心志の大體を失へる者をいへり。是れ、孟子の言に出でたり。位につきていへば、下にある細民を、小人といふ。

◎書生は、書を多くよみたるまでにて、道理をしらず。文士は、詩文をかざりてたくみに作りたるまでにて、實用なし。是を學問とするは非なり。かくのごとくなる用なき人を、學者とおもひ、すべて、經史の學の實用あるをもすてゝ、無用の學と同じく心得て、貴ばざるは、無學の人の不智なり。

◎やまとうたは、其の意溫雅にして、其の詞やさし。精巧なること、唐詩におとらず。婦人の作る所といへども亦しかり。國字の文、貫之・伊勢・紫式部・清少納言などが作れるも、亦、精巧なり。わが國の詩と文とにくらぶれば、大いにまされりといふべし。是れ、わが國のよろしき詞なるゆゑなり。しかれば、わが國のかなはざるつたなき詩文をつくらんよりは、國俗にかなへる和歌を作るべし。日本の人、詩をつくるは、年長じて唐音を學ぶがごとし。

◎朱子曰、如孝弟忠信人倫日用事、播爲樂章、使人歌之、倣周禮讀法、徧示鄉村聚落、亦可

代今粉壁所書條禁。篤信謂、今世、もし、人ありて、國字を以て樂章を作り、古雅にして諷誦しやすからしめ、孝弟忠信人倫日用のことをいひ、是にまじふるに、古人の嘉言善行を以てして、うたひ物とし、人に敎へて、詠歌せしめば、世敎に補あるにちかゝらん。今、俗のうたひ物の中に、頗る、音聲の淫哇ならざるもあれども、其の詞妄誕多く、其の曲節も急迫にして、衆を眩はし情を亂るに足れり。夫れ、樂は風を移し俗を易へ、人をして、善に感じ惡を化するの具なれば、其の聲音歌章ともに、正しくせずんばあるべからず。

◎青箱雜記曰、張齋賢作詩、自警兼遺子孫、雖詞語質朴、而事理切當、足爲規戒。本邦、平時賴、和歌百首を作りて規戒とし、蜷川親當も、亦、和歌二百首を作りて箴諫とす。しかれども、此の二人、皆、學識なき故に、其の詞鄙俚にして、其の意も亦可なる者すくなし。世敎に志ある人、古歌の意義可なる者をえらび、或は別に和歌を作りて、幼穉の輩を曉さば、亦、人に益あるにちかゝらん。

◎いにしへの歷史通鑑などを通じてよめば、天下の廣き、古今の久しき事、ことごとく見えて、胸中に明らかなり。いにしへのあとを考へて、今來の鑑とすべし。是れ、聖經をたすけ、義理をひろ

く夢ふべし。これ、大なる益なり。又、古來政事をひろく知るも、大いなる樂なり。

◎近世の學者は、理學に執滯して、今世の時宜をしらず。日本の風俗にそむき、もろこしの古禮を、用捨なく今の世に行はんとするは、ひがことなり。

◎後世の儒者、いまだ見識なくして、みだりに佛をそしり、人と爭ふは、ひがことなり。只、わが知るべきことなしり、行ふべきことを行ふべし。人と爭ふは、害ありて益なし。深く戒しむべし。只、わが身をあつくして、人をそしるべからず。朱子、みだりに佛をそしり、人と爭ふことを、甚だにくみいやしめらる。

◎仁義は、道の體なり。文武は、仁義の發用なり。文武其の事同じからず。其の道理は一なり。文は、仁の發なり。武は、義の發なり。文は、人を愛し、衆を和ぐるの道なり。文にあらざれば、民をなつけ、衆を安んずることなし。武は人を戒め、衆を嚴にするの道なり。

◎學問は、日々に進むをむねとす。日ごとに一事をしらば、一月に三十事、一年に三百六十事をしる。十年に三千六百事をしらば、大いに學問すべし。

◎程子の父大中といふ人、其の作れる詩を編錄せられしが、人に見せず、ただわれひとり見てたのしめり。是れ、わが才にほこらず、法とすべし。今の人、わが作れる詩を人に見することをこのむは、わが才に誇るなり。いやしむべし。

◎詩を多く作りても、學問に益なし。詩をよく作る人も、心なくくるしめ、思案せざれば出來ず。かくの如くせざれば、杜子美といへども、よき詩を作らず。いはんや、此の國今俗の詩をや。拙きことうべなり、和歌を詠ずるには甚だ及ばず。しかれば、詩は作らず、只、和歌を詠ずるは、是れ、風俗土宜にかなひて宜しかるべし。

◎詩と文章を作るに、奇怪の文字を好むと、淺俗なる詞を用ふると、此の二をいむべし。是れ、その法なり。今時の人、詩文を作るにめづらしき奇しき文字をこのむ。或は又、いやしき俗語を用ふ。二ながら不可なり。奇なる文詞をなすを以て巧とすること、風俗の惡しき習なり。文詩ともに平易にして、いやしからざるをよしとす。

◎葉少蘊が曰く、文章世の教にあづからざれば、巧なれども益なし。古今の文章、世教になるべきはまれなり。しからば、今、文を作る人も、世教の助となる文を作るべし。

◎謝靈山が文章軌範、文章の學に助あり。文章を學ばば、先づ、論語孟子を熟讀し、次に、文章軌範を以て則とすべし。近年末世のいやしき文を見習ふべからず。

◎本邦の和歌と和文と、詩文とをくらべば、和歌和文は、大におとりて、同日にもかたるべからず。國俗と土宜にかなはず。されど、文章は、其の事をしるし、其の理を述べんために、作らでは事かけぬべし。

◎日の本は、もと溫和慈愛の國なる故に、和歌も、溫雅にして情ふかし。其の上、綺しく巧なること、もろこしの詩にもおとるべからず。和文も亦しかり。然らば、學者も、なるべきほどは、和歌を學び、和文を作るべし。是れ、わが國の風俗土宜にかなひて、國風にそむかざるなり。わが國に生れて、和歌和文をすてゝ、もろこしの風を專につくること、わが國にそむけり。其のつみふかし。わがともがらは、才つたなくて、やまともろこしの才なければ、からやまとの詩文歌詞をつくることかなはず。其の道理をいはば、おそらくは、かくの如くなるべし。

◎小學の書の文義に通ぜば、其の力を以て、類を以ておして、四書を見るべし。四書を見て、其の文義に通ぜば、六經に通ずべし。しからば、小學を以て身を修むるの大法とするのみならず、又、經學の基とすべし。

◎初學の人、朝には經傳を見、朝飯後には經書をよみ、晝は史漢（史記・漢書）の書を見、或は、諸子諸集を見、文字を書きならひ、法帖をうつし、晝飯後には、頭面腹をなで、園圃を步行すること數百步逍遙して精神を舒暢すべし。晚飯の後は、弓を射、其餘の武藝をも習ふべし。夜は又經傳をよみ、或は、經・史・集・子の要語をよみ、唐詩を誦し、和歌をよむべし。故事古語をよみ覺ゆべし。夜臥すにのぞんでは、一日の中の言行を點檢して、あやまり少くんば、心安くいぬべし。日毎斯の如くすべし。

◎書をよみ書を見るには、一書に專なるべし。或は、經を見、史を見て、二書をかぬるも亦よし。一時に、書を數多みるべからず。專一ならざれば、まぎれてくはしからず。工夫わかれては、精熟せずして、功なしがたし。

◎册子をこしらへ、諸書の要語を抄寫して、時々記誦すべし。要語をおぼゆれば、功を用ふること少にしても、其の益多し。故に、要用なることは、必ず、記誦すべし。記誦せざれば、用をなしがたし。

◎史書は、朱子の綱目を、しばらく見て熟玩すべし。古今をつらぬき、義理に通じて、其の益多

きこと、六經四書につけり。古にひろく通ずるのみならず、かれて、義理に通ずる益あり。

◎白樂天、詩を作りて心をくるしむるものをそしりて、詩魔のためにくるしめらるゝといへり。その言うべなり。しかれども、樂天も、亦、此の病をまぬかれず。凡そ、詩を作る人は、此のおもんばかりあるべし。わが身にいたりてはまよひやすし。

武訓上

武に本末あり。忠孝義勇は、兵法の本なり。武德なり。節制謀略は、兵法なり。節制とは、人數をくばり、兵を行る道、是れ、いはゆる軍法なり。弓矢劍戟等の兵器の術は、兵法の末なり。武藝なり。本末ともにそなはるをよしとす。武藝は、兵法を本とし、兵法は、仁義を本とす。此の三の品あることをしりて、其の序をわかち、其の輕重を知るべし。三の者かゝることを得ずんば、忠孝義理の武德をはげむべし。武藝をしらざる人も、忠孝義理の勇あれば、戰功を立て、武名を得る人多し。武藝に達すとも、忠義なき臆病人ならば、戰功を立て武名をとることかたかるべし。君子は本をつとむ。本立ちて道生るとは、是なり。武藝は、まことに學ぶべくして、棄つべからずといへど、必ず、武德を本として、つとめはげますべし。輕重本末あることをしるべし。又、忠義と剛勇とも、本末あり。程子曰、人必有二仁義之心一、而後有二仁義之氣一。仁義の心は、本なり。剛勇は、仁義の氣なり。末なり。仁義の心あれば、勇氣は、おのづから出でくるなり。仁義なくして武勇を好めば、大人は亂をおこし、小人は盜賊となる。

◎凡そ、武士となる者は、忠孝義理の志なくしては、武勇おろそかに、節義闕けて、奉公の道たゝず。又、武士の家に生れ、兵術武藝をしらず、武具をそなへず、軍用乏しくしては、たとひ、心たけくとも、武勇のつとめおろそかなるべし。故に、武士の道、内には、忠孝義理を以て本として、兵法をしり、外には武藝をならひ、武備ともしからざるを以て助とす。武士として、忠孝義理の道を知らず、兵法武藝にうとく、武備なくんば、武士の業を失へりといふべし。武藝は、匹夫の勇のはたらきなり。其の位に應じて學ぶべし。大人は、武藝に專一に心を用ふべからず。藝になづめば、道行はれず。武備は、かれて定め置くべし。平生無事の時、心を用ひ、其の分限に應じて、人馬、武具、家人の兵器、馬具、金銀、米錢等まで、かれてそなへ置き、籍にしるし、不足なく用意すべし。出陣の時にのぞみては、兼れて定めし制法にしたがひ、何の用意もなく、何時も卽時に打立つやうにすべし。凡そ、事豫すれば則ち立つとは是なり。何事も、かれて用意なくしては、俄の時につまづくものなり。

◎武士たる人は、武藝をしらずんばあるべからず。弓馬、刀劍、鎗、長刀、鳥銃、拳法なども、其の法を習はずしては、戰にのぞみて、功をなしがたし。中について、弓馬を尤もまなぶべし、弓馬の二

は、ことさら學ばずしては、ちからつよしとても、妄に其の術行はれず。他の武藝は、よく習ひても、治世に生れては、一生の間、一度も、其のわざ用に立たざることあり。弓馬は、治世にても、日用のことなり。殊に、馬は日々のる物なれば、よく學ぶべし。

◎士たる人は、高きいやしき、弓馬劍戟の法をまなぶべし。武藝をしらざれば、戰に臨み敵に對しがたし。されど、大將たる人は、まづ、兵法をならひて、次に、武藝に專なるべからず。武藝は、ただ、其の大略をならふべし。武藝は末なり。兵法は本なり。有司も、兵法をならふべし。將たる人、武藝のみ知りて、兵法を知らざるは、本をすてゝ、末をとるなり。小身の士は、武藝を、大概は、あまれくまなぶべし。弓馬・劍術・鎗・長刀・投刀・擊劍・拳法・棒・水練など、一事も知らざれば、變に應じがたきことあり。小身の士も、一藝を、すぐれて精しくまなぶは、一事になづみて、他藝に通じがたし。故に、一藝に專一なるべからず。しかれども、もし、士の子弟など、一藝を以て、身を立てんと思ふものは、藝を專にして、くはしく學ぶべし。これ、人の師となるにたれり。かやうの人、もし、あまれく多藝にしては、一藝にくはしからず。くはしからざれば、人の師となりがたし。

◎軍器三十六あり。弓を上首とす。武藝十八あり。射を第一とす。是れ、兵錄に見えたり。中華にても、射を重んじて、武士を、ゆみとりといふ。中華にても、日本にても、弓馬を、武藝の宗とす。太刀鎗の類は、其の術しらざる人も、みだりにたゝかふ人多し。弓馬は、ならはざれは、かりにも、弓を射、馬に騎ることかなはず。しかれば、武藝多き内にも弓馬は、ことに、知らずんばあるべからず。

◎もろこしに、武藝の數多し。射騎を先として、大將もしるべし。刀術槍術も、必ず知るべし。其の外に、拔刀の法、刀をなげうつ法、眉尖刀の法あり。又、鎌と棒とを用ふるにも法あり。法をしれば、皆、用をなし、敵をうつ。又、捕縛の法あり。拳あり。拳は、近年、元賢といふ中華人來化して、此の土にて死す。此の者、此の法を習ひしにはあらざれども、此の法、中華にあることを語る。きく人、是を以て、其の術を、はじめてつくり出せり。

◎兵錄にいはく、士をしらぶる法に曰く、用ふべからざる者五あり。一には、市中に居て、あそびたはぶれて、ゆるやかにそだちたる者。二には、花鎗花刀とて、やり太刀をつかふに、花やかにうつくしきを專にして、敵にかつことを專にせざる藝は用なし。三には、年四十をこえて、ちからよわき人。四には、好んで大言をなして、偽をかひ、あだごと多くいふ人は、實なるはたらきなし。五には、面白く膽よわき人は、つよきはたらきなりがたし。

◎勇怯とは、勇は、けなげなり。怯は、つたなきなり。怯とは、臆病なるをいふ。勇怯は、生れつきたる性により、又、ならはしによる。うまれつきも、ならはしによりて、變じて勇にも怯にもなる。武士の子は、武藝をまなび、武勇なる人にまじはり、その物語をきゝ、むかしの戰記をよみ、勇をはげまし、武をたしなむべし。武士の子も、商人となれば、ならはしとなりて、武道にうとく、勇氣よわくなる。ならはしをえらびつゝしむべし。小成は天性のごとく、習慣は自然のごとしと、聖人ものたまへり。いとけなき時より、つとめ學べば、天性生れつきたるごとくなる。ならひなれたることは、じれんに、つとめずしてよくなるが如しとなり。からもやまとも、軍には、農人は用ふれども、商人は、武士には用ひず。商人は、其の習、專ら、利をはかりて、武士に遠ければなり。農人は、其の心、他の求なく、一筋なれば、士に近し。

◎生れつきに、勇怯あり。勇に血氣の勇あり、義理の勇あり。血氣の勇は、つよきをやぶり、かたきをくだくことすぐれたり。されど、氣つよきのみにて、義なければ、節をまもらず、たのもしげなし。

義理の勇は、節義をまもりて、大節にのぞみて、義を變ぜず、たのもし。たとへば、犬にも、勇犬あり、義犬あり。勇犬は、むかふ所、はたらきつよし。されども、あら野猪出でいかれば、身を引きてのがる。義犬は、つれの時は、愚性ならず、ぬすみせず、人をおそる。けものにむかひて、はたらき、勇犬に及ばざれど、たけくいかれるしゝにあひても逃げず。人の主君のために、節をまもるが如し。

◎將をえらぶには、智を先とし、勇を後とす。智なければ、勇ありても、謀なく思案なくして、兵の道にくらし。勇あるをたのんで、過多し。かくの如くなる將は、やぶれやすし。良將にあらず。良將は、智ふかく、又、勇もありて、敵をはかり、身方をかへりみ、事に臨んでおそれ、謀を好んで事をなす。故に敗れがたし。

◎古人の曰く、いにしへは、兵を農に寓す。事あれば戰はしめ、事なければ武をならはしむといふこと、大將の、必ず知るべきことなり。いふこころは、古の軍法を以て、國を守る君將は、つねに、無用なる士をば、多くはめしつかはず。無用の武士多ければ、國土は限あるものなれば、財祿たらずして、國用ともしく、臣民困窮す。故に、平生用なき武士は、多くは養はず。農人の内、勇無あ

らんものをえらんで、少の祿をあたへ、扶養し置くべし。農人は、商工にかはりて、其の志いやしからず、養をうけ恩をかうぶれば、戰にのぞんで、其の勇氣をはげまして、つたなからず。平生の扶持をあたへ、其の身を養ふの費は、無用の武士をかゝへ置きたる十分一の費なり。無事なる時は、耕作してみづから養ふ。多く祿をあたへざれども、飢寒せず。平治の時は、四時のひまには、狩をして、軍法をまなぶ。戰にのぞんで、軍法ありて兵つよし。

◎金鼓とは、かれ太鼓なり。是れ、陣にのぞんで、一様なるべし。勇者も獨進まず、怯者も獨退かず、三軍力を同じくすれば、其の勢力つよくして、敵にかちやすし。

◎士たる者、戰にのぞんで、身をすつることはかたからず。血氣の勇は、盜賊もよくするものなり。只、身をすてゝ、義にかなふことかたし。故に、死ぬべからずして死ぬるは、是れ、其の身をかろんずるなり。父母よりうけし身をいたづらにするは、不孝なり。死ぬべくして死なざるは、是れ、其の死をおそれ、命をしみて君の爲にせず、不忠なり。是れ、李太白が言なり。年わかく血氣さかんなる人、勇をこのまば、忠孝の道をしりて、生死、只、義にかなふべし。學問なければ、忠孝の道をしらず。

死ぬべくして死なず。いやしむべし。死ぬべからずして死ぬ。かなしむべし。勇怯ことなれども、義理にそむけることは一なり。武士は、學問して義理をしれば、死生する理にかなふ。

◎兵術は、將と士と、貴賤の位によりて、大小の用ことなり。其の位に切なることを、先づ、まなぶべし。主將たる人はいふに及ばず、士卒の長となる者も、兵術をしらざれば、節制に應じがたし。大夫以上の人は、兵術をしるべし。兵術は、武藝の本なり。兵術をしらずして、弓馬劍戟の藝をのみ學ぶを、武學と心得るは、本をすてゝ、末をとるなり。主將たる人、兵術をしらずして、只、武藝のみを好みて、本をしらざるは、物をもてあそべば、志を喪ふの類なり。武藝は、一人に敵する術なり。兵法は、萬人に敵する術なり。

◎甲冑の著やう、旗指物の制法、馬上にて、刀をぬき、鎗をつかひ、敵とくみ合の法、或は、不意に敵に出合ひたる時、敵にきられず、敵にかつの法、凡そ、匹夫の勇のはたらき、刀劍、及、馬藝につきてのわざ、又は、戰場にあらずして、時の變に應ずるの術も、士たる人、習ひしるべし。かやうの術を教ふる師あり。書あり。ならふべし。

◎張南曰、君子不レ避レ難、亦不レ預二於雜一。此の意は、不慮に、のがれがたき難にのぞみて、其の場をはづして、身をのがるゝは、怯なり、義にあらず。是れ、難をさけて身をのがるべからず。又、我が身にあづからざるなり。此の二は、共に理にあたらず。勇にあらず。さればひありて、理にあたることはかたし。道理にそむきて、死ぬまじき時に死し、あたら命をすつるは愚なりといふべし。死ぬべき時に死なざるは、不義といふべし。故に、死ぬべからざる時に死して身を失ひて、死すべき時に死なずして、義を失ふも、共に勇にあらず。理にそむけり。

◎日本の兵術を學んで、文學なき人は、道理にうとし。人に教ふるに、日本の武道は、儒書のごとく、仁義忠信の道を用ふべからず、偏りたればかりさらざれば、勝利を得がたしといふ。又曰く、夫れ、兵は、功を立つるにあり。もろこしにては、魏の曹操のごとく、日本にては、足利尊氏のごとき人は、仁義にそむきて、人の國をうばひたれども、武將の本意なり。もろこしの諸葛孔明のごとく、日本の楠正成のごときは、忠義あれども、功を立つることならず。是れ、武將の本意にあらず。兵は詭道なり。時の勢によりては、わが身方に對しても、いつはりて、表裏を行ひ、人の功をうばひ、或は、國をみだして、逆にしてとるも、兵術に於いては害なし。是れ、日本の武道なり。もろこし

の道を以ては、日本の武道は行ひがたし、日本は武國なれば、もろこしの、正直にして爭ぬるき風俗にては、功を成しがたくして、日本の風俗にはあはず。ひすかしくすゝどくて、人のなしたる功名をもうばひて、わが功名とし、人の取りたる首をもうばひて、わが勇とするが、日本の武道なりなどいひて、祕密して人にをしふ。是をきく人無學にして不智なれば、其の非をしらずして、是を信じ、げにもとおもひ、常の時も、兵術の謀を用ひて、いつはりを行ひ、利を得るを以て、心とする者多し。兵をまなぶ人、多くは是にまよへり。あさましきひがことは、辯ずるにもたらず。又、辯じて人とあらそはんも、いたづがはしく口をし。されど、天下の民は、皆、わが同胞なれば、わが兄弟の、おろかにまよへる人の、あしき方にいざなはるゝは、いとかなしむべきことなり。もだしていはざらんも、むげに仁をうしなひて、なさけなければ、ほいにあらず。われ愚なれども、幼より、ひじりの書をよみ、其の道をたふとべる故、管見をここにのべ侍る。天地の間ひろしといへど、道はただ一のみ。やまとの道、もろこしの道とて、さらに二あるべからず。つはもの〳〵道、儒者の道とて、二道なし。もろこしの武道、日本の武道、また、なんぞ二あらんや。古の道、今の道、是れ亦、かはるべからず。易に曰く、天の道を立てゝ、陰と陽といひ、人の道を立てゝ、仁と義といふ。陰陽にあらざれば、天の道行はれず。仁義にあらざれば、人の道立たず。人に仁義の道あるは、天に陰陽あるが如し。仁は陽德なり。義は陰德なり。仁義の外、別に人の道とすべきものなし。易は、聖人の至れる教なり。萬世の鏡なり。信ずべし。うたがふべからず。兵術も、亦、仁義の道の內の一事なり。文武を以て、人をあはれみ、民をなつくるは仁なり。武を以て、敵をうち、亂をしづむるは義なり。文武の二は、たとへば、車の兩輪のごとく。鳥の兩翼のごとし。一かけては、身を治め、國天下を治めがたし。仁義は、道の元にて、體なり。文武は、仁義を行ふ用なり。用とは、たとへば、火を以て物をあたゝめ、水を以て物をうるほすが如し。故に、仁義の道の外に文武なく、文武の外に治法なく、兵術なし。敵に對して計謀を用ふるは、たとへば、西を攻めんとしては、其の東を襲ふの類なり。かくのごとく、事に臨み時に當りて、敵をはかり、權謀を行ふことは、さも有りなん。前にいへる兵術者の敎のごときは、仁義の道をすて、文武の法に背き、君臣、朋友、およそ、人倫に對し、偽を行ひ、人の功名をうばひて、わが物とし、利を得るを以て、日本の武道とす。しかれども、まことの文武の道よりいはば、是を名づけて、盜賊といふ。利欲を專にして、義理をすつるは、是れ、國を亂すのわざにして、亂をしづむる武の道にはあらず。上を犯し、亂をおこす、亂臣賊子のしわざなり。

日本の武道を以て、盗賊のしわざと同じく心得ること、むげにあさまし。少し心あらん人は、其の非をしるべし。詳に辯ずるにたらず。夫れ、仁義の道、正直にしていつはりなき、是れ信なければ、からもやまとも、古も今も、人道たゝずば、武道も行はれず。主将たる人信なければ、士卒萬民の心を得がたし。もし、表裏多くして、人を欺き、偽をおこなひて、士卒そむきうらみば、百萬の兵ありとも、戰ひかつことかたかるべし。故に、兵の道は、仁義を本とし、信を以て諸人の心を服するにあり。孫子が、權謀を專とせしも、將の道は、智信仁勇嚴也といへり。もし、將となる人、仁義忠信なすてゝ、あはれみなく、なさけなく、表裏を行ひて、まことなく、ただわが身を利せんとし、士卒皆これに見ならひ、化して恥なくば、なんぞ戰にのぞみて、信を守り、君のため、忠義を行ひ、命をすて、節に死する者あらんや。これを日本の武道といふべからざること、辯ぜずして其の非をしるべし。

◎人中にて、我に無禮を行ひ、惡口する者あらば、恥辱にならざることは、聞かざるふりして、堪忍すべし。彼の愚人に對し、いかりあらそふも、本意ならず。されども、彼の者、それをわきまへず、我をはづかしめたりとて、ほこりがほにて、われをあなどり、後日また、われをはづかしむべきうれひを思はば、人なき所にまねきて、とがむべし。もし、人中にて、惡口すること二度に及ぶとも、いかるべからず。道理をいひきかすべし。道理に服せずば、聲をはげましてとがむべし。此の方よりは、惡口すべからず。かやうに、遠慮なく、人をあなどりて惡口する者は、おろかにして、後のわざはひをおもんばからず、必ず、臆病なるうつゝなきしれ者なれば、此の方より、つよくとがむれば、必ず、閉口してめるものなり。されども、わが方よりは、惡口すべからず。惡口すれば、いかなる臆病者も、又、いかりをおこして、たゝかひに及ぶことあり。妄人とたゝかひかちても、我も亦、自殺せずんばあるべからず。これ、一朝のいかりに、其の身をわすれて、其の親に及ぼすなり。不孝不智の至、もとより武勇にあらず。大死といふべし。君父のため、忠孝を行ふべきあたら身を、かゝる妄人に對してすつるは、いとをしむべし。彼の愚人は、人にせめられざればこりず。少しこらして、大いに戒むるは、小人の福なりと、易にも見えたり。凡そ、朋友の交は、たがひに、禮をあつくしうやまふべし。斯の如くなれば、あらそひ出來ず。あらそひは、必ず、無禮よりおこる。鬪論なからんことを議すると、甲陽軍鑑にしるせし、内藤修理が說、うべなり。

◎人を切りて、刀をさやにをさめず、手にもちてにげ去る者に、途中にて行きあひたる時、彼の者、

我に手むかひせずば、其の切りたる理をしらずして、妄に彼と切合ふべからず。遠よりよきて通すべし。あとよりおひ來る人、其の者をうちとめよと、遠ながら言をかけたりとも、其の切りたる子細を知らで、みだりにたゝかふべからず。其の人を切れる故をたづねて、其の者、妄に人をころせしとかたらば、追來る者と共に、おひかけ行くべし。追來る者にきらせ、是を助くべし。或は、わが切らんも、亦、其の時宜によるべし。もしは、父兄主君などの敵をうちてのく者ならば、追行くべからず。君父のかたき打ちたる忠孝の道あれば、人を切りたるとて、きることなかれ、うつことなかれ。およそのこと、用心は臆病にせよ、心は剛にもつべしと、義貞軍記にいへる、俗語の如くにすべし。

◎少壯の時、人の一言をとがめて、口論し、小なる義をはげみ、勇みだてをして、道理なきことに身をわすれ、父母をすてゝ鬪ひ死す、不仁不孝のいたりなり。是れ學問せずして、仁義忠孝の道をしらず、あたら命をすてゝ、道理にそむくこと、愚なるかな。孟子曰く、以て死すべし、以て死することなかるべし、死すれば勇をやぶるといへり。死ぬまじきことに死ぬるは、勇を失ふ。古人の曰く、生を捨つること、豈やすからざらんや、死に處すること、誠にひとりかたしとは、これをいふなり。いふ意は、死ぬることはやすし、死して道理にかなふことかたしとなり。死ぬべき道理に當りて死

ぬるは、死に處する道を得たるなり。もし、死ぬべからずして死ぬるは、愚なる故なり。是れ、犬死なり。

◎勇士は、命をすつること難からず。すてゝ道にあたることかたし。道にかなはずして死するは、犬死なり。たとへば、狂愚なる者の、われに無禮なるをとがめて、口論して、一朝の怒によりて、人と鬪ひて身をすつ、是れ、その身をかろんず、是れ、不孝なり。武にあらず。死ぬべくして死なざる、是れ、命ををしむ、勇なきなり。義にあらず。戰にのぞみ、君のために、節に死なず、是れ、不忠なり。君父のために、忠孝を行ひて、一かどの用に立つべきあたら身を、よしなき少しのことをいかりて、狂人愚人のために命を捨つること、おろかなり。をしむべし。

◎勇にあやまる人は、死すべからずして死す。是れ、仁にそむきて、生をかろんず、孝にあらず。勇なき人は、死すべくして死なず。是れ、義にそむきて生ををしみ、恥をしらず、忠にあらず。

◎もろこしの風俗、昔より、君をいさめて殺さるゝことをしれども、いさむる人多きはなんぞや。其の國の人、うまれつき忠義ありて、風俗も、亦、氣節をたつとぶ。其の上、文字ありて、諫の道をしればなり。是れ、もろこしの長ずる所なるべし。日本の武士は、古より、戰場にて、君のためたゝかひ死して、命ををしまざる人多きはなんぞや。此の國の人は、天性武勇つよく、其の上、昔よ

り、國の風俗にて、名を重んずればなり。是れ、和漢の人の、各〻長ずる所なり。士氣ありて、死をおそれざることは、和漢同じけれども、其の志す所かはれるは、國のならはしにて文を好み、武を尚ぶの道異なるべし。故に、わが日の本は、世界の内にて、すぐれたる武國といふべし。只、中夏に比するに、文學甚だおとれるのみ。

◎いにしへの良將は、只、勇猛計略のみすぐれたるにあらず。文武兼用ひ、寛猛相用ひ、仁愛ありて小過をゆるし、強悪をわすれ、諫をよく聽き用ひて、おのれにほこらず、財ををしまずして功を賞す。故に、士卒和同して、よく其の功をなせり。

◎忠臣義士の、身をすて〻君をいさめ、節に死し、取るまじき財祿をすて、朋友の過を切々正す。かやうに忠直にして、柔弱ならざるを士氣といひ、又、氣節といふ。是れ、君子のことなり。一朝のいかりに、人と爭ひて、其の身を亡すは、士氣にあらず。客氣といひ、浮氣ともいふ。これ、小人のことなり。

◎勇を好む者、其の中を得れば正氣とす。君子の勇なり。士氣なり。中に過ぐれば客氣なり。うはき氣なるは、士氣にあらず。是れ、小人の勇なり。正氣は、よく事を成就す。客氣は、必ず、事をしそんずるものなり。

◎外は勇あるやうに見えて、内心つたなき人あり。外面はつたなく、俄の事にあひて、臆したるやうに見ゆる人あり。心定まりて後に、勇いでくるものなり。是れ、氣よわく、心つよきなり。外愚に見えて、内明らかなる人あり。外明らかにして、内くらき人あり。人の生れつきには、色々くせあり。其の心を知らで、癖を以て、其の人を見あやまることなかれ。

◎呂氏春秋曰、亡國之主、必自驕、必自智、輕レ物といへり。織田信長の亡び給ふも、亦、斯のごとし。信長公は、武勇は古今にすぐれ、其の功を立て、敵を亡し給ふも、多くは、不義にあらず。只、うらむらくは、みづからおごりて、士をあなどり給ひし故、明智がうらみおこる。自ら智ありとして、われひとりの智を用ひ、諫をふせぎ給ひし故、平手中務いさめかれて自殺す。物をかろんじ給ひし故、敵をあなどりておそれず、用心なくして、京都本能寺の要害なき所に、小勢にて留まり給ひし故、明智其の備なきをうかがひしりて、不意によせ來りしかば、ふせぎがたくて、弑せられ給ふ。理にあたれる古人のことば、必ず、差はず。

◎國語といへる古書に、三時は農をつとめ、一時は武をならふといへり。いふ意は、田をつくる農

人は、春夏秋の三時は、田圃をつとめてつくる故、隙なし。冬は田作をはる故、閑にして隙あり。山野にいで〻狩をして、軍陣の法をまなぶ。是れ、一時は武をならふなり。士も、三時は、民のひまをうばはず。農は、春は耕し、夏はくさとり、秋は田畠に出來たる穀をかりをさむ。此の三時のひまなをしみて、つかふべからず。古人は、治世にも武をわすれず。農隙には、年ごとに武をならふ。後世は、亂世にあらざれば、武の學なし。抑、弓馬劍戟は、ことに、まなんで其の術をしるべし。是れ、藝なれば、知らずんばあるべからず。しかれども、是をならふを以て、武の學とするは末なり。

◎事の行ひて宜しきをは思ひきり、いさみてよくつとむれば、義行はれて、あやまりなく、後悔なし。かゝることのさかひのきはを、心おこたりゆるびてつとめざれば、不義となり、おくれとなり、後悔すれどもかひなし。是れ、義を見てせざるは勇なきなり。

武訓下

兵を司る人は、大將も、有司も、兵法をしるべし。兵法は、武藝をいふにはあらず。軍の道を知るをいふ。士卒をつらねわかち、進め退け、命令を下す、是れ、節制なり。是を正兵とす。又、智謀な用ひて、敵をはかり、軍をやる、是を權謀といふ。奇兵なり。此の二は、兵法なり。これ、大將、有司の、必ず、知るべきことなり。又、陣法の中に奇正あり。獨、權謀のみを、奇兵といふにあらず。

◎五倫に對して、わが心畏るゝを以て、其の道行はるる。畏れざれば、心ゆるまりおこたりて、道行はれず。或る人の曰く、晉子がいふ所、畏るゝを以て、人倫の道行はるとは、さもあるべし。しかるに、兵の道、戰にのぞみておそれなば、敵にかつことかたかるべし。いかんぞや。答へて曰く、戰におそれざれば、敵にかつことなし。古の良將は、戰はざるさきにおそれて、敵の兵の多少と、強弱をかんがへしり、身方の強弱をかんがへしる。兵の道をしへ、兵具兵粮をとのへ、諸司と評定し、敵にかつべき計をきはめ、まくべき理なくして出陣し、戰にのぞんでは、おそれつゝしんで計を出し、士卒の心を一にして、敵をくじきやぶる。是れ、敵にかつの道は、おそれつゝしんで專とす。されば、孔子も、子路をいましめて、三軍を行ふ道は、暴虎馮河のおそれざるわざをきらひ給ひ、事に臨みておそれ、謀を好みてなさん人に與し給はんよしを告げたまふ。しかれば、軍法は、ことに、おそれつゝしんで本とすべし。畏るゝとは、つゝしんで用心するをいへり。勇氣なく、臆病にておそれつゝにあらず。

◎武に本末あり。知仁勇の德は本なり。武德なければ、武の道立たず。弓馬刀鎗の類のわざは藝なり。末なり。武藝なければ、敵と戰ひがたし。夫れ知仁勇の三德は、大將、士卒、皆、たつとぶべし。知なくしては、兵を用ひがたし。仁なければ、士卒そむきてしたがはず。忠孝を行はず、義理にそむき、敵をたひらげて、民をやすんずることなし。利欲によつて亂をおこし、かへつて、害となる。勇なければ、仁義忠孝のはげみなく、敵をうちたひらぐるちからなし。故に、知仁の道も、勇なければ、行はれず。凡そ、此の三の者は、武德なれば、一もかけぬれば、武の道立たず。又、弓馬刀鎗の藝をしらざれば、德ありても、戰にのぞみて、敵にかつことかたし。故に、兵を用ふるには、大將も、士卒も、武藝をしらずんばあるべからず。但し、大將は、藝に專なるべからず。本を本とし、末を末とすべし。

◎義貞軍記に曰く、曾我助成・時宗が、親の敵を打ちしこと、後輩これを學ぶべからず。若し、成人の後、かくのごとく、年を送りて、いかなる横死にも逢ひなば、永く本意を空しくして、家の疵なるべし。只、親の敵をばのがすべからず。機嫌をも計るべからず。卽時に押寄せて、勝負を決すべし。敵運あらば、我が命を捨てたらんこと、達しぬとす。篤信謂、此の說、近世の儒、亦、是をよしとする

者あり。我れおもふに、しからず。父の讎ある者は、本意をとぐるを主とす。兵法に、謀を專として、勝つことをとるにおなじ。敵のちから士卒の多少、たとひ、我とひとしき者なりとも、必ず、用意をなし、謀をこのんで、事をなし遂げんことこそ、君子の本意ならめ。敵と我との強弱をはからず、只、卽時に押よせて、なまじひに、卒爾のはたらきして、しそんじたらば、本意をとげずして、人の物わらひとぞなるべき。聖人も、子路を戒めて、暴虎馮河して、死して悔なからん者には、我れくみせじ、必ず、事にのぞんでおそれ、謀を好んでなさんものなりとのたまへり。伍子胥が、父兄の仇を報ぜしも、身を全うして吳王につかへ、吳國の力をかりしなり。若し、伍子胥も、敵身方の勢をはからずして押しよせて、父兄の仇を報ぜんとせば、などか本意をとげんや、張良が、韓の仇を報ぜしも、高祖の勢をかりてこそ、秦楚をば亡しけれ。うつべき時ありてうたざらんは、まことにおこたりといふべし。工藤祐經は、家富み郞徒多くして、用心をなす。祐成、時致、單身にて卽時に押寄せたらば、などか敵を打ちすますべき。只、犬死をこそせめ。されば、義貞軍記の論と、近世の先輩それに雷同せし說、さらに理にかなへりともおもほえず。われ、かつて、曾我記の序において、此の事を詳に論ぜり。

◎小を以て大につかふること、是れ、理の當然にして、天にしたがふ道なり。時の勢をしりて、大にしたがふは、智者のする所なり。小を以て大にしたがはざるは、禮義にそむき、時勢をしらず、はては、國家と身とを失ひ、敵身方おほくの命をころす。是れ、天にそむけるなり。無學にしておろかなる人、武道をしらずして、小を以て大にしたがひ、弱にして強にしたがふを恥辱とおもひ、血氣の勇にほこり、大敵をあなどりて、敵の勢のさかんにして、我が力の敵しがたきことをしらず。是れ、孫子が所ㇾ謂、我をしらず、彼をしらざるなり。小を以て大にしたがはずして、兵をおこし、下として上をおかして、亂をおこし、義理にそむくは、是れ、血氣の勇にして、武にあらず。武を瀆すといふ。かゝるやまとも、かくのごとくにして、國家をうしなひ、身をほろぼして、天下後世のあざけりとなれる人多し。愚なりと云ふべし。近世にていはば、江州の淺井、越前の朝倉が、信長にしたがはず、小を以て、大につかふる道をしらざるなり。皆、義の田原の北條氏が、秀吉にしたがはざる、これ、小を以て、大につかふる道をしらざるなり。皆、義のある所にあらず。つひに其の家を亡し、身を亡して、義にそむき、おほくの身方と敵とを殺せしこと、仁にそむく。是等の人の行ひしこと、皆、不仁・不智・無禮・無義といふべし。安藝にありし小早川隆景は、毛利輝元八ヶ國の主として大なりしかども、輝元をすゝめて、はやく、秀吉に屬せしめ、人

質を出し、信長襲じ給ひし後も、和義を變ぜずして、秀吉に屬し、つひに其の父元就の領せし八州の地を失はず。智ありといふべし。又、信長、秀吉の功臣に國を給はりしは、其の國にいまだ服せざる者多しといへども、たひらげよとて、國をさづけ給ひしに、其の國さぶらひ、一國に五人十人もありて、小身ながら、皆、小城をもちて、その國主にしたがはず、國主にそむくのみならず、天下の主にそむくは、是れ、小を以て、大につかふる禮義をしらず、其の上、國主と、天下の主にそむきては、小身の城主、身をたつべきやうなき時勢をしらず。不智といふべし。禮義にそむき、時勢をしらずして、つひに家と身とを失ふ。愚の至なり。時勢をしりて、早く降參したる者は、皆、災なくして、家をたもてり。或は、君に對し、謀反をおこし、亂臣にくみし、亂逆を助けて、其の君を亡しても、幸ひにわが身を立てし者あれども、是れ、不義の至、にくむべし。家をおこせしも、榮とすべからず。恥とすべし。況んや、かくのごとき者は、家をやぶり、身を亡せるともがら多し。

◎天下太平なれども、武をわするればあやふし。故に、治世にも、亂を忘れず、武事をまなぶべし。無事なる時、武をならはば、後悔なかるべし。遠き慮なければ、必ず、近きうれへあり。亂にのぞみて兵をならふは、渴にのぞんで井をほるがごとし。

◎敵に對し勝負を爭ふ時、はやり過ぎて勇むを貴ばず。しづまりてこらふるを貴ぶ。是れ、敵にかつ道なり。只、忍ぶをかたしとす。忍は、こらふるなり。敵に對して、しづまりてよくこらへ、はやく爭を出して、まづうごくべからず。勇み過ぎてこらへず、はやり過ぎてまづ動けば、敵わが非を見てうつゆゑに、わがまけとなる。兩人相戰うて、勝負いまだわかれず、敵の動きを見て、其のすきをうてば、かちやすし。此の故に、先づ動く者はまけ、後起るものはかつ。忍は、まことに一字千金の兵法なり。おろそかにおもふべからず。是れ、古人の說なり。三略にも、變動は常なし、敵によつて轉化す、事の先とならず、動きて則ちしたがふといへるが如し。はやり過ぎて、こなたより早く動けば、まけやすし。よくこらへて動かざるはかたし。故に、よく忍ぶをたつとぶ。かろがろしく動くべからず。利を見ずして、妄に動けば、敗れやすし。君子は、重をもつて輕を制し、靜を以て動をまつ。神全く氣定まりて、心うごかざるをたつとぶ。

◎或る武人、敵と戰ふ、兩人戰ふ時のこころをよめる拙き歌あり。「身はすてつ心ばかりはふらさじ人のうごきをまちてぞうつべき」。いふ心は、敵と戰ふにのぞまば、身はすつべし。身をのがれんとおもへば、心みだれ、おそれひるみて、敵にかつべきちからなし。されど、心ひとつは失ふべからず。

敵とたゝかふ時に、常のごとくにして、心を動すべからず。わが方より、みだりにかゝらず、こらへて早くうつべからず。人の動きをまちて、其のすきまを見て、はやくうつべし。是れ、敵にかつの道なりといへり。

◎士となる者、平生は、溫厚和平にして、怒をおさへ、色をはげしくすべからず。みづから樂しみ、人を愛すべし。されども、常に志をたもち氣を養ひて、義理にいさむべし。變にあひては、平生の志を守りて、勇剛を失ふべからず。いかなる大事にのぞんでも、かたく此の道を守り、心を動すべからず。勇氣をふるひおこして、強敵に俄にあひてたゝかふとも、心をしづかにしてうごかすべからず。勇者は、其のかうべをうしなふとも、此の道をわすれずして、心にかなしみうれふべからず。死にのぞんでもおそるまじき理をあきらめ、平生勇氣をやしなふべし。義ありて性剛強なる人は、此の志なたもちやすし、柔弱なる人も、常に義をたつとび、此の志をたもちて失はざるべし。士の子も、わかき時より、武勇に志なければ、節にのぞんで、心拙くしておそる。四民ともに、常に氣を養ひて、心をうごかさざる工夫をわするべからず。氣の強弱は、人の生れつきによれども、勇にして、節義を守る志は忘るべからず。勇者は、おそれず。又、勇士は、其のかうべを失ふをわすれずとは、

死に臨むまで、此の義を守る志をわすれずとなり。

◎勇者は、外をあらくせず、荀子が、能く定まつて後能く應ずといへるが如くなるべし。いふ意は、敵にむかひては、心をしづかに定めて、うごかさずして、よく敵にかつ。外に氣をうごかして、かるがるしくさわがしきは、内に敵に應ずべき根なし。人にかちがたし。

◎いにしへの、勇猛人にすぐれたる將、よく武功を立て、草創の業をなすといへども、智なければ、守文の功を成して、長くたもちて、子孫に傳ふることかたし。故に、武將は、智を先とす。勇は、其の次なり。

◎師に克つこと、和にあり。衆にあらずと、古人いへり。いふ意は、軍にかつには、士卒將に和順にして、其の下知にそむかず、一同にちからを合せて、身ををしまずして戰ふにあり。大軍なりとて、たのむべからず。若し、士卒の心、將に思ひつかず、そむきはなれて、其の力を同じくせずして、一に和せずんば、百萬の衆ありても、軍にかちがたし。和とは、和合なり。天地和合すれば、萬物生ず、九族和合すれば、家道行はる。君臣和合すれば、國家平らかなり。

◎兵を用ふるは、誠に武威を貴ぶ。しかれども、仁義の道なければ、諸人の心從はず。武を用ひがたし。

◎良將のいくさは、はかりごとよく、おもんばかりくはしくして、かちやすきにかつ。故に、士卒多くはうち死なし。愚將暗主は、此の理をしらずして、敵身方士卒の多く死するを悦ぶは、不仁なるのみならず、軍の道におろかなる故なり。上兵は、戰はずしてかつをよしとす。若し、やむことを得ず して戰ふとても、軍の道よく、はかりごとある故に、良將は、敵をも、身方をも多く殺さず。古人の曰く、將となること三世なれば、子孫なし。いふ意は、天道は、不仁をにくみ、殺すことをこのみ給はず。およそ、天の下の人は、皆、天の子なれば、其の子をころすことをにくみ給ふゆゑ、人を殺すことをこのめば、其の子孫絶ゆとなり。仁者は、將となりても、人を多くころさず。しからば、將たること數代なりとも、何ぞ害あらんや。若し、不仁にして、人を多くころしたる人は、三世にかぎらず、一代將となりても、其の子孫斷絶せし人、古今、其のためし多し。天道不仁をにくみ給ふこと、これを以て知るべし。其の理たがはず、うたがふべからず。天道おそるべし。明らかなり。

◎漢高祖の父太公を、項羽俎にせしに、高祖の求め切ならざる故、項羽つひに太公をかへす。明の英宗を、北狄にいけどり行きしを、其の子宣宗、はじめ郤王と稱せしが、父とらはれとなり給ひし後、帝位につきて、其の父を、はるかに尊んで、太皇帝と稱す。宣宗、北狄に父を乞はず、父とらはれとなり給ひしこと、何ともなげなりしかば、北土に英宗をとらへ置きても益なき故、北虜つひに英宗

をおくりかへせり。是れ、高祖、宣宗の心は、不孝によれるか知るべからず。其の計はよし。父を敵いけどり行きしを、追ひかけ、父も敵も打亡したることありとなん。後世の人評して、或はほめ、或はそしる。其の時、父をきらず、只、父のあとを、堅固に領し、兵勢をつよくふるひなば、敵は、おのづから其の威に服し、其の父をいけどりて、とぢこめ置きても、益なきことをしりて、其の父を、此方より求めずして、送りかへすべきに、年わかき人は、俄の事にて、其の思慮なく、又、古のふみをみず、高祖、宣宗の行ひしことをしらず。しかれば、武將も、古の記錄を多くよんで、ふるき事を知るべし。文盲にては、古のことをしらず。鑑とすべきやうなし。われひとりの才智をたのみては、必ず、あやまり多し。よき道をしらざれば、才勇ありて、善を好む人も、まことの理にあたらずして、あやまりおほし。

◎弓をみたらしといひ、太刀をみはかしといふこと、子細あり。

◎三代の將、道家の忌む所、將はおほく人を殺す故、父子孫三代つづきて將となれば、人をころすこと多し。天道のにくみ給ふ所なる故、必ず、子孫ほろぶ。天道おそるべし。もし、良將人を殺すことを好まずして、戰はずしてかち、謀を以て敵を降らしめ、戰にのぞんでも、陣をおしくづして敵に

かてば、敵身方、人は多く亡びず。故に、良將の戰は、敵も身方も、人多くは殺さず。暗將は、兵の道をしらず、敵を多くころすを手がらとおもふ、愚なり。人を殺すことを好まずんば、將たること幾代つづきても、家の亡ぶるにはいたらじ。

◎敵と戰ふに、かち過しては、敵取つて返して、つよく戰ふものなれば、必ず、はじめのかちにて、早くやめて、少し手ぬるきやうなるが、後の禍なし。匹夫の寄合ひ口論するも、惡口をしすごし、人にかち過せば、其の人堪忍せずして、強くしかへせば、おくれを取ることあり。古の良將の兵法、大いにかたず、又、大いにまくることなし。是れ、良將の兵法なり。兵をしらざる將は、幸ひにして大いにかつことあり。又、大いにまくること多し。是れ、良將の兵を用ふる法にあらず。さきがけをするも、此の心得あるべし。我一人ふか入すれば、幸ひにして手がらをすることあり。又、やみやみと、敵にうたるゝこと多し。

◎將たる人、號令明らかにしてあやまらず、賞罰信ありてちがはず、士卒と苦樂を同じくし、われひとり樂しまず、寒暑も士卒と同じくし、士卒をいたはりてくるしめず。かくの如くすれば、士卒上におもひつきて、死力をつくす。

◎君のため、生をしまずして戰ひ、死をかろんずるは、士卒のことなり。死をかろんぜず、かるがるしく戰はず、生をおもんじ、命を保つて、敵にかちを、わが軍を敗らざるは、大將のことなり。故に、大將の道と、士卒の法と同じからず。大將も、敵をあなどりて、深入するは、不覺といふべし。眞の勇にあらず。長遲すれば、弱敵も、窮鼠却つて猫をかむのうれへあり。弱敵には、殊におそるべし。勝ち過せば、おくれをとることあり。

◎一時の口論によりて、鬪爭に及ぶは、必ず、あらそひなく、敵なし。又、恥なし。人に對するには、言にも、がめて、堪忍せざるなり。忍べば、あらそひより起こる。あらそひは、人の過言無禮をと身のふるまひにも、禮をあつくして、無禮なかるべし。

◎神功皇后の、新羅をせめに行き給ひし時の軍令、日本紀に出でたり。もろこしの良將の軍令にもまさりて、貴ぶべし。

◎挑戰といふことはいかん。兵を合せ戰はんとするにまづ、勇士をさきに出して、敵をうたしむるといふ。本邦にて、近古、豐臣秀吉の、巢田勝家と戰はんとて、まづ、近江の賤が嶽に陣せられしに、兩陣より、たがひに、兵を出して戰はしむ。秀吉の勇士七人、先がけして敵を退けたり。かくのごとくするを、挑戰といふ。

◎武士を、物の部といふこと、神武天皇の御時、宇麻志麻治命と、道臣命と、軍兵を具して、內裏を守る。道臣命の司れる軍兵なれば、兵といふ。宇麻志麻治命の司れるを、物部といひし故なり。

◎戰陣に川を渡すに、河邊にのぞんで、のり入る所と、向ひのあがり所を、よく見定むべし。むかひあがり場あしければ、あがりにくい、敵にうたれ、身方に越さる。川ほりなどありて、馬にて飛びこすべきとおもふ所は、かれて馬をのるに、馬の足をはやめ、其の勢を以て、飛びこさすべし。かちだちにて、はしり越ゆるも同意なり。

◎敵、川を越來るを待ちて戰ふに、古法に、半渡るをうつといふ。半渡るとは、敵、川半まで渡り來るといふことにはあらず。身方は、川ばたより、二三町ほど引退きて、陣をなし、敵の川をこし來るをうつ。敵兵半ば岸よりあがりて、備いまだ定まらず、半ば未だ川中にありて渡る時、此方よりきそひかゝりて、敵の備なきを急にうつて、敵を川に追ひはめうつをいふ、是れ必ず、利ある謀なり。

◎大將の旗を立つるに、春夏は、將の左に立て、秋冬は、將の右に立つ。是れ、陰陽にしたがへるなり。

◎使番は、敵陣をうかがひ、大將の心を、身方の士卒にいひ渡す役なり。軍の道をしれる、少しな

りとも智仁勇ある功者を用ふべし。士卒を励まし、士卒を弱め、士卒を殺し、士卒の心、大将に和し、大将にそむくも、使番のしわざおほし。必ず、其の人をえらぶべし。自餘の有司より、其の職重し。

◎古人の出陣は、畏の禮を以て是を行ふ。軍の命下る日は、士皆なきて涙を流す。父母兄弟にわかれんことをかなしめばなり。戦をなすこと、必死の道なれば、かくのごとくすること、うべならずや。

◎良将の兵を用ひて戦ふには、士卒のこゝろを同じくし、力を一にして、一同に進み、一同に退かしむ。勇者も一人すゝまず、一同に、下知にしたがひて、進ましむ。怯き者も獨退かしめず。退くべき時は、下知にしたがひて、一同に退かしむ。一人ぬけがけし、さきがけすれば、陣法みだれて、軍の勢わかれ、よわくなる。吳子が、ぬけがけして首を取りたる勇士を切りたるも、此の意なり。

◎左傳に、晉の隨武子が、曰、見レ可而進、知レ難而退、軍之善政也。凡そ、兵を用ふるに、進も退も度あり。度を失へばやぶる。進むべからずして進み、退くべからずして退くは、度を失ふなり。進むべくして進まず、退くべくして退かず。これ亦、度をうしなふなり。

◎敵陣に向つては、進むべくして進み、退くべくして退く。是れ、和講に、かゝるも引くもなりによるといふが如し。戦の道、進退によき節あり。勇者は、進むべからずして進み、退くべくして退かず。

是れ、軍法の禁ずる所なり。大過とす。進むべくして進まず、退くべからずして退く。此の四のものは、勇怯同じからざれども、共に軍法のしわざなり。不及とす。これ亦、軍法の禁ずる所なり。進むべくして進まず、退くべからずして退くは、是れ、怯者に害あり。軍法に従ひては、勇者も獨り進まず。怯者も獨り退かず。皆、力を一にするは良将の兵なり。

◎かゝるには、さきにすゝむを勇とし、引くにあとにあるは、猶もやすし。退くにあとにあるは、甚だかたし。

◎凡そ、大将として、兵を用ひて戦をする道は、義と、術と、勇と、知との四そなはるべし。第一、義を質とすべし。戦をおこすに、義か不義かをかへりみるべし。軍法調ひ、兵つよくして、敵にかつことと必定なり。うつべき敵にあらずして、戦をおこすは不義なり。戦をおこすべからず。是れ、義を質とするなり。次に、戦をなすには、必ず、術あるべし。術とは、陣を備へ、敵にかつてだての法なり。戦の術をしらざれば、敵にかちがたし。萬の事、皆、術を量りてなすべし。殊に、戦は、死生存亡のわかるゝ所、尤も其の術をしるべし。術なくして戦へば、必ず敗る。次に、戦なすには、勇あるべし。勇なければ、敵をやぶるに力なくして、辨なし。又、知以て成すべし。知なければ、

始終軍の道成就せず。故に、兵の道は、知を以て始をなし終をなすなり。凡そ、君子の兵を用ふるには、此の四の者備らずんばあるべからず。

◎五兵の内、義兵、應兵は、君子の用ふる所なり。忿兵、驕兵、貪兵の三は、君子の用ひざる所、小人の用ふる所なり。

◎范文正公の曰く、將の、古今の事を知らざるは、匹夫の勇なり。大將は、ひろく學問して、古今の事に通じて知るべし。一人の勇をたのむべからず。それは、匹夫の事なり。

◎兵を用ひ軍をおこすは、仁義によつて行ふべし。是れ、文武を用ふるなり。もし、文武によらずして兵を用ふるは、盜賊とすることをまぬかれがたし。凡そ、兵を用ふるは、天地の物を生ずる仁心にそむく。聖人は、やむことを得ずして、兵を用ひ給ふ。是れ、天道を行ひ給ふなり。聖人の兵は、其の義を行ひ給ふ。仁その中にあり。程子蝎の頌に、殺レ之則害レ仁、放レ之則傷レ義。是れ聖人の兵を用ひ給ふ心なり。

武訓終

五常訓 卷之一

總論

およそ、人となれる者は、天の大德をうけて生れ、其の心に生れつきたるものあり。名づけて、性と云ふ。是れ卽ち、天地の萬物を生じ給ふ大德の生理なる故に、性の字、心にしたがひ、生にしたがふ。この性の内、おのづから、五の德あり。名づけて、五常と云ふ。古今天下の人、たかきいやしき、さかしおろかなる、皆、おしなべて、此の五の德を生れつきて、心にそなはれること、古今かはることなし。こゝを以て、五の常と云ふ。常とは、やはらざるを云ふ。此の五常の性は、人の人となれる理にして、人の萬物にすぐれて貴く、禽獸にかはれる所こゝにあり。此の五の性にしたがへば、五倫の道是より行はれて、人道是によりてたつ。故に、天下の道理、是より出で、道の本根とす。故に、おほよそ、人たる者、此の理を知らずんばあるべからず。五常の性は、體なり。其の理ときがたし。用にあらはれて、見えやすきを以て、其の字義をいはば、愛を仁と云ふ。愛は、あはれみなり。宜を義と云ふ。宜とは事物に相應するを云ふ。各〻、其の事につきて、理に當るなり。理を禮と云ふ。理と

は、人なうやまひ、事に則ありて、正しくすぢめあるを云ふ。通ずるを智と云ふ。道理に通じ、是非をしるを云ふ。守るを信と云ふ。いつはりなくして、道をかたく守りて、變ぜざるを云ふ。此の字義は、周子の說なり。韓子曰、人之所レ性者五、曰仁義禮智信。是れ、人の性に、此の五の者そなはれることをいへり。故に、又、五性とも云ふ。此の五性をすべていへば仁なり。故に、孔子は、只仁の一字を以て、をしへとし給ふ。是れ、易に、天地之大德曰レ生といへる意に本づけり。天地の、萬物をうみ給ふあはれみの理、人の心に生れつきたるを仁と云ふ。仁は、人心の全德なり。故に、仁の一理を以て、義禮智信をかね、又、萬の善をすべたり。春の氣を以て、夏秋冬を兼ぬるがごとし。されども、易においては、人の道をたてゝ、仁と義といふ、仁義の二をつられて說き給へり。是れ經書に、仁義をつられ說ける初なり。孟子に至りて、孔子の道をひろめて、仁義をもはら說き給ふ。仁義の二にて、萬善行はれ、人道たつこと、天に陰陽ありて、天道行はるゝがごとし。されども、孔子の說き給ふ仁の外には出でず。只、仁の一理をわかちて、仁義といへるなり。たとへば、一年の內、元氣の流行は一すぢなれど、動靜の分あるを以て、わかちて陰陽といへるが如し。又、孟子、はじめて、仁義禮智の四德をつられて說き給へり。これ又、仁義の外、禮智あるにあらず。禮は仁よりいで、智は義の內

にあり。朱子の、禮は仁の著るゝなり。智は義の藏るゝなりといへるがごとし。仁義をわかちて四德をとくは、陰陽をわかてば、春夏秋冬の四時となるに本づけり。前漢の董仲舒曰、仁義禮智信五常之道、王者所レ當二修飾一也といへり。是れ、四德に信をくはへて五常をとける始なり。四德の外、別に信あるにあらず。四德の、まことありていつはりなきは、卽ち信なり。信なければ、仁義禮智にあらず。たとへば、四時の內に土用ありて、木火金水の氣行はるるがごとし。木火金水も、土なければ生ぜず。是れ、董仲舒の、はじめて、說き出せるにもあらず。上代より、すでに、此の說あればなり。

◎人心の德は、本ただ、仁の一理なり。分れて、仁義禮智となる。又信を加へて五常とす。たとへば、一年は、只一氣のめぐりなり。二にわかてば陰陽となる。春夏は陽なり。秋冬は陰なり。陽陰を、又、わかてば、春夏秋冬の四時となり、土用を加へて、五氣となるがごとし。一日の內をも、二にわかてば、晝夜となり、又、わかてば、朝晝暮夜の四となるが如し。

◎人の心にそなはれる仁義禮智の四德、其の根本いづくにあり、いづくよりうけたるや。曰く、是れ、その根本、天にあり。天より出でゝ人の心にうまれつきたり。其の根本、天にあり、天より出でたるとは、いかんぞや。曰く、易に、天地の大德曰レ生。大德とは、大なるめぐみなり、生とは、萬物をう

みいかすを云ふ。天地別に心なし。人と萬物をうみいかすことを以て、心とし給ひ、これを以て、いにしへ今、かぎりなき人物を生じ給ふ。此の心を生と云ふ。即ち、生理なり。又、元と云ふ。是れ、天地のめぐみ、物をあはれみ給ふ大徳なり。其の生理、一年の内、春夏秋冬にめぐり行はれて、元亨利貞の四徳となる。天に此の四徳ありて、天道常に行はるゝがごとく、人に仁義禮智ありて、人道行はる。人は天地の子にて、天地の、物をあはれみ給へる御心をうけて、心とす。是を名づけて仁と云ふ。仁は、即ちあはれみの心なり。此の仁の理をわかてば、仁義禮智の四徳となる。天の元氣の生理をわかちて、元亨利貞といふがごとし。是れ、人の仁義禮智の四徳の根本は、天道の元亨利貞より出でたり。天にあり、人にあり、其の理は一なり。董子のいはゆる、道の大原は天に出でたりといふは、是なり。

◎仁義、二理あるにあらず。仁の節あるは、義なり。義は其の内にこもる。仁義をいへば、禮智は、其の内にこもる。仁は禮をかぬ、義は智をかぬ。春は夏をかぬ、秋は冬をかぬるがごとし。夏は、春氣の長ずるなり。冬は、秋氣のかくるゝなり。仁義を以て、禮智をかぬるは、禮は、仁のあらはるゝなり。義は、智のかくれたるなり。義の善悪をたちわかつこと、利刀の物をたつが如是れ、仁禮一理なり。智は、義のかくれたるなり。

くなるは、智の是非することの明らかなるよりいづ。是れ、義智一理なることを見つべし。仁禮は陽に屬し、義智は陰に屬す。仁義の二をいへば春生し、夏長ずるは、仁なり。秋收め冬藏るゝは、義なり。四徳にわかちていへば、春は仁なり、夏は禮なり、秋は義なり、冬は智なり。

◎人に仁義あるは、天に陰陽あるがごとし。天に陰陽なければ、造化の理ほろびて、四の時行はれず、萬物生ぜずして、天地の道立たず。人に仁義なければ、心の徳ほろび、五倫の道行はれずして、人道立たず。禽獣と何ぞ異ならんや。故に、易に曰く。天の道をたてゝ陰と陽といふ。人の道をたてゝ、仁と義といふ。

◎仁義禮智の四徳、古今、天下の人の心に、皆、生れつきてそなはれること、何を以てか知るや。四端あるを以てしれり。四端とは、惻隠・羞悪・辭讓・是非を云ふ。是れ、仁義禮智の四徳、心の内にありて、物にふれて、おのづから、心上におこりて、外にあらはるゝを云ふ。故に、四端と名づく。端とは、物内にありて見えずといへども、其のはし、すこし外にあらはれ出づるを以て、其の物の内にあることを知るがごとし。仁義禮智の性、心の内にありて、いまだおこらざる時は。其の有無見るべからずといへども、物に感じておこり、用となるにいたりて、仁は惻隠となり、義は羞悪となり、

禮は恭敬となり、智は是非となる。もし、内に仁義禮智の四德なくんば、心、此の四端あらはるべからず。内にある故に、外に四端あらはる。是を以て、人心の四德ある證とすべし。惻隱は、いたみいたむとよむ。人のうれひ苦しむを見ては、あはれみいたむを云ふ。是れ、仁の心のあらはるゝ端なり。もし、人のうれひくるしみを見ながら、あはれむ心なくんば、仁なきなり。羞惡とは、はぢにくむとよむ。にくむとは、きらふなり。わが不義なるをはぢ、人の不義なるをきらふ。是れ、義の端なり。もし、人の不義をきらはず、わが不義をはぢずんば、義なきなり。辭讓は、我が身にとるを辭退してうけざるは、辭なり。人にゆづりてあたふるは讓なり。飮食するを以ていはば、飮食を辭して、まづ人にゆづりあたふるを云ふ。是れ、禮の端なり。もし、ゆづらずして、あらそひうばはば、是れ、禽獸のわざにして、禮にあらず。是非とは、事の善なるを善としりて是とし、不善なるを不善としりて非とす。是れ、智の端なり。もし、是非をわきまへずんば、智なきなり。此の四端は、人となれるものは必ずあり。此の四端あるを以て、仁義禮智、内にあることを知るべし。又、いかなる人も、おやを愛し、君をたふとび、兄をうやまひ、弟をあはれみ、善をほめ、惡をにくまざるものなし。是れ、仁義あればなり。飢寒する人を見ては、あはれむ心おこるは、仁あればなり。又、

小人といへども、わがいつはりあらはれ、不義を人にしらるれば、赤面し、汗をながす。是れ義あればなり。凡そ、かやうの類、物にふれて、善心おこること多し。みづから心見てしるべし。皆是れ、仁義禮智の四德を生れつきたるにあらずや。こゝを以て、孟子は、人の性は善なりとのたまふ。もし、五常の德なくんば、なんぞ、性は善なりといはんや。猶もせちなることなくいはば、孟子の審に見えしごとく、只今三四歳なる小兒が、井のはたにあるを見ては、いかなる至愚極惡の人も、おどろきかなしみて、すくはざるはなし。是れ、其の子の父母にしたしみあるにあらず、人の子を救ひたるとて、ほまれを求むるにあらず。又、見すてたりと、人にいはるゝ惡名をおそるゝにもあらず。只、天性にうまれつきたる仁愛のまことの心より出づるなり。これによりて見れば、人皆、此の善心うまれつきて、心にそなはれることを知るべし。君子の道を行ふ工夫は、わが心の内にある四端の善心の、すこしきざしたるを養ひそだてゝ、外におしひろめ、十分に行ふにあり。たとへば、火のはじめてもえ出でたるを打けさずして、ふきおこしきかんならしむれば、ひろき原、大なる山をも、やくがごとし。昔もろこしの齊の宣王は、一牛をころすをなさけなくおもひ、たすけられしは、誠に、惻隱の心、善心の發なり。されども、わが國の多くの人民

の飢寒をすくはず、是れ、牛を愛する仁心はありながら、其の仁心をおしひろめて、萬民に及ぼす工夫なくして、民を飢寒せしむ。火のはじめてもえ出でたるを打けしたるがごとし。物をやくことあたはず。およそ、人の善を行はずして、不善をするは、皆、其の善心あるをおしひろめざるなり。善をするは、皆、善心の内にあるを、外におしひろむるなり。親につかふるに、親を愛する一念あるは、善なり。これをおしひろむれば、大孝にいたる。もし、これをすてゝ、おしひろめざれば、不孝となる。自餘も、皆、此の類なり。故に、善と惡とは、此の心をおしひろむると、おしひろめざるとにあり。心には此の善端ありといへど、おしひろめ行はざれば、生れつきたる天性をそこなひすてゝ、行はざるなり。是れ、いはゆる自暴自棄なり。おしひろむれば、天下四海をもをさむるにたれり。もし、おしひろめずして、打ちすつれば、至りて近きわが父母につかへて、孝をなすことも成りがたし。いはんや、萬民を治むるをや。堯舜の仁、湯武の義は、至りて大なれども、此の善心をおしひろめ給へるなり。桀紂が惡は、此の心をおしひろめざるなり。しかれば、四端をおしひろむると、おしひろめざるとは、善惡と、君子小人と、國家の治亂とのわかるゝ所なり。

◎天地のめぐみをうけて、わが身に生れつきたる四德なれば、人の人となれる道理、こゝにあり。し

かるに、此の道理をしらず、且つ、人欲にくらまされ、是をすてゝ行はず。天地の德にそむき、人の道をうしなふこと、かなしむべし。此の四德をうしなへば、人とかく生れたるしるしなく、鳥けだものに同じくして、草木の、天地のめぐみのまゝに生長し、枯れしぼみて、人のやしなひとなり、妨とならざるには、はるかにおとれるぞあさましき。人は萬物の靈とて、天地の内にて、いと貴き物なれど、天地の性にそむき、人の道をうしなはば、禽獸に近くて、たふとぶにたらず。是れ、みづからわが身をいやしくもちくだすなり。豈、いやしむべきことならずや。

◎仁義の道は、わが心の外に求めず。幼稚なる童も、其の親を愛することを知らざるはなし。其の長ずるに及んでは、其の兄をうやまふことを知らざるはなし。親を愛するは、仁なり。兄をうやまふは、義なり。こゝを以て、仁義はわが心に、もとより、生れつきたることをしるべし。且つ、親を愛し、兄をうやまふは、たれも、知りやすく行ひやすし。甚だ高くして、知りがたく行ひがたきことにはあらず。此の二にもとづきて、其の心をおしひろめ、萬事に行ひ及ぼさば、仁義行れて、人道たちぬべし。

◎人の性とする所、只、仁義禮智信の五字なり。天下の道理、此の外に出でずして、ことごとく此の内にあり。是れ、萬善の出づる所の根源なり。五常の性にしたがひて、五倫の道を行ふ。聖賢の教ふ

ろところ、學者のまなぶ所、此の外にこれなし。

◎五常の性にしたがひて、私欲のわづらひなく、只、其の自然に打まかすれば、人倫にまじはりて、其の性の善あらはれ、人倫の道行はる。中庸に、性にしたがふを道と云ふ、是なり。此の性にしたがひ行へば、親には孝し、君には忠し、夫婦正しく、兄弟むつましく、朋友に信あり、萬の善、皆、これよりいづ。國家を治め、天下を平らかにするも、皆是れ、五常の性にしたがひて、行ひ出せるなり。こゝを以て、人道たつ。聖人の聖人たるも、亦、五常の性にしたがへばなり。天下の道理は、五常の外にいでず。

◎おほよそ、人となるものは、萬物にすぐれ、五常の性を生れつき、道あるものなれども、食をあくまでくらひ、衣をあたゝかにき、家をかまへて、身をやすくしたるまでにて、道のをしへなければ、かたちは人なりといへども、其の心、其の行は、禽獣にちかきこそうらめしけれ。古の聖人、是をうれひ給ひて、學校をたて、師をたてゝ、人たるの道ををしへ學ばしめ給ふ。されば、事の急ならざるやうにて、いたりて大切なることは、學問よりおもきはなし。いかんとなれば、道は、しばらくもはなるべからず。人學問なく、道をしらざれば、人の道たゝず。人と、かく生れつきたるかひなし。人

生、ふたゝび得がたし。道をまなばずして、むなしく過すべからず。こゝを以て、朝に道を聞きては、夕に死すとも可なりと、聖人ものたまへり。學問は、まづ、此の道に志をたて、明らかなる師なえらびて、其の教をうけ、よき友にまじはりて、其の助をかるべし、志を立つることは、我にあるといへども、道を學ぶことは、師友のちからを用ふべし。たとへば、いとさゝやかなる藝能、又、民のつとむるいやしきことわざといへども、師なく、法なく、教なくて、只、わが心ひとつに任せたらんには、いかに才力ありても、其のわざをよくしがたし。いはんや、人の道は、すなはち天地の道にて、きはめて、大なること、諸藝にくらべがたきをや。いかでか、古の聖人の法をまなばずして、わが心ひとつにて、其の道行はるべき。然れば、人となる者は、必、いにしへの聖賢を師とし、其のをしへをたふとび、其の書をよみ、學問して、人の道を知らずんばあるべからず。おろかなる人は、學問は、人のつとめの外のことのやうに思ひ、學ばずしても、くるしからざることゝのみ思へり。人となりて、人の道をまなばずして知らざるは、農人の、田つくることをしらざるが如し。いにしへより、もろこしにて、さばかり明らかにさとれる賢人君子、世に多かりしかど、我意をたてず、わが才智にほこらず、皆、聖人の教をたふとびしたがひ、いとけなきより、老にいたりて、道をまなびてや

めず。是れ、其の智明らかにして、聖人の教をまなばずんばあるべからざることを、よく知れる故なり。いはんや、今の時、末世の凡人、いかに、其の才力、人にすぐれたればとて、古の賢者には及ぶべからず。然れば聖人を師として、學ふべきこと、言ふに及ばず。

◎元亨利貞の四德は、天道の物を生し給ふ生理の、春夏秋冬の四時に行はるゝ次第にて、其の始終なり。天道の行はるゝ序、其の時を以ていへば、春夏秋冬とし、其の理を以ていへば元亨利貞とし、其の氣は、生長收藏とす。元は、はじめとよむ。生理の初なり。時においては、春とす。春は、元氣始めて行はれて、萬物生ず。是れ、天道の、萬物を生ずる德の始なり。人にうけては仁とす。亨は、とほるとよむ。生理の通るなり。時においては、夏とす。夏は、萬物さかんに長ず。人にうけては、禮とす。利は遂ぐるなり。生理のとぐるなり。時においては、秋とす。秋は、萬物の生理をきまりて、草木みのる。是れ、利なり。人にうけては、義となる。貞は、正しとよむ。生理の正しく成れるなり。時においては、冬とす。冬は、萬物の生理成就し、堅固に正しくなる。其の生氣、根にかへりかくれをさまりて、一年の功成る。人にうけては、智とす。此の四時に行はるゝ序は、萬世に年はふとも、かはらざる天道の常理なり。人は、天の元亨利貞の四德をうけて、仁義禮智の性として、心にそなはれり。天の四德は、天の萬物を生ずる生理なり。人の四德は、人の五倫をあはれむ生理なり。人の四德、其の源をたづぬれば、本は天の四德よりいでゝ、其の理同じく、其の本一にして、天人合一なり。

◎天の生理、四時に行はる。其の中につきて、取わき、元を始として、亨利貞をすぶ。此の故に、春生の元氣を以て、四時をつらぬく。其の次第は、四にわかるれども、理は一なり。人の心の生理も、仁を始として、義禮智をつらぬくこと、天の元氣の、春を始として、四時をつらぬくが如し。これによりて、仁の一字は、四德をかねたり。孔子の、もつぱら、仁の一字をとき給へるは、此の故なるべし。

◎天の道、萬古よりこのかた、つねに行はれてやまず。春夏秋冬の序、日月のめぐり、寒暑溫涼の おしうつる、皆、其の時たがはず。萬物の生ずる、年々に、各〻其の形色をあらためず。桃は紅に、李は白くして、萬世までもかはらず。是れ則ち、天道の誠なり。人の性に、仁義禮智の四德ありて、其の中におのづから信あるは、天道の元亨利貞の內に、誠あるがごとし。天地の運行、人物の性、萬世にいたりてかはらず。是れ卽ち、天道の誠なり。

◎凡そ、人たるもの、必ず、此の四德あるは、たとへば、身に頭身手足の四體あるがごとし。此の

四徳ありながら、道を行ふことならずといふは、たとへば、手足はありながら、物をとり地をふむことならずと云ふがごとし。是を、自暴自棄と云ふ。自暴とは、みづからそこなふとよむ。我身に、此の天性あることを知らで、禮義をそしりて行はず。是れ、天性をみづからそこなふなり。自棄とは、みづからすつるとよむ。仁義の道をよきとはおもひながら、行ふことならずとて、行はぬ、是れ、われにある天性を、みづからすつるなり。柔悪の人なり。此の二種の人は、わが天性を、みづからやぶりすつる故に、道に入りがたし。もし、自暴自棄の悪なくんば、學んで、此の道を得ずと云ふことなし。いかんとなれば、人の性、本善なり。學問の道は、外に求めずして、我に求むる故、得ざることなし。

◎五常の性は、只、人のみこれあるにあらず。禽獣にも、亦、其の一性はこれあり。虎狼にも父子の道あり。慈烏の巣立して、母に餌をふくめかへす、猫の、他の子に乳をのませてそだつる、是れ皆、仁の一端を得たり。犬の主人をしたひ、蜂蟻に君臣の法あるは、義なり。豺獺の、祭をして本にむくい、鴻雁の、兄弟の行列をみだらざるは、禮なり。鴛鴦の、雌雄相愛すると、雎鳩の、雌雄別あるは、智なり。鴻雁の去来するに、春秋の期をたがへず、雞の、なく時節をたがへざるは、信なり。これ皆、

うまれつきたる一偏の性のよき所なり。もし、人として此の性を失はば、禽獣にしかずと云ひつべし。

◎孝弟・忠順・愛敬などは、皆、仁義禮智の性より行ひ出せる道理にして、其の理は、五常の性の内にあり。性の條目にはあらず。人の性は、只、仁なり。わかてば五常となる。

◎人たるもの、必ず、五常の性を生れつきたれば、事物にふれて、必ず、四端おこる。たとへば、物の中にありて、其のはしの、少し外に見ゆるがごとし。性は見えがたしといへども、外にあらはるゝ四端を以て、内に、實に、此の性あることの證とすべし。孟子の、性は善なりととき給へるも、五常の性あればなり。人の性善なる故、人もし學問し、道をしりて行はば、堯舜の聖にもいたるべしとなり。この故に、程子曰、孟子有功二於萬世一者性善の一言なり。

◎孔子の教は、常にことなる道にあらず。即ち、天地の道なり。天地の道を則として、人に示しをし給ふ故に、古人の言に、孔子は天の通事なりといへり。天地の道は、易簡とて、むつかしからずして、しりやすく、事多からずして、行ひやすし。天地の御心は、只、萬物をめぐみやしなひ給ふより外に、心なければなり。人にありては、仁なり。是れ人の道なり。仁の道も、亦人をあはれみやしなふより外になければ、人の道も、亦、しりやすく行ひやすし。仁をわかちて、五常となる。五常の性

は人の心に生れつきたる理なれば、外に求めずして、われに求む。凡そ外にある物は、求むれども得がたし。我にある物は、求むれば、必ず、得やすし。聖人、其の人の心に、各、生れつきて具足せる道を以て、教へ給へば、いかにおろかなるしづのをしづのめも、知りやすく行ひやすし。知り難きは、よく學ばざればなり。行ひがたきは、人欲にしたがひ、邪曲を行ふは、たとへば、やみの夜に、道もなきいばらからたちの中をわけゆき、みぞほりをこえて行くが如し。明らかにして、行ひやすし。

◎孔子の時は、猶も、天下に道理明らかに、邪説なかりしかば、仁の一字をとき給ひて、義禮智の條目をそなへ説き給ふに及ばず。孟子の時は、世に異説おこり、道理まぎれやすく、人心まよひて明らかなりがたし。若し、仁の一字のみを説き給はば、無星の秤、無寸の尺のごとくにて、天下の人さとり得がたからんことをおそれて、仁義をとき、四徳をとき、性善をときたまふ。凡そ、聖賢のをしへは、時によりて宜にしたがへり。たとへば、良醫の、時の運氣により、地の風土にしたがひて、治療をほどこすが如し。

◎我が儒の道は、經濟の道とて、世ををさめ、人をすくふ大道なり。其の學は、有用の學とて、まづ、わが身ををさめて、人ををさめ、人倫の道を行ひ、天下國家のため、天地萬物のため、用をなす學問なり。無用の空言にはあらず。こゝを以て、道理は、人の心に生れつきて、知りやすく行ひやすしといへども、其の道の明らかなるべきや、世間のいやしき小藝小技すら、師なくしては、其のわざをなしがたし。いはんや、大道をや。故に、人たるものたかきいやしき、さかしおろかなる、ともに、聖人の道をたふとびて、明師をもとめ、良友にちかづき、其のをしへにしたがひ、其の道をまなばざらんや。

◎人の心は、ただ、仁義禮智信の性なり。人の道は、只、君臣・父子・夫婦・長幼・朋友の人倫の行なり。五常の外に心なく、五倫の外に道なしと知るべし。これを知るは、知なり。是を行ふは行なり。此の外に、さらに、心と道とを求むべからず。いかんとなれば、天の心、天の道にそむけばなり。人となるものは、天地の内に生れ、天地のめぐみをうけて、身ををはるものなれば、とにかくに、天地の道をたふとび、したがひ行ふべし。

◎もろこしは、天地の中央にありて、風氣の正しき國なれば、いにしへより、さばかりの聖人賢人世に多く出でゝ、天下をなをさめ、道を行ひ、人倫の法を立て、天地の道をつぎ行ひ給ふ。中について、孔子は、六經（讀樂・詩・書・易・春秋）を作り、堯舜以來、古の聖人の道をのべ、人倫の教を立て、天下萬世にのこし給ふ。是れ、天下萬世の師とし貴びて行ふべき則なり。故に、もろこしも、外國も、其のをしへをうけてしたがへり。しかれば、其のをしへの、いたりて貴きこと、いへばおろかなりや。おもひやるべし。こゝを以て、いにしへの帝王も、孔子を師としたつとび其の教をおもんじ、時々の祭を行ひ、其の廟にまうでゝ、拜禮をなし給ふ。わが日の本にも、むかしは、都の大學寮に、聖人及十哲の像を安置し、釋奠として、聖人をまつり給ふ禮ありき。又、太宰府及び諸州にも、孔廟學校ありて、祭禮をなせり。しかれば、天下の人、たかきいやしき、あまれく其の教にしたがひて、師とすべきこと、言ふに及ばず。されど、世界の内、聖人の教をしらで、たがはざる國もあり。それは、孟子のいはゆる、教なければ禽獸にちかきなり。是れ、夷狄の中華に及はざる所なり。

◎わが日の本は、天地の内において、南北の中央にあること、中華と同じければ、日月のめぐれる道正しく、四時そなはり、寒暑陰陽の時にたがはざること、四夷の諸國にくらぶるに、すぐれたる

善國なり。五穀ゆたかに、衣食器財ともしからずゆたかなること、外國にまされればなり。まことに、豐秋津洲といへるも、品物の多くして、を守りて、勇武なり。禮法正しく、威嚴行はれ、仁義にちかし。一たび變ぜば、道にいたりやすかるべし。此の故に、中土の書にも、此の國を名づけて君子國と云ふこと、亦、うべなるかな。わが國の人は、日の本の、外國にまさりて、よきことを知らず、うらむべし。わが國にたらざる所は、只、學問の一事のみ、中土に及ばず。今、太平の化久しく、萬民其の德に浴せり。只、つとめて、いにしへのひじりの道をまなび、五常の德をなをさめ、五倫の道を行ひて、國家の恩德をあふぎ、其の化にしたがはざらめやは。

◎五常の和訓、仁は、いつくしみ、義は、よろし、禮は、うやまふ、智は、さとる、信は、まことよむ。

五常訓　卷の二

仁の上

人の禽獣に異なるは、仁あるを以てなり。五常・五倫・百行・萬善、皆、仁よりいづ。故に、仁の理、至りて尊く、至りて大なり。わがともがらも、凡愚の知り難きことなれば、たやすくいはんこと、いとかたはらいたくこそきこゆべけれ。されど、まなびがてらに、古人の説をあつめ、不幸にして、警なよまざる人のために、いさゝかこゝろみに、其の大義の萬一をいはん。ただ、あやまりおほからんことをおそるゝのみ。中庸に曰く、仁者人也、親レ親為レ大。孟子も亦曰く、仁也者人也。又曰く、仁人之心也と。言ふ意は、天地の恵み大にして、よく萬物を生じ給ふ、其の理を生理と云ふ。生理とは、天理の生生して、よく物を生ずるを云ふ。此の生理を人の身に生れつきたる故に、人の身に、慈みの心、胸中にみちみちて、よく物をあはれむ。是を以て、人の身、即ち是れ、仁なり。故に、仁者人也と説きたまへり。仁は人也といへるは、たとへば、生ずるは種なりといひ、又、あつきは火なりといはんが如し。人の心に必ず仁あること、種の必ず生じ、火の必ず熱きが如し。禽獣も、同じく、天地のめぐみによりて生ずれども、仁をば生れつかず。此の故に、仁は禽獣也とは云ひ難し。萬物の内、人ばかり仁なるはなし。こゝを以て、人たるものは、必ず仁あり。仁なくんば、人とすべからず。故に、仁は人也といへり。天地の人を生み給へる道理を、人の身に得て、心の徳とするゆゑに、おのづから物をあはれむ道理あり。是れ即ち、仁なり。又、仁は、人の身に生れつきたる心なれば、仁は人心也といへり。然れば、仁は、天地の心をうけて心として、あはれみの理を其の内にふくめり。故に人に交りては、あはれみの心おのづからやむことなし。されども、其の中につきて、まづ、父母を愛し、次に、兄弟一族を愛するが、仁愛の内にて、いと大なる理なり。故に、親をしたしむを大なりとすといへり。親とは、親類なり。先づ、親類をしたしみて後、他人を愛す。是れ、仁を行ふ次第なり。人なりとき、人の心也ととける字訓、尤も、親切にして、仁の理によくなかへるなるべし。周子は徳愛を仁と云ふといへり。愛は、あはれむなり。仁は、心の徳にて、人をあはれむを云ふ。愛を以て、仁をとくは、是れ、仁の大用をとけり。仁の用をなすは、あはれみを人に施すにあり。故に、愛を仁と云ふ。夫れ、仁は性なり。性は心に生れつきたる理なり、体なり。愛は情なり。情とは、性の、外物に感じて、うごきあらはれたる心を云ふ。用なり。愛は、仁の性の用にあらはれたるなり。体は見えがたければ、あらはれたる用を以て説けり。愛を以て仁をとくは、是れ、用につきて体を示すなり。程子は、天地の生意を以て、仁を説けり。生意とは、天地の理、生生して物を生ずる意を云ふ。其の生意の、人に生れつきたるを仁と云ふ。天にありては、生と云ひ、又、元と云ふ。人にうけ

ては、仁と云ふ。天にあり、人にありて、其の名はかはれども、其の理は一なり。此の心に生れつきたる生理、内にありて、いまだ外にあらはれざるを仁とす。すでにあらはれては、情となりて、物にほどこすを愛と云ふ。愛のはじめておこれる、其のきざしのはしを惻隱の心と云ふ。仁と愛と一理なれど、性情體用の別あり。用をさして體とすべからず。情をさして性とすべからず。しかれば、仁と愛と、體用のわかちあり。たとへば、仁は、扇なり、體なり。愛は、扇を以て、人をあふぐが如し。あふがずんば、扇も用なし。あはれみなくんば、仁なんぞ用あらんや。すべていへば、愛するも仁なり。たとへば、あふぐも扇なるがごとし。性情體用も、皆仁なり。體用をわかちて見、又、合せて見るべし。程子又曰く、仁主二於愛一。是れ、仁は、愛の理をふくめるゆゑ、うごきて人にまじはれば、專ら、愛することをつかさどれり。義の、宜をつかさどり、禮の、敬をつかさどるが如し。天地の、萬物を生ずる心は、卽ちこれ、天地の、物を愛するの理なり。其の理を人にうけて性とするは、卽ち、仁なれば、仁は、人物を愛するを主とせり。朱子曰く、仁心之德、愛之理。心の德とは、德は得るなり。天地の、人物を生じ給ふ心を、我が心に得て、わが物となれる道理を德と云ふ。義禮智も、皆、心の德なれど、仁は義禮智をかれたれば、仁において、もつぱら、心の德と云ふ。たとへば、

一家の中、兄弟四人あれども、嫡子一人を以て、其の弟をかぬるが如し。愛の理とは、心の德の、いまだ外にあらはれざる内に、おのづから、物をあはれむ理をふくめるを云ふ。仁に、愛の理あるは、飴の甘きが如く、醋のすきが如し。其の内の味なり。たとへば、俗語に「ひらかれば扇は風のつぼみかな」といへるがごとし。すべていへば、仁は心の德なり。わかちていへば、愛の理なり。心之德、愛之理の六字、朱子はじめて發明せる所、後の學者に功あり。是れ、周子の德愛を曰レ仁に本づけり。或は曰く、愛之理は發用をさせりと。此の說、非也。朱子曰く、愛之理者是、乃指二其體性一而言。此の說の證とすべし。愛は用なれども、愛の理は、内にふくめるを以ていへば、あらはれたる用に非ず。朱子又曰く、仁は、溫和慈愛の道理。溫和とは、其の心のどけくやはらかなるを云ふ。慈愛とは、人と萬物をいつくしみあはれむを云ふ。溫和は、仁の氣象を云ひ、慈愛は仁の道理を云ふ。たとへていはば、春のけしきのどかなるは、溫和なり。春の陽氣よく、草木萬物を發生するは、慈愛なり。朱子の此の二說にて、仁の字義、大むねそなはれり。

◎韓退之の、博愛謂レ仁と說けるは、仁の、天下萬民に行きわたりたる大用なり。物として、愛せざることなきなり。仁者は、まことに博く愛すれども、それは末なり、根本にあらず。程朱は、仁の根

源よりときて、全體をすべたり。韓子の言、全く理なきにはあらず。されど、仁は性なれば、其の本よりときて、大用をかぬべし。

◎四書六經の内に、只、仁の一字をいへるは、義禮智をかねたり。仁義の二字をときて、禮智をいはざるは、仁は禮をかね、義は智をかねたり。百行萬善は、皆、五常よりいづ、五常は、又、仁の一字を以てかねたり。此の故に、孔孟はもはら、仁をもとむる工夫を以てをしへ給ふ。其の説は、論語孟子の書に見えたり。

◎程子曰く、醫書に、手足のなえしびるゝを名づけて、不仁とす。此のことば、尤もよくなづけかたどれり。仁者は、天地萬物を以て一體とす。己に非らずと云ふことなし云々。人の身、病なくして、血氣ゆきわたりて、よくめぐれば、手足のさき、針にてさしてもいたむ。もし、風濕氣虚などの病によりて、血氣ふさがりめぐらざる所は、刀にてさし、火にてやきてもいたまず。なえしびれて、我が身とも覺えず。是を醫書に名づけて、不仁と云ふ。不仁者の心、外物を一體とせず、物と我との隔ありて、仁心、其の物に行きいたらざれば、人のうれひくるしみをも、我が心に、何ともなくいたまず、かへりて、なさけなく人を苦めしへたぐ。手足に、血氣めぐらずして、なえしびれ、いたきこと

もかゆきことも覺えざるが如し。故に、手足のなえしびるゝを名づけて、不仁と云ふこと、尤もしかるべし。仁者の心は、わが身ひとつを利せず、萬物とわが身と。へだてなく一體として、愛せざるものなし。是れ、私欲のへだてなくして、公なる故に、我が心よく萬物に通じ、人のうれひくるしみを見ては、わがうれひくるしみの如く、いたみかなしむ。鳥獸草木までもあはれみめぐみて、そこなはず。鳥獸のころされ、草木のみだりにきらるゝを見ても、いたむ心あるは、皆、我と一體たればなり。凡そ、天地の内にあらゆる萬物は、皆、我が身にあらざるはなし。是を天地萬物を以て一體とすと云ふ。是れ仁者の心なり。凡そ、人倫も、禽獸草木も、同じく天地のうめる所にて、同氣なれば、もと、わが身と一體のものなれども、私欲あれば、物我のへだてありて、わが身の外は、心通ぜずして、人のうれひくるしみを見聞すといへども、我が心にあづからず、ただ、わが身にさへ便よければ、人のくるしみは、何とも思はず。是れ、不仁者の心なり。人の身、血氣ふさがりめぐらずして、なえしびれて、わが身とも覺えざるが如し。

◎桃の實、杏の實を、桃仁杏仁と云ふことも、亦、よく名づけしなり。仁は、人の心の生理なり。桃杏の實、植うれば必ず生ず。是れ、其の内に、生理あればなり。もし、生理なくんば、死物なり。

植ゑても、生ずべからず。桃杏の實、生理内にありて、いまだ發生せずといへど、發生の理を内にふくめり。是を以て、桃仁杏仁と云ふ。仁の内にありて、いまだ發せずといへども、愛の理は内にふくめり。程子曰く、心は、たとへば、五穀のたねの如し。たねの生意あるは、仁なり。其のたれをまきて、陽氣發して、苗生出づるは、愛の情なりと。苗はじめてきざすは、惻隱の心なり。是等の說を以て、仁の理をしるべし。

◎天地の惠みは、至りて大にして、人と萬物をうみて、又、やしなひいかし給ふ。此の故に、倘書に、天地は萬物の父母といへり。天地の理、生生してやまざる故に、其の生生たる德を以て、よく萬物を生じ給ふ。易に、天地の大德を生と云ふ、是なり。夫れ、天地に、別につかさどりなし。物を生ずるを以て、つかさどりとす。程子の曰く、天は只是以レ生爲レ道。朱子曰く、天地以レ生レ物爲レ心。人は、天地の物を生じ給ふ心をうけて心とす。これ、仁なり。故に、仁の理の根本は、天より出づ。天の生理、人の仁、同じ理なり。

◎倘書に、人は萬物の靈といへり。靈とは、たましひとよむ。人は、萬物にすぐれて明らかなるたましひあるを云ふ。天地は、萬物の父母なれば、萬物は、天地の子なり。されど、萬物の内、人は、

陰陽の正しく委しき氣をうけて生るゝ故に、鳥けだもの蟲魚、凡そ、萬物にすぐれて、とりわき天地の大德を生れつきたり。こゝを以て、萬物の靈といへり。又、孝經に、天地の性、人を貴しとするのたまへり。天地の内に、性をうけたる物、人ばかり貴きはなし。いかんとなれば、天地の德をたがへずして、其のまゝ、心に生れつきたればなり。されば、人は、すなはち、天地の萬物をうみ給ふ生理を以て、心とせり。此の心を名づけて、仁と云ふ。凡そ、人たるものは、いにしへ、今、此の仁あらずと云ふことなし。是れ、人たるもの、心なり。故に、孟子にも、仁は人の心なりといへり。若し、人此の仁をうしなはば、かたちは人なりといへど、心は禽獸に近かるべし。然れば、人と生れたるしるしなく、萬物の靈とするにたらず、又、貴しとすべからず。故に、人となるものは、仁を心に保ち、身に行はずんばあるべからず。いかんとなれば、仁は、天地よりうけて、人となれる理なればなり。

◎孔子曰く、仁者は、己たゝんと欲して、人をたつ。仁者は、心に私なくして公なる故、人我の隔なし。我が身をたてんと思へば、人をも共にたつ。己達せんとほつして、人を達すと。此の意は、我が身を達せんと思へば、人をもともに達す。人と我とのへだてなし。人を思ふこと、わが身と同じ。是れ、仁者萬物を以て一體とするの心なり。もし、わが身を專に愛して、人を愛せざるは、人我の

私にへだてられて、公の心なし。是れ、不仁なり。仁にいたらんとほつせば、ちかく、わが身の上にて、人の心をたとへ、我がこのむことを人にほどこし、我がきらふことは、人もきらふものなれば、わが心にて、人の心をおしはかりて、人にほどこさず。是れ、おのれをおす恕の道にして、仁にいたる工夫なり。

◎賢者以下は、私なきことあたはず。私あれば、人我のへだてありて、仁にいたらず。仁にいたらんと思はば、人我をへだつる私の心をさるべし。私をさりて、仁にいたる工夫あり。推己を恕と云ふ。おのれをおすに、二すぢあり。一には、わが心に、人をあはれむ惻隠の一念生ぜば、其の心を外にしひろめて、人に及ぼして、人において愛せずと云ふことなかるべし。子を愛するを以ていはば、わが子をあはれむ心をおしひろめて、人の子をあはれむ。是れ、おのれをおすと云ふ。我が子のみ愛して、人の子を愛せざるは、人我の私なり。凡そ、わが心に、四端の善あるをば、皆、外におしひろめ行ひて、十分に至らしむべし。内にありても外におしひろめて行はざれば、用をなさず。是は、内にある仁を、外におし出して、ひろめ行ふなり。是れ、己をおす恕なり。又一には、仁を人にほどこすの道、わが心を以て、人の心をおしはかるに、人も我も、同じ心なれば、わが好むことは、人も亦必ずこのむものなり。わが心にきらふことは、人も亦必ずきらふものなり。かくのごとく、わが心を以て、人の心にくらぶるに、つゆたがふことなし。不仁無禮を、人のわれにほどこすは、わがきらふ所なり。是を以て、人の心をおしはかるに、人もまた不仁無禮をきらふ故に、人に不仁無禮をほどこさず。是れ、恕なり。民をさむる道を以ていはば、わが身、もし下にありて、困窮しうるがごとく、妻をうり子をうりて、親子はなれ、兄弟妻子離散するにいたらば、わが甚だきらふことなるべし。其の心を以て、民の心をおしはかるに、我がきらふ如く、民も亦きらふべきことをしりて、民の、うるがごとく、困窮せず、妻子をうらざるやうに、あはれみて、ほどこすべし。是を、おのれが欲せざる所を人に施すことなかれといふ。又、孔子の、よくちかく取りてたとふるを仁の方といふとのたまふも、此の意なり。わが心に、近く取りてたとへくらぶれば、人の心も同じ心なれば、わが心にたがはず。わが心を以て、人の心をおしはかりて、人にほどこすは則ち恕なり。これ亦己をおす恕なり。恕に、此の二義ありと知るべし。いづれも、おのれをおすといふ義なり。

◎仁は、徳の名なり。恕は、仁を行ふ工夫なり。徳の名にはあらず。工夫とは、つとめのしわざを云ふ。世俗に。思案するを工夫といへど、さにはあらず。思案も、その内の一なり。仁に至らんとならば、

ば、恕を行ふにあり。仁は、愛の理なり。恕は、人我の私を去りて、愛を人にほどこす工夫なり。仁は、たとへば、筆なり。愛は、たとへば、筆より書出す文字なり。恕は、筆を手にとりて、物かくがごとし。仁は、體なり。愛は、用なり。恕は、仁を行ふつとめなり。恕なければ、私なく公にして、仁の理行はれて、愛のほどこしひろし。恕なければ、仁心あれども、愛の理行はれず。故に、仁愛を行はんとならば、恕をもつぱらつとむべし。夫れ、つとめずして、愛の理行はるゝは、仁者のことなり。賢人以下は、人我の私あるゆゑ、恕を以て私をさりて、仁を行ふべし。故に、恕は、つとめて仁にいたる道なり。熟するは、仁なり。生しきは、恕なり。自然にかなふは、仁なり。つとめて理にかなふは、恕なり。私なくして公なれば、仁なり。仁なれば、愛す。子貢の、孔子に、一言にして、身をおはるまで、行ふべき者ありやと問れしに、孔子曰く、其恕乎、おのれが欲せざる所を、人にほどこすことなかれとこたへ給へり。一言とは、一字なり。恕の一字は、仁にいたる道なり。これ一生の間、守り行ふべき道なり。

◎恕を行ふには、公私の二をわきまふべし。公とは、私なきを云ふ。わが身を愛する心を以て、人を愛し、われ人のへだてなく、われひとりをたてんとおもふ私なきは、公なり。是れ、仁者の心なり。私とは、おほやけならざるを云ふ。われと人とのへだてありて、ただ、わが身ひとつを利せんとおもふは、私なり。又、わが親しみ愛する人をひいきして、ひとへに、利益せんとするも、私なり。皆是れ、小人の心なり。凡そ、天下萬事の善悪のおこる所は、皆、公と私との二よりいづ。又、君子小人のわかちも、こゝにあり。私あれば、まぢかき恩をうけたるわが親と君をわすれ、ただ、わが身の利欲をのみつとむ。いはんや、他人をや。私なければ、身をすてゝも、君父のために忠孝をつくす。いはんや、利欲などにひかれて、君父をおろそかにすべけんや。

◎仁恕公私の別をいはば、人我をへだてず、私なきは、公なり。公にして、愛の理行はるゝは仁なり。恕は私をさり、公にして、愛の理行はる。是れ、仁なり。公を卽ち仁とは云ふべからず。恕すれば、人我のへだてなくして、公なり。公なれば、愛行はる。是れ仁なり。恕は、仁を行ふ工夫なり。愛は、仁のほどこしなり。たとへば、仁は河水の流れ行きて、とどこほらざるが如し。私は、土石のために河水をふさぐが如し。不仁は、河水の土石にへだてられて、ふさがりてながれざるが如し。恕を以て、人我の私をさるは、たとへば、川に土石のふさがれるを、すきくはなどを以て、ほりとほすがごと

し。ほり辿せば、水とどこほらずして流れゆく。公は、土石のふさがりなきが如し、愛は、水のながれゆきて、よく物をうるほすがごとし。私あれば、不仁なり。怨すれば、公なり。公なれば、愛行はれて、仁の道たつ。此のたとへを以て、仁・怨・愛・公・私の別をしるべし。

◎樊遅問レ仁、子曰、愛レ人。仁は、愛なつかさどる故に、仁を行ふの道は、人を愛するにあり。此の人の字は、五倫をさして見るべし。人を愛するは、即ち、人倫を愛するなり。人の道は、仁を行ふにあり。仁を行ふの道は、人を愛するにあり。人を愛せんとならば、まづ心の私をさり、人我のへだてなくして、あはれみの心をおしひろむるにあり。愛レ人を以て、愛を說き給ふ、誠に切實にして、近きをしへなり。

◎人は、父母より生ずといへど、其の根本をたづぬれば、皆、天地の恩によりてうまる。うまれて後、一生の間も、また、天地のめぐみによりて、身をたつること、猶、おやの氣をうけて、うまれて後も、おやのやしなひによりて、人となるがごとし。是れ、誠に、きはまりなき大恩ならずや。此の故に、天地を以て、大父母とす。天をば父と稱し、地をば母と稱す。人は、天地の子なり。まことに、天地の恩のきはまりなきこと、海山を以てもたとへがたし。天地の恩のむくいがたきこと、子として、父母

のむくいがたきと同じ。人は、萬物の靈なれば、などか天地の恩の大なることを知らですぎぬべきや。故に、人の道は、只、天地の恩をしりてつかへ奉るにあり。天地につかへ奉る道は、ぺちにあらず。天道にしたがひてそむかざるにあり。天地にしたがふとは、いかにぞや。わが心に生れつきたる仁の德は、是れ、天地よりわれにさづけ給へるなり。こゝを以て、仁を行ふは、即ち、天地の御心にしたがひてそむかざるなり。たとへば、主君より官職を、よくつとむるを以て、君につかふる忠義とするが如し。仁を行ひて、天地のうみて子とし愛し給へる人倫を愛するが、天地につかへ奉る道なり。人倫は、五あり、五倫と云ふ。五倫は、わが父子・君臣・夫婦・兄弟・朋友の五品を云ふ。五倫ぺちなしといへど、其の類をわかてば、此の五に出でず。五倫は、禽なり、獸なり、類なり。天下の萬民かぎりなし、天地の子にて、愛し給ふ所なれば、われ是を愛するは、即ち天地の御心にしたがひて、天地につかへ奉る道なり。仁の性にしたがへば、五倫を愛する道おのづから行はる。中庸に、性にしたがふを道と云ふ、是なり。仁は、性なり。五倫を愛するは、道なり。天地より生れつきたる仁の性にしたがひて、五倫の道を行ふが、天地につかへ奉る孝にて、人の道なり。是れ即ち、仁なり。人の道とする所、さらに、此の外にあるべからず。次に、禽獸草木を愛す

ろも、亦、仁の内のことなり。天地は、萬物の父母なれば、人倫を愛し、次に、萬物を愛するも、亦、天地につかふる道なり。

◎およそ、人は、かりそめの一飯の恩、一物のめぐみをうけてだに、其の心に銘じてわすれざるべきことわりなるに、かほどきはまりなき天地の大恩をうけながら、それをさとらずして、はかなき世のならひにまよひて、天道にそむき、人道を行はず、其の大恩の萬一をも報ぜずして、身をはりなんこと、いと口をし。たとひ、不幸にして、聖賢の書をよまずとも、天をいただき、地をふみ、其の中にむまれながら。かほどのことは、其の是非をわきまふべきことにこそ侍れ。いはんや、すこしばかりにても、いにしへの聖賢のふみをよみたる人、此のことわりをわきまへざらんは、いとはかなくこそ聞ゆめれ。されば、われも人も、天地のめぐみによりて生れ、天地の内に身をよせ、天地のやしなひをうけ、天地の心をうけながら、天地の道をしらず、天地の財をつひやし、天地の物をそこなひて、日々に、天地にそむけるわざをのみ行ひ、天地につかへ奉ることをしらで、一生の間、夢見るが如く、酒にゑへるが如く、まよひてさとらず、此の身をはりて、草木禽獣と同じくくちなんことは、人と生れたるかひなし。いたりて不仁にして、又、おろかなりと云ふべし。人の

子として、おやにつかへずして、おやの川にたゝずみ、かへりて、おやにそむき、不孝にして、おやをくるしむるがごとし。されば、おやによくつかふるを孝とし、おやにそむくを不孝とす。天地によくつかふるも、仁とし、天地にそむくを、不仁とす。仁と孝とは、一理なり。天地につかふる心を以て、父母につかふるは孝なり。又、天理にそむきて。人欲を行ふは、わが父母に不孝にして、他人の父母をしたしむが如し。かへすがへす、ただ人はあだなる世のまよひをさとりて、大恩をうけて、人と生れ、身をよせたる所の、いたりてたふとき天地の道にあけくれしたがひ、身をはるまで、天道をおそれつゝしみて、天につかへ奉るべきことにこそあれ。これ即ち、仁の心にして、人の道なり。人となるもの、天地の恩をしらずんばあるべからず。恩をしるを以て、人とす。恩をしらざるは、禽獣と同じ。恩をしるとしらざるは、人と禽獣とのわかるゝ所なり。俗語に、恩をしらざるは、木石に同じと云へるがごとし。されど、木石は、天地と人の妨とならず。わが輩の、おろかに私多き者は、かへりて妨となり、木石にだにおとれるわざ多し。身なかへりみるべきことにこそあれ。かへすがへす、天地の中に生れたる人、天地の恩をしらでつかへ奉らざるは、いかんぞや。

◎仁は、天地の物を生ずるを以て、心とし給へる理、をわが身にうけて、心とする徳なり。故に、仁は、萬善をすべて、其の中にあれど、只、ひとへに人をおはれみ、物をめぐむを以て、仁とす。天地の、人物をうみそだてめぐみ給へる御心にしたがひて、天地のうみ出しいつくしみ給ふ人と萬物を、われよりも、又、天の御心をうけてあはれみめぐむ。是れすなはち、仁の心にして、天地につかへ奉る道なりとしるべし。此の仁心より、百行萬善は行はれ出づるなり。天地を父母として、わが身は、天地の子なり。天下の民は、われと同じく、天地の子なるゆゑに、即ち是れ、わが兄弟なり。其の内に、王公大人あり。是れ、わが兄弟の内にて、位高き人なり。鰥寡孤獨病者かたわ乞食貧人あるは、皆、わが兄弟の内にて、不孝なる人なり。有レ位をうやまひ、不幸なるをあはれむは、皆是れ、わが兄弟をあつくしたしむの道にして、即ち是れ、天地につかうまつる道なり。たとへば、人の子として、おやに孝をおこなふ道は、おやの命にそむかず、おやのうめるわが兄弟にむつまじく、又、おやのしたしめる、親戚朋友、おやの愛するしもべまで、其の程にしたがひて、なさけふかきを以て、孝とす。いかにおやのひさもとにて、あけくれつかふるとも、おやのうめる所の、わが兄弟になさけなくば、おやの心にそむきて、重りて不孝といふべし。天地のうめる所は、人と萬物なり。天地

のうめる人と物をあはれむを以て、天地につかへ奉る道とす。天下に人多けれど、五倫の外にこれなし。君子の道は、五倫にまじはりて、なさけふかくめぐみあつきを、人の道とするは、人倫は、皆、天地の子なり。人倫をあつくするは、即ち、天地につかへ奉る道なり。人倫を愛するとて、わけもなく、一やうに人を愛するは、道理にそむけり。墨子と云ひし人、仁をまなびそこなひて、天下の人を一やうに愛する道を立てたり。是れ、ひがことなり。人を愛するに、したしきうときと、貴賤とによりて、自然のしなあり。品なければ、おやをも路人をも、一に見るなり。人倫の中にとりわき、おやにつかへ、孝を行ふを、専一とするは、人倫の本をあつくするなり。次に、兄弟夫婦朋友なり。君臣の義は、又、父子の親と同じく、尤もおもし。おやを愛するを本とするは、是れ、わが生れつきたる仁愛の先づおこる所、自然の道なり。しひて、次第を立つるにはあらず。人倫を愛して、其の次には、鳥獣魚草木まで愛するは、是れ又、天地のあはれみ給へる御心にしたがひて、我もあはれむなり。天地の萬物をうみ給へる内に、取りわき、人民を尤もあつくしたまふは、人は、萬物の霊なれば、禽獣草木に同じからず。天地の性、人を貴しとす。こゝを以て、天地の御心をうけて、まづ専ら、人倫をあつくあはれみ、次には、鳥獣草木をも愛すべし。君子の道は、只、一すぢに、天地の

御心にしたがひてそむかざるにあり。是れ、天につかへて孝を行ふなり。是を仁と云ふ。もし、人倫を愛せずして、不仁なるは、天地の不孝の子なり、孟子に、親をしたしみて、民を仁し、民を仁して、物を愛すといへり。君子の仁愛を行ふ、其の次第斯の如くなるは、其の品にしたがひて、心を用ふるも厚薄あり。是れ、自然の理にしたがへり。まづ父母兄弟をしたしみ、次に親戚をしたしむは、皆是れ、親レ親也。次に、民を仁す。民とは、萬民なり。其の内にも、貴賤親疎の次第あり。次に物を愛す。物とは、とりけだもの草木を云ふ。とりけだもの草木を愛するも、各〻次第あり。先づ、鳥獣を愛し、次に、草木に及ぶべし。親を親しみ、民を仁し、物を愛するは、輕重の次第あり。親を親しむは、尤もあつく、民を仁するは是につぎ、物を愛するは、民を仁するよりかろし。此の三は、すべていへば、皆仁なり。その厚薄の次第、みだるべからず。是れ、至然の理にして、しひて次第をわかつにはあらず。

◎仁は、義禮智信をかねて、其の中にあれども、五の者をならべ云ふ時は、各〻一理ありて、仁をあひたすくべし。仁の理、義を得ざれば、宜しく行はれず。禮を得ざれば、節文なくして立たず。智を得ざれば、善惡を明らかに知らず。信を得ざれば、いつはりありて、守りがたし。四の者、皆、そなはりて、仁の道行はる。然れば、義禮智信は、もと仁より出でて、仁をたすくる理なり。

◎仁は、天地にありては、物を生ずるの心なり。人にありては、温和にして、人を愛し、物を利する心なり。仁は、ただ愛の理を以て云ふべし。天の道、人の道、皆、此の愛を以て、本とせり。愛をすてゝ、仁なりふは非なり。

◎子曰、剛毅木訥者近レ仁。又曰、巧言令色、鮮矣仁。剛毅は、心こはくつよくして、柔弱ならざるなり。木は、容貌質朴にして、かざりなきを云ふ。訥は、言のたくみならずにぶきを云ふ。心剛毅にして物慾にかがめられず、容貌質朴にしてかざりなく、言たくみならざるは、其の氣象を以て云ふ。仁とは、云ひがたし。されど、外をつとめずして、内に實あれば、其の實仁の理にちかし。巧言は、ことばをよくして、仁者の言に似たり。令色は、顔色をよくして仁者の容貌に似たり。顔色言語は、見事に聞事なれど、かざりて、外をつとめ、内に實なければ、仁にあらず。此の二章を以て、仁の理を知るべし。又曰、仁者必有レ勇とは、仁者は、心私にわづらはざる故、義を見ては必ず行ふ。内にかへりみるに疚しからず。故に、事にのぞみて、うれへずおそれず、節義をかたく守りて、身に私せず。此の故に、仁者は。必ず勇あり。血氣の勇者は、けなげにて、身をすつれども、仁義なければ、

道理にあたらず、すてゝかひなし。勢により、節にのぞみては、身に私して、道理にそむき、節義をうしなふ。故に、必ず仁あらず、其の勇も、たのみなし。子曰、志士仁人、無二求レ生以害レ仁、有二殺レ身以成レ仁。仁に志ある人、仁ある人は、義の死すべき時節に、わが身に私せず、命いきんことをもとめて、わが心の道理を害せず。身をころしても、道理にかなへば、其の心やすし。こゝを以て、身をすてゝ、仁の徳をなすなり。不義にして、命いきても、わが心の道理をうしなへば、いけるかひなし。是れ、仁者の勇ある所なり。こゝを以て、程子も、人必有二仁義之心一、而後有二仁義之気一といへり。志は、気之帥とて、心だにつよければ、気はそれにつれられてつよし。仁義の気あれば、即ち、勇武行はる。

◎天によくつかふる道を仁とし、よくつかふる人を仁人と云ふ。おやによくつかふる道を孝とし、よくつかふる人を孝子と云ふ。仁人の、天につかふるは、天によくつかふるなり。孝子の、おやによくつかふるは、おやにつかふるが如し。天につかふるは、おやにつかふるには、愛をおもくし、天につかふるには、敬をおもくす。愛敬をつくして、天につかへ、親につかふるは、其の身の徳行の成就する道なれば、これを身をなすと云ふ。天は、地をすぶ。地は、天の内にあり。故に、天道をいへば、地道は其の内にあり。天につかふれば、地につかふるも、其の内にあり。

◎孔子のをしへは、只、仁の一字をもつぱらとし給ふは、仁は、四徳をすべ、万善百行の本とする理なればなり。しかれば、人道は、只、ひとへに仁を以て本とせり。仁義礼智は、人の性の條目なれど、皆、仁より出づる所にして、仁わかれて四となれり。是を以て、五常は、仁を本とす。仁を以て義礼智をかぬ。仁は、仁の本体なり。礼は、仁の節文なり。義は、仁の断制なり。智は、仁の分別なり。是れ、四徳は、皆、仁にこもれり。たとへば、春は、生気のかくるゝなり。夏は、生気の長ずるなり。秋は、生気のをさまるなり。冬は、生気のかくるゝなり。是れ、春を以て、夏秋冬をかぬ。仁の、義礼智をかぬるも、亦かくの如し。故に、明道の曰く、義礼智皆仁也と。されど、仁義礼智とわかてるは、何ぞや。仁の内、おのづから此の四徳あり。これをわかつては、仁の理いよいよ明らかなり。四にわかつは、仁の理を明らかにせんがためなり。四時をわかてば、一年の元気の運行明白にして、知りやすきがごとし。

◎四徳四端、いづれも、四の者をならべ説くといへども、其のはじめ、まづ、仁心なければ、必ず義

禮智なし。惻隱の心なくては、生理ほろび、心かたくなに愚にして、羞惡・辭讓・是非の端もおこらず。たとへば、石の頑にして、生氣もなく、心もなきが如し。俗語に、物のあはれをしらざるは、木石のごとしといへるが如し。又、身のなえしびれたる所は、刀にてつき、火にてやけども、いたみをおぼえざるが如し。仁は、生理なり。あはれみなくて、物のあはれをしらざる人は、義理もなく、禮もなく、知慧もなきものなり。是れ、惻隱なければ四端なし。惻隱の、四端をかれたる所なり。

◎仁は、人の性にして、人々に皆そなはれり。孔子、仁を行ふの道をばつれに說き給ふといへど、其の理の深きことは、聞き得る人すくなければ、稀にとき給へり。又、一事の善も、仁心よりいづといへども、仁の全體は、至りて大にして、少しもきずなきを以て、名づくる理なれば、仁を以て、人にゆるし給ふことまれなり。顏子の亞聖も、三月仁にたがはずとのたまひ、三月ののちは、仁あることをゆるし給はず。仲弓・子路・冉求・子貢・公西華などは、皆孔門の歷々の高弟なり。されど、皆、仁をゆるし給はず。陳文子・令尹子文は、其の行高しといへど、夫子、各〻其の長ずる所をばゆるして、仁をゆるし給はず。是れ、仁は至つて精粹にして、廣大なる道理なればなり。李延平曰、當レ

理而無二私心一、則仁矣。いふ意は、行ふわざ道理にかなひて、心中に私なきは、仁なりとなり。行ふ所、理にかなへども、心に私あるは、仁にあらず。内外共にきずなき人は、孔門の賢者といへど、得がたければ、孔子の、かるがるしく、仁を人にゆるし給はざるゆゑ、是なるべし。伯夷・叔齊をば、仁を求めて、仁を得たりとの給ひ。微子・箕子・比干をば、殷に三仁ありとのたまひて、皆、仁をゆるし給ふは、其の心私なく、其の行理にかなへるゆゑなり。

五常訓　卷の三

仁の下

孔子の弟子顏淵、仁を問ひ給ふ。孔子答へて曰、克レ己復レ禮爲レ仁。己とは、身の私欲なり。禮とは、身の行ふこと、理にかなひて、ほどよきを云ふ。仁を害するものは、身の私欲なり。身の私欲にかちて、身の行ふ所、理にかなひて、ほどよきに立ちかへりぬれば、本心の德に害なくして、全くなる。全しとは、きずなきを云ふ。是れ、仁をなす工夫なり。凡そ、私欲は、おのが身より出づるもの

なる故に、己が身にかつは、即ち、私欲にかつなり。禮は、元來、吾が身に生れつきたる理なれど、私欲にうばゝれて、とり失へるを、もとのごとくとりかへして、立ちかへるべしとなり。顏子、又、己に克ち禮に復るべき條目を問へり。孔子こたへ給ふ意は、凡そ、人の身に、耳目口體あり。目は見、耳は聞き、口はいひ、體は動く。人のわざ多しといへども、此の四の事の外にこれなし。此の四の事につきて、其の心に私欲なくして、禮を以て、物を見、物を聞き、禮を以て、口に言ひ、體に動くべし。非禮とは、上にいへる、己が身より出づる私欲なり。淫聲邪色などの、外物の非禮にはあらず。非禮勿視とは、身に禮なくして、私欲を以て物を見ることをいましむべしとなり。外の邪なる色見ざるは云ふに及ばす。禮に非ずして勿聽とは、身に禮なくして、私欲を以て物をきくことをいましむべしとなり。外の淫聲をきかざるは、云ふに及ばす。禮に非ずしていはず、禮に非ずして動かず。此の四の者は、身の私欲にかちて、天理にかへる工夫の條目にて、即ち、仁をするのことなり。克己は、人欲にかつなり。復禮は、天理を存するなり。人欲にかちて、又、天理にかへる、二の工夫なり。一をかくべからず。人欲にかちたるのみにて、天理を存せざるは、異學のことなり、此の問答は、孔顏傳授の心法なり。いるかせに思ふべからず。學者のつとめ行ふべき所なり。

◎身の私にかちて、道理に立ちかへるは、仁の體なり。人を愛し、物を利益するは、仁の用なり。體ありて後、用行はる。故に、まづ、わが身の私にかち、禮にかへるべし。人欲さらず、天理行れずしては、仁愛の道、人にほどこしがたし。

◎孟子は、仁人心也と說き、學問之道無他、求其放心而已矣と說き給ふ。求發心とは、仁心の、外物の欲にひかれて取失へるをさめて。もとめ得べしとなり。學問の要は、わが仁心のはなれたるを求め得るより外にこれなし。放心を求むるの工夫は、敬にあり。敬とは、おそれつゝしみて、此の心をまもりたもつ工夫なり、內にある仁心をば、外におしひろめ行ふべし。外物にひかれて、仁心を放ち失へるをば、をさめて內に入るべし。

◎程子曰、觀天地生物氣象。是れ、天地の生理のやまざる所、眼前に見えたるをいへり。其の氣象は、即ち、溫和慈愛なり。人にありては、仁なり。又曰く、萬物之生意最可觀。言ふ意は、萬物みな生意あり、是れ、仁なり。中につきて、物のはじめて生ずるは、生意さかんにして、見えやすし。竹の子など、はじめ生ずる時、日夜に長ずることさかんなるを以て、見るべし。枝葉しげれる時は、生氣見えがたし。仁の理、はじめて惻隱にあらはるゝ時は、此の心尤もさかんにして見えやすし。ひろ

く政なおこし、仁をほどこす時にいたりては、其の理廣大にして、かへつて見えがたし。又曰、觀二鷄雛一、此可レ觀レ仁。鷄のひよこのはじめて生じて、うごきやまざるも、生意のはじめてさかんなる時、此の理よくければなり。又曰、切レ脈最可レ觀レ仁。此の意は、人の脈の常に、發してやまざるは、生意のつれにやまざるなり。又曰、滿腔子是惻隱之心。言ふ意は、人の胸中にみちみちたる者は、惻隱の心なり。中にみちみちてある故に、物にふるれば、卽ち、仁心おこる。子思・孟子の、仁は人なりとのたまふも、此の意なり。人の身に、仁の理みちみちてこれあるゆゑ、仁は人なりといへり。たとへば、人の身には、生氣みちみちてある故、針にてさしても、いたむが如し。人の心に、仁愛の理みちみちてあるゆゑ、孺子の井に入らんとするを見て、たちまち、惻隱の心生ずるは、此の故なり。是れを眞心と云ふ。人の本心なり。人欲の私より出づる心は、眞心にあらず、本心をとり失へるなり。程子又曰、天地生物之理可レ觀、而不レ可レ言、識レ之者便知レ道也。天地の物を生ずる理は、眼前にみちて見ゆる所なれば、見るべしといへど、其の理は、ことばにのべがたし。若し、これを知れる人あらば、卽ち、道をしれる人ならんとなり。右の數說は、程子の、よく仁をしれることばなり。仁をしらずしては、此の如く言ひがたかるべし。學者、心をつけて、此等の說をしづかに玩味して、

天地生物の理を自得すべし。もし、此の理を自得せば、仁をしれる人なるべし。此の理をしらざるべし。此の理を自得せば、仁をしれる人なるべし。しからば、其の樂、事のまひ足のふむことをしらざるべし。此の理をしらぬ人なるべし。上、博學多識にして、古今に通ずとも、道しらぬ人なるべし。

◎程子曰、四德之元、猶二五常之仁一、偏言則一事、專言則包二四者一。いふ意は、天の元亨利貞の四德は、元を以てかれたり。元は天の物を生ずる氣を以て、夏秋冬をつらぬくが如し。五常の仁も、亦、かくの如し。仁を以て、義禮智をつらぬけり。春の生天の四德（元亨・利貞）も、人の四德（仁義・禮智）も、ひとつびとつならべ、平らかにしていへば、各〻一事なり。專らにとは、すべて云ふなり。すべていへば、元を以て、亨利貞をかれ、仁を以て、義禮智をかぬ。

◎天地の、萬物を生ずるめぐみの心を、わが身に體認して心とし、其の善心の、はじめておこる所をやしなひそだて、これを害する所の私欲をさりて、火のはじめてもえ出づるをふきおこすがごとく、泉のはじめて流れ出づるをみちびきて、流すがごとくにせば、一念の惻隱をおしひろめて、萬民をすくふべし。一念の羞惡をおしひろめて、萬民を正すべし。是をおしひろめみつれば、四海ををさむ。おしひろめざれば、まぢかき父母につかふるにたらず。

◎程子の言に、聖賢の仁ないへる、所なあつめて見ば、仁をしり得んといへり。今の學者、仁を知らんとならば、孔孟程朱の仁を說き給へる言を、數年の間、心をひそめて、求め味ふべし。急迫にすべからず。誠つみ力久しくば、自然に、其の理をしるべし。若し、しからずは、聰明博學の人といへども、仁をばしりがたかるべし。

◎虞書に好レ生之德と云ひ、安レ民則惠といへるも、皆、仁なれども、未だ仁の名なし。仁の字、聖經に見ゆることは、尙書の仲虺之誥にはじめて出づ。曰く、克寬に克仁といへり。其の次に伊尹の語に、民罔二常懷一懷二于有一レ仁といへり。孔子にいたりて、專らに、仁の一字を以て敎へ給ふ。孟子も、亦、孔子の敎を發明して、專ら仁をとき、又、仁義をとき給へり。凡そ、仁を專として敎へ、仁義をそなへて說き給へるは、是れ、孔孟の家法なり。

◎いにしへ、國家の長久せしは、其の君仁なればなり。桀紂以下、歷代、不仁の君ほろびざるはなし。堯舜湯武は申すに及ばず、漢の高祖文帝、後漢の光武、唐の太宗、其の餘歷代の賢君は、皆、仁愛ありし故、國家長久せり。凡そ、國家の興亡、身の安危、皆仁と不仁とによれり。貴きも賤しきも、仁の道豈つとめざるべけんや。禹湯は、己が身をせむ。故に、

さかえたまふ。桀紂は、人をせむ。故に、亡びたまふ。

◎とりけだものむし魚を、すべて、物と云ふ。物をいかすことをこのみ、殺すことをきらふは、人の本心なり。されども、口腹の欲を以て、物をころすことをこのむは、本心を失へるなり。いのちをなしみ、死をおそるゝこと、物も、人と同じ。殺さるゝ時、いたみくるしむこと、物も、人と同じ。子を愛することも、物も、人と同じ。ただ、物は、智なく力なく物いはず。是れ、人とかはれり。こゝを以て、人にころされてくらはる。肉食をこのむ者は、小鳥は、一食におほきこと十にいたる。はまぐり小えび小魚の類は、一食に數十百にいたる。或は、いきながら、やき煮てくらひ、或は、いきながら、きりわりて食ふ。不仁なりと云ふべし。仁に志あらん人は、物のかなしみなかへりみて、あはれむべし。ころすことをこのむべからず。

◎禽獸魚鼈は、知なし、草木は、情なしといへども、人と同じく、天地の氣をうけて生ず。禽獸魚魚の、いのちをなしみ、草木の、其の生をとげんとする理は、人と同じ。いかんぞ、みだりに、

これをころし、からなきり、根をたつべき。されど、五穀をさまたげ、人に害あるをば、ころしきるべき道理なれば、是非に及ばず。又、俸養のため、人の利益となり、民用を助くれば、やむことを得ずして、これを用ふ。是れ、義なり。しからずして、人間に妨なくば、其の生育をとげしむべし。是れ、物を愛するの仁なり。不仁なる人は、わが身の外は、すべて心をかよはさずして、情なく、物のあはれをしらず、物をくるしめいたましめ、斷つことをこのむあさまし。

◎儒者の道、鳥けだものをころすは、不仁なりと云ふ人あれど、それは、道をしらざる人の言なり。君子は、故なければ、禽獸をころさず。故なくして、みだりにころすは、儒者の道にあらず。末世の人のわざなり。是を儒者の道と云ふべからず。ころすべき理あれば、人をもころして、義にあたる。いはんや、鳥けだものをや。ころすまじき理あれば、草木をもきらず。禽獸はさらなり。曾子曰く、樹木時を以てきり、禽獸時を以てころす。孔子曰く、一樹をきり、一獸をころすも、其の時を以てせざれば、不孝なり。是れ、みだりに木をきり物をころすは天地の物をそこなふなり。不孝と云ふべし。いにしへの人、田はたけに作れる五穀をそこなふ鳥獸をころして、民のために害をのぞき、是を用ひて、宗廟社稷の神をまつり、老をやしなひ、賓客にそなふるため、民の隙を用ひて、武事をならはしめ、軍法ををしへんがため、四時の狩をして鳥獸をころせしは、理なり。君子の道は、只、理にしたがふのみ。理にしたがはざれば、おやをすてゝ、遠きをしたしむは、理にそむきて、仁にあらず。君子の、人物を愛するは、理一にして、分殊なり。君子の心は、すべて、人倫を愛し、萬物を愛せずと云ふことなし。是れ理一なり。理一とは、すべて萬物を愛する理は一なり。愛せずと云ふことなきなり。理一は、是れ仁なり。人を愛する内にも、親・兄弟・妻子・親戚・朋友・臣僕の品あり。是れ、分殊なり。分殊とは、愛する内に、其の親しき疎き、高きいやしき、大と小との分によりて、其の愛する品に、厚薄のかはりある事を云ふ。分殊は、是れ義なり。禽獸は愛すべしといへども、時により、事により、殺すべき義あり。是れまた分殊なり。されども、是を用ふるにも、時あり禮ありて、みだりにきらず。いにしへは、春夏に草木をきらず。成長する時なればなり。山林に入りて木をきるにも、鳥獸をころすにも、時あり。獸の子をとらず、鳥の卵をとらず、胎あるも殺さず、巢をくつがへさず。皆是れ、天道にしたがひ、物をあはれむ仁なり。ころすべくしてころさざるは、仁に似て義にそむく。まことの仁にあらず。

今の人、聖學をまなばず、聖道をしらずして、みだりに聖人の法を議すべからず。

◎此の世にうまれては、高きもいやしきも、皆、同じく天地の子にして、同じ人なるに、なかにつきて、不幸なる人は、家まどしく、財なくして、つねに衣食ともしく、朝夕うれひくるしみ多し。わが身、幸にして、年あしく、衣食ともしく、やしなひたらずして、世をわたるよすがなき人多し。わが身、幸にして、かゝるくるしみなく、かれは、不幸にして、かゝるうれひにしづめり。彼の貧民、たとひ、疎遠の人なりとも、其のもとをたづぬれば、同じく皆わが兄弟のわびしき人なれば、あに、かなしまざらんや。我がともがら、幸ひに天地の德により、主君のめぐみをうけ、父祖の恩によりて、たとひ、富貴ならねど、世わたること、さほどくるしまざる身ならば、其の分にしたがひて、彼のわれにしたしき人、わがしれる人の、世をわたりかねて、うれひにしづめる人をすくはざらんや。もし、これをかなしと思はず、すくふ志なくば、われながら不仁にして、天地の御心にそむきぬること、おそるべきと思ひ、みづから其の身をせむべし。わが身のやしなひは、いかなる富貴の人といへど、日に一升の穀なくひ、年に、一襲の衣をきるにすぎず。されば、わが身の俸養はさほどゆたかにあつからずして、おほくの貲をなさずとも、身ひとつを過し、且つ、父母・妻子・從者をやしなふことも、たりやすかるべし。其の餘の財は、さほど多くつみかさねずともありなん。多くをさむれば、必ず、あつくうしなふと、古人のいへるごとく、財を多くつみかさねれば、かへりて、わざはひ出でくる理あり。天のにくみ給ふ所なればなり。彼の世をわたりかねて、うれひくるしめる人に、わがちからにしたがひて、ほどこしたすけば、あに、心よからざらんや。是れ、われに天地より生れつきし所の仁を行ひて、天地につかうまつる道なれば、わが職分をつとむるなり。

◎天地の、我に財祿をおほくあたへて、富貴にし給ふは、必ず、我れ一人のために、あつくめぐみ給ふにあらず。わが力を以て、貧なる者に財を施しめぐませんために、われにおほく財祿をあたへ給ふ理なれば、人にほどこさざるは、天の御心にそむく理なれば、おそるべし。わが財をなしむべからず。もし、天心にそむき、財多くして人に施さざれば、わざはひ出來るものなり。易に、天道は みつるをかくといへり。又、物みつればかくともいへり。古語にも、あつまれば散ずとも云ふ。財ほくて、人の貧窮をめぐまざれば、みちてかくるのわざはひあり。おそるべし。又、我が采地の民は、我が養ふべきものなれば、年凶にして、飢饉に及ばゝ、わが身の俸養を儉約にし、儉やぎずして、力にしたがつてすくふべし。一人も、餓死せしむることなかれ。民の妻子下人を賣らしめ、父母

兄弟離散し、貧窮飢寒にいたらしむること、わが身にかへりみるべし。心ないたましむる至極なり。あはれむべし。凡そ、吝嗇にしては、仁義禮智共に行はれず。殊に、仁の道かくるものなり。又、吝嗇なられども、不仁なる人は、人をめぐむことをこのまず、無用の事には、財を多くつひやすものなり。

◎道橋の、とほりがたきあやふき所は、ちからあらば、修理して、道行く人を、心やすく自由に通らしむべし。又途中に、人の足をそこなふべきくひいばらなどあらば、除くべし。其の外、かやうの心づかひをすべし。是れ、陰德にして、仁愛の道なり。

◎人もし富貴にして、いたづらにたからをたくはへ、人にほどこさざらんは、富貴なる益もなく、愚ひ出もなきことなるべし。古人、これを守レ錢虜と云ふ。親戚朋友、又、わが家に出入する者、乘地の農人、わがかどにくる乞丐など、貧窮にくるしめる者あらば、わがちからに隨ひて救ふべし。是れ、富貴なるかひありて、たのしみとすべきことなり。

◎人の世になるは、陰德をつみ行ふべし。陰德は、かげのめぐみとよむ。慈愛を心の內にひそかにたもちて、人をすくひたすくるを云ふ。世俗に、これを慈悲と云ふ。古人の曰く、陰德は。耳のなるがごとし。われのみしりて、人しらずといへり。又、古諺に、陰德ある者は、必ず陽報ありといへり。いふ意は、陰德ある者は、かげにて善を行へども、必ず、天道に通じて、あらはに天のむくいありて、福を得るとなり。

◎陰德は、富貴なる人のみ行ふべきにあらず。貧賤の人といへど、其の志あれば、行はれずと云ふことなし。いかんとなれば、金銀米錢を多くみだりに人にあたへ、無益のことをなして、たからを多くつひやすなり。陰德と云ふにあらず。ただわが分限にしたがひ、力の及ぶほど、施しめぐむべし。仁愛に心を用ふれば、たれも成りやすし。せめて、わが身のおごりと欲とに、財と心と用ふる十分が一のちからをつひやさば、其のすくひほどこすことひろかるべし。仁愛ふかくして、久しく陰德をつみ行へる人は、其のめぐみをうくる人のよろこぶのみにあらず、天地神明の御心にかなひ、よろこび給ふ理なれば、必ず、天道のむくいあつく、目に見えぬ鬼神のまもりありて、たびたびわざはひをのがれ、子孫もながくさかえたのしむこと、其の理明らかにして、古今和漢ためしすくなからず。何のさいはひか、是にしかんや。何の祈禱祭祀か是にしかんや。人をすくふ道は多し。うゑこごえする人をたすけ、鰥寡孤獨のより所なき者をめぐみ、乞丐の人にほどこし、人の困窮をたすけ、もし、位

あらば、善人をすゝめ、惡人をしりぞけ、才能を取あげ、人の害をのぞき、人の利をおこし、ひろく民をすくひたすくべし。位なくとも、人をあはれむ心は、同じかるべし。人の財をつひやさず、人に苦勞をなさしめず、人の財をかりては、わが身を儉約にして、必ず、早く返して、人をくるしめず、老人病人をいたはり、かたわなる人をあはれみ、人の才能をねたまず、ほめすゝめ、みだりに人をそしらず、人に善をすゝめ、惡をいましめ、人ををしへてうまず、下部をあはれみ、風雨寒暑に、人をくるしめず、人のしへたげられたるをことわり、人のうらみいきどほりをとき、力あらば道橋を修理して、往來のなやみなからしめ、又は、禽獸蟲魚をみだりにころさず、草木をも、時ならざれば、みだりにきらず。凡そ、かやうのことを陰德と云ふ。是れ、人をあはれみ、物をめぐみて、天道につかへ奉る道なり。陰德を行ひ、久しきをつめば、必ず、其のむくいを求めざれども、後日に、必ず、天道のめぐみありて、しばしば、わざはひをのがれ、福壽をまし、其の家をさかんにして、子孫にさいはひあり。是れ亦、天道の善にさいはひし給ふ常理にして、古今和漢のしるし多きこと、あげてかぞへがたし。うたがふ可らず。貧賤の人すら、陰德を行へば、其のむくいかくのごとし。いはんや、一郡一鄕を領し、或は、つかさくらゐ高き人は、下をやすんじ、民を養ふを以て、職分と

すること、是れ、天より命じ給ふ所なり。常に、心を用ひて、天意にしたがひ、民をあはれみ、困苦をすくひ、政をおこし、仁をほどこさば、其の功大にして、天道のむくいも亦限りなかるべし。富貴の人、多くは陰德の行ふべきことをしらず、勢に乘じて、下のくるしみをかへり見ず、人のつひえをいとはず、わが身ひとつの榮花をきはむれば、陰德なくして、天地のいかり、人民のうらみ、つもりて後は、わざはひ出來、子孫にもむくゆるものなり。天道は、まことにおそるべきかな。又陰德をば行はずして鬼神にへつらひいのりて、さいはひをもとめ、わざはひをのがれんとして、無益のことをなし、民をくるしめて、財をつひやす。是をたのんで、わざはひを免れんとせば、天地神明の御心にそむきて、かへりて、わざはひあり。佛家にて、是を業福と云ふ。佛道においても、甚だきらふ所なり。佛道よりいはば、佛は慈悲を專らにすといへば、かゝる民のくるしみとなることは、佛意にかなふべからず。故に、羅泌が路史と云ふ書に、佛事さかんなれば、天譴を招くといへり。いふ意は、佛事結構すぎて、過分の財をつひやしてやまざれば、民のわざはひとなりて、必ず、天のせめありといへり。古も、其のためし多し。梁の武帝、伽藍を多くたて佛事を盛にせられんことを達磨に問はれしに、無功德とこたふ。武帝は、つひに臣下のために臺城におしこめられ、餓死せらる。かゝるこ

とを以て、佛事さかんに過ぐるは天の譴あり、又、佛意にもかなはずと云ふことをしるべし。又、むくいにあはんため、さいはひを求めて、善を行ふは、是れ、利欲の心よりいでたり、陰德にあらず。惡を行ふよりまされりといへども、誠の善にあらず。同じくちからを用ふることなるに、誠の心より善を行ふべし。いつはりを以するも、苦勞は同じことにて、いたづらごとなり。

◎人は、たかきいやしき、只、つねに仁心を存して、日々に、人に利益あることを行ふべし。慾をこらへ、慾をおさへて、日々善行をなすべし。いかりと慾をこらへざれば、善を行ひがたし。只、いかりをおさへ、慾をこらふる人、善をよく行ふ。わが身を利して、人に損あることを行ふべからず。我がちからにしたがひて、人をすくふべし。仁心をだにたもちなば、日々に、善行多かるべし。少しは、財をつひやし、少しは心をつかひ、少しはひまをつひやしても、人の利益になることを行ふべし。人のために益あることをせずして、わが身に利あることのみするは、小人の心なり。日々、善にならへば、善心日々にさかんになる。日々、惡にならへば、惡心日々にさかんになる。善にならへば、日々にたのしみ、惡にならへば、日々に苦しむ。善惡共にならひによれり。されども、惡にはおもむきやすし。故に、おそるべし。善にはすゝみがたし、故に、つとむべし。

◎およそ、人、精力をつひやす者、時にあたりては、其の損をしらざれども、時ありて盡きぬ。精力をやしなふものは、時にあたりては、其の益を見ざれども、時ありてさかんなり。人の善惡を行ふも、亦、かくの如し。德をつみ、行をかさぬれば、當時は、其の福をしらざれども、時ありて、世に用ひらる。義をすて理にそむくは、當時は、其の禍をしらざれども、時ありて亡ぶ。易に、積善の家には、必ず餘慶あり。積不善の家には、必ず餘殃ありといへるは、此の意なり。善は、積みかされて後、來るゆゑ、善を行ふ志はおこたるべからず。小善なりとも、行ふべし。惡はつもれば必ずわざはひとなる。故に、小惡なりとも、行ふべからず。おそるべし。

◎尙書に曰く、天道は、善にさいはひし、淫にわざはひす。又曰く、善をなせば、これに百の祥をくだし、不善をなせば、これに百の殃をくだす。又、老子曰、天道好レ還。是れ皆、天道の、善をこのみ惡をにくみ給ひて、善人にさいはひし、惡人にわざはひして、善惡のむくいをかへし給ふ理をいへり。此の理、古今和漢其の證多ければ、必ず、うたがふべからず。愚者は、此の理をしらで、天道をおそれず、只、眼前の利をむさぼりて、後のわざはひをしらず。豈ただ、義理にくらきのみならんや。わが身の禍福損得をもわきまへず、かなしむべし。不仁の至りなり。

◎孟子曰く、不仁者は、ともにいふべからず。いふ心は、不仁者は、道理をしへいさめがたしとなり。又曰く、其のあやふきことをやすんじ、其のほろぶるゆゑんをたのしむ。いふ意は、不仁者は、わが身のあやふきことをおそれずして、やすんじ、其の身のほろぶることを行ひて、たのしみとす。おろかなりと云ふべし。

◎孟子曰、人皆有二不レ忍レ人之心一。忍ぶとは、こらふるを云ふ。かんにんするなり。人たる者、必ず皆、人に對して、堪忍ならざる心あり。いふ意は、人のうれひくるしめることを見ては、わが心かなしみて、こらへがたくして、せうしがり、うれひかなしむ。是れ、人に忍びざるの心なり。卽ち、仁心なり。此の心、人皆これあり。孺子の井に入らんとするを見て、おどろきかなしむ心、是なり。此の心をおしひろめ、行ふは、仁をする道なり。人のきらひいやがることを、このかたよりしかけて、何とも思はずして、堪忍し、とがなき人をしへたげくるしめて、何とも思はずして、かんにんするは是れ、皆、人に忍ぶるの心なり。とにかくに、心つよくして、人のうれひなかなしまざるを云ふ。是れ、人の本心にあらず。うれひくるしみを見て、忍びがたきは、人にいぎらず、とりけだもの草木までで、そこなひくるしむるに、こらへがたきは、卽ち、仁心なり。しかるに、只、人にしのびざるの心

ありとのたまへるは、萬物、皆、わが一體にして愛すべけれど、中について、人においては、同胞なれば、其のあはれみ尤もせつなる故に、とりわき、人に忍びざるの心ありとのたまふ。人のうれひくるしみを見ながら、何とも思はで忍ぶは、心つよき人と云ふべし。其の心つよきといふは、卽ち、人に忍ぶる心なり。是れ、不仁の別名なり。

◎仁者は、人我のへだてなし。我が身を立つるを半とし、人を立つるを半とす。他人すら、へだつべからず。況んや、一家の親戚をや。況んや、父母兄弟をや。此の心をもて人倫にまじはらば、人我の私すくなくなりて、克伐怨欲の、人を害し、我を利せんとする心、やうやくうすく成りて、仁愛の道行はれなん。人もし此の心において、人我の偏執ふかく、只、己を利して、人をめぐむに心なきは、たとひ、無學の人といふとも、其のうまれつきたる天性の良智にも、かほどの理は知りぬべければ、など、其の本心にそむきて、かゝるさがなきことわざをばしぬるや。況んや、學者は、猶、其のつみ、ことさらおもきことにこそあれ。

◎子曰、仁遠乎哉、我欲レ仁斯仁至矣。仁は、人の心なり。なんぞ、遠きにあらんや。われにある故に、このんで求むれば、卽ち得やすし。是れ、仁至るなり。

◎張子の西銘の意は、仁人の、天につかうまつる道をいへり。天を父と稱し、地を母と稱し、人は、其のめぐみによりて生る。天地の氣をとりて、我が身體とし、天地の理をうけて、わが本性とす。故に、人は天地の子なり。天下にあらゆる民は、われと同じく、天地の子なれば、皆我が兄弟なれば、尤も愛すべきこと、云ふに及ばず、鳥獸草木などの萬物は、わが類にはあらざれども、同じく天地の氣をうけたれば、我がともがらなり。是れ亦、あはれむべし。みだりにそこなふべからず。大君は、我が嫡兄なり。大臣は、嫡兄の家相なり。老人をうやまふは、わが兄をうやまふなり。いとけなきものを、あはれむは、わが弟を愛するなり。凡そ、天下の病者、かたわ、子なき老人、父なきみなし子、やもめなどの、貧窮にしてたよりなきものは、皆、我が兄弟の内にて、不幸なる人なり。とりわき、おほれむべし。人たる者は、天の子にして、天下の人は、皆、わが兄弟なることかくのごとし。故に、おほよそ、人となる者は、天地につかへて、おそれつゝしみ、天地の道にしたがひ行はずんばあるべからず。人の子として、親に孝するがごとくなるべし。天理にそむくは、子として、父母にそむく、悖徳の子の如し。仁を害するは天のため賊子なり。賊子とは、親のあだかたきとなる子を云ふ。天につかふる道をつくして、天心にかなへる人は、子として、舜のごとき大孝の人なり。天災にあひて、難

儀に及ぶといへども、つゝしみて、天命をおそれしたがひ、天をうらみざるは、人の子としては、申生が、継母の譖にあひて、父獻公より殺されしかど、父母の我を愛するが如し。常の性を、全くたもち行ひてかゝざるは、たとへば、曾子の、父母にうけたる身體をそこなひやぶらざるが如し。天よりわれを富貴にし給ふは、父母の我を愛するが如し。天恩をよろこんでわするべからず。天より我を貧賤にして憂あらしむるは、天の我をにくみ給ふにはあらず、我が身に艱難を見せしめて、我が徳行を成就せしめんためなれば、天をうらむべからず。おやにつかふる孝子は、其の身いける間は、親にそむかずしたがひつかふ。死ぬれば、心やすんじて、おやにはづることなきがごとく、天につかふる人も、いける間は、天道にしたがひてつかへ奉るが、人となれる道なり。死ぬれば、心やすくして、天にはづる所なかるべし。是れ、いはゆる、朝に道をきいて、夕に死すとも可なりの意なり。凡そ、西の銘の意は、はじめより半まで、人は、天の子にして、天地萬物、皆、我が一體なることをとけり。半より後は、天地につかへて、仁を行ふ道をいへり。尤も、よく見て、其の理を自得すべし。

◎同じ事を、かさねてしばしばいふこと、老のくりごとのやうにて、見きく人、いとひきらひ給ふべ

けれど、仁の理、いたりて大なれば、我が愚にして、一たびに、たやすく理のきこゆるほどときがたければ、いかにもして、此の書を見る人に、古人のいたれる教をさとらしめんために、愚慮をつくして、かへすがへすいふのみ。

五常訓巻の四

義

◎中庸曰、義者宜也、尊レ賢爲レ大、朱子章句云、宜者分二別事理一、各有レ所レ宜也。周子も、宜曰レ義、釋名曰、義者宜也、裁二制事物一使レ合レ宜也。諸說、皆、宜しきを以て、義とす。宜しきとは、萬事萬物の品にしたがひ、其の理をわきまへて、相應するを云ふ。朱子は、義者心之制、事之宜といへり。制とは、たちわかつ意、裁判するなり。心の制とは、心中に善惡をわかつ所の理あるを云ふ。義の心にあるは、利刀の如し。物來れば、刀を以てたてば二つとなる。善惡を決斷すること、かくの如し。是れ、心の制なり。義の體とす。事之宜とは、諸事に相應して、其の理の宜しきにしたがふを云ふ。是れ、義の用とす。事之宜は、心の制ありて、善惡をたちわかちて後のことなり。人を愛するは、仁なり。父母・兄弟・妻子・親戚・朋友・賓客の親疎貴賤の品にしたがひ、其の相應に愛するは、宜なり。是を義と云ふ。人を愛するは仁なりとて、おやも他人も、一やうに愛するは、宜にあらず。是れ、墨子が兼愛なり。宜とは、其の物其の事に相應するを云ふ。たとへば、夏はかたびらをき、冬はわた入の小袖をきるが如し。宜しきに、品多し。人の位により、わが位により、時により、處により、年の老幼により、其の外、萬事萬物に付きて、相應あり。是れ、宜なり。宜にかなふは、卽ち義なり。朱子、又、義者斷制裁割之道理といへり。斷制裁割は、たちわかつの意。是れ、仁の溫和慈愛に對していへり。事物にのぞめば、其の善惡をたちわかつこと、たとへば、利刀を以て物を二にさくが如し。仁は、春夏の氣ののどけく、やはらかにして、萬物を生長せしむるが如し。義は、秋冬の氣のひやゝかにはげしくして、物をからししぼるがごとし。中庸に、義者宜也、尊レ賢爲レ大とは、上に、仁者人也、親レ親爲レ大といへるに對せり。仁は、あまねく人を愛する理なり。義は愛すべき人を、各〻其の品にしたがひて愛し、又、敬ふべき人をうやまふ理なり。其の中につきて、賢人を尊ぶは、尤も、義の大なるなり。いかんとなれば、多くの人の内にて、人をえらびわきまへて、賢人をたつとぶは、其の人に相應したることなり。是れ、宜なり。賢をたつとびて、大賢は師とし、小賢は友とすれば、

其の教へいさめをうけ、わが智ひらけ、萬の道理明らかになり。わが身のわざ、道理にかなふ故に、賢をたつとぶほど、大に宜しきことはなきなり。孟子も、仁は、人の心なり。義は、人の行くべき路とする所、道理なり。仁なければ、たまへり。仁は、人の心とする所、生理なり。義は、人の行くべき路とする所、道理なり。仁なければ、人心をうしなへるなり。義なければ、人道をうしなへるなり。凡そ、義は、常に居ては理にしたがひ、欲にしたがはず。變に居ては、節を守りて、利に走らず。艱難にのぞみては、君上のため身をすてゝ、忠を行ふ義なければ、常に居ては、理の宜しきをすてゝ、只、利のためにし、變にのぞみては、恩をわすれ、德にそむき、利につき、害をのがれ、命ををしみ、死をおそれ、君父をすてゝ、敵にくだり、つたなきふるまひをしてもはぢず、禽獸にひとしきわざなり。皆是れ、義を失ふなり。

◎仁は、溫和慈愛なるを云ひ、義は、斷制なれば、善惡を二にわかちて、善をこのみ惡をにくむを云ふ。ひろく衆を愛するは、仁なり。小人を遠ざけ、君子に近づくは、義なり。財を人にほどこすは、仁なり。あたふべきか、あたへまじきかをはかりて、あたふべきものにあたふるは、義なり。こゝを以て、仁は理一なり、義は分殊なり。仁は、ひろく人を愛す。是れ、理一なり。義は、人を愛するに、親疎貴賤貧富をわかちて、其の宜しきにしたがひて、各〻其の分にかなふは、分殊なり。

◎尚書に、以レ禮制レ心、以レ義制レ事といへり。禮は、敬のみ。敬して、心の私慾を制するなり。義は、以て、事を制すとは、萬事を行ふに、其の事に宜しく制するなり。制するとは、たとへば、長きをたちてよきほどにし、多きをへらしてよき程にするが如し。物を裁判して、よきやうにするを云ふ。是れ、仁をたすくるなり。一年の功も、春夏生長するは、仁なり。秋冬收藏するは、義なり。收藏とは、草木零落し、生氣をさまりて、根にかへるを云ふ。仁ありて義なければ、たとへば、春夏の生長するばかりにして、秋冬の收藏なければ、萬物成就せざるが如し。子をそだつる事を以ていはば、子を愛するは、仁なり。子の惡を戒しむるは、義なり。愛せざれば、恩なくして他人のごとし。愛のみにて、いましめざれば、其の子不義にながれ、惡におちいりて、わざはひとなる故、姑息して愛するが、かへりてあだとなりて、眞の愛にあらず。君を愛するは、仁なり。君にあやまちあればいさめ、君のために身をわするゝは、義なり。君として、下を愛するは、仁なり。臣の惡をいましめ、臣下の才德の高下と、貴賤の位にしたがひて、各〻相應につかふは、義なり。又、人民を愛し養ふは、仁なり。法をたて、罪あるを刑して、いましむるは、義なり。愛せざれば、人民安からずして、生養をとげず。いましめざれば、惡人こりず、人を妨ぐる故、仁愛の道行はれず。惡人をいましむるも、人を

たすけんとの心なれば、義も、仁よりいづ。人を愛するは、仁なり。文道を以て、人民を愛しなづくるは、仁なり。武道を以て、人をおどし、敵をうち、亂をしづむるは、義なり。文武の道も、即ち、仁義よりいづ。凡そ、此等の理を以て、おして仁義のわかちをしるべし。仁義は、もと一理にしてわかれたり。一をかくべからず。人道は、只、仁義の二にあたつ。人の禽獸にかはれるは、只、仁義あるによれり。人は、萬物の靈と稱し、天地の性は、人を貴しとし、萬物にすぐれたれば、わが身ながらもたふときは、是れ、仁義の性ある故なり。もし、仁義をすてゝ行はずんば、なんぞ貴ぶにたらんや。

◎孟子の、梁惠王に對して、利をおさへて、仁義を說き給ふは、仁なれば、心に私欲なくして、人を愛する故に、人をそこなひて、わが身を利することはせず。義なれば、人にとると、人にあたふると、必ず、宜しきにかなふ故、とるまじき物をとりて、わが身ひとりを利することをばせず。利は、仁義のうらなり。わが身に私して、人をかへりみず、わが身を利すれば、必ず、人を害す。其のはては、必ず、わが身のわざはひとなる。義を行へば、利を求めずして、利おのづからあり。故に、利を以て利とせず、義を以て利とせざれども、利を得んために義を行ふは、眞の義にあらず。

◎董仲舒曰、仁人正二其義一、不レ謀二其利一、明二其道一、不レ計二其功一。利とは、義を行ふ自然のしるしなり。故に、利者義之和也といへり。君につかふるを以ていはば、朝夕、つゝしんで君によくつかふれば、君もよろこびて、我を愛し給ふ。是れ、義の和する所、利なり。君子の、君につかへて義を行ふは、只、一すぢに君のためにして、私のたくみにせず、君の寵愛をねがふ心あるべからず。是れ、義を正して利をはからざるなり。君につかふるにかぎらず、萬のこと、皆、かくのごとし。すこしも、わがためにする心あるは、利なり。義にあらず。此の利は、みだりに財祿をむさぼるごとくなる利欲にはあらず。仁人のことなれば、利欲は云ふに及ばず、義を行ひて。おのづから來る自然のしるしを得んと思ふは、利なり。張南軒、義と利とをといて曰く、義は、爲にする所なくして爲るなり。利は、有レ所レ爲而爲レ之也。いふ意は、義は、只、我がすべき道なればするなり。名聞利養か。何ぞ、わが身の爲にするにはあらず。もし、名聞利祿私愛のためにするは、義にあらず。是れ、利なり。董子の言、まことに至れるかな。張南軒の說も、亦、道理分明なり。共に、諸子にすぐれたり。君子の道は、萬事の行、皆、義理に志して、我が身のためにはからず。是れ、君子の心とす

る所、小人のことなる所なり。たとひ、天下に公なる善事を行ふとも、心にわが爲にする私あらば、是れ、義に非ず、利なり。小人の身に善行なくして、心ひとへに利をむさぼりて、義をすつるは、言ふにたらず。たとひ、人ありて、身に行ふことと善なれど、其の心に、露ほども、わが利をはかりれがふ所ありて行はば、鄕里のほまれある人といへども、義にあらず。此の所は、君子の心術の上にてくはしき論なり。小人の上の沙汰にはあらず。たとへば、潔白なる物に、一點の墨を付くれば、白と云ひがたきがごとし。天理人欲同ㇾ行異ㇾ情と、胡五峯いへり。天理は、義なり。人欲は、利なり。義も利も、身の行ひは善なれば、同じことなれど、心底に、公と私とのかはりあり。是れ、同ㇾ行異ㇾ情なり。是れ亦、義利の分ちなり。又、王霸の辨も、こゝにあり。いにしへの聖人、仁義を行ひて、民をなづけ給へば、國天下の民、自らよろこんで、まことに歸服す。是れ、誠の道を以て、民をさむるなり。是を王道と云ふ。堯舜禹湯文武などの行ひ給ひし道是なり。又、仁義の德はなけれど、仁義の名をかりて、善を行ひ、民を服し、亂をしづめて、國天下を得んと思ふ。是れ、行ふ所は善にして、王道に似たれども、內心には、國土を得んと思へる利欲ありて、僞りて仁義を行へるなり。是を霸道と云ふ。齊の桓公、晉の文公などの行へるわざなり。是れ亦、義と利とのわかちなり。學者

のなす所も、是に同じ。孔子曰、古之學者爲ㇾ己。是れ、ひとへに、身をなさめん爲にせし學問にて、義なり。又曰、今之學者爲ㇾ人。是れ、人にほめられ、名を得んためにする學問なれば、利なり。しかれば、王伯のわかちも、君子小人の分も、學問の實否も、皆、義と利との二ツよりわかる。

◎子路問へり。君子は勇をたふとぶやと。子曰く、君子は義をたふとぶ。位ある君子、もし、勇のみありて義なければ、其の力にまかせて、反逆をなし、亂をおこす。位なくいやしき小人、もし、勇のみにして義なければ、其の力あるをたのみて、盜賊をなす。凡そ、勇は、氣にちからありて、人をおそれざるを云ふ。力をたのみて義なければ、かくのごとし。義は、事の主なり。義を以て事を行へば、其の事皆正なり。勇は、まことに善をなすべき力なり。義を以て勇を行へば、其の勇貴ぶべし。治世には、其の力を以て善をなし、亂世には、其の力を以て、武を行ひ、敵をうち、亂をしづむ。是れ皆、義を以て勇を行ふ德なり。まことに貴ぶべし。もし、義なくして勇を用ふれば、かへりて、道にそむき、物を害す。たとへば、刀を以て、敵をきり、惡人をころすは、義なり。刀を以て、つみなき人をきるは、暴惡と狂亂となり。

◎見レ善則遷、有レ過則改。此の二句、易の益の卦の文なり。わが行ふ所、わが行ふ所より、まさりて善なるを見ば、即ち、わが行へることなをすてゝ、すこしなりともまされるかたにうつるべし。是れ善を見て、則ちうつると云ふ。いまだよきことゝしらずば、すべきやうなし。すでにすべき義としりて、行はざるは、ちからもなきことなり。是れ、義を見てせざるは、勇なきなり。過あれば則ち改むとは、わが行あやまりあらば、即時に早く改むべし。猶豫して、わがひがことをかざり、改むるにはばかることなかれ。義を見てうつるは、其の工夫かろくしてやすし。過を改むるは、其の工夫おもくしてかたし。十分にちからを用ふべし。たとへば、うす白き物を潔白にするはやすし。黒き物を白くすることはかたきが如し。此の二は、即ち、義にうつる道なり。是れ、學問の道のつとむべき所、力行の要なり。

◎見レ利思レ義。利は、一切のわが身のたよりよきことなり。財祿にかぎらず。財祿を得るも亦、其の中にあり。わが身のため、たよりよく、或はたからを得、祿を得ることありとも、得べきか得べからざるか、只、義のある所をおもふべし。利をむさぼりて、義をわするべからず。義と利とは、善と悪と、君子と小人とのわかるゝ所なり。義とは、天理の公なり。利は、人欲の私なり。專ら、わが身のためよきやうにするは、利なり。我が身を利せんとすれば、必ず、人に害あり。是れ、悪なり。人に害あれば、必ず、わがわざはひとなる。人を利するは、是れ、義なり。義あれば、道理を和する故、利を求めずして、自ら、利は其の内にあり。されども、利を得んため、義を行ふは、私意なり。君子のする所にあらず。

◎于曰、君子之於二天下一也、無レ適也、無レ莫也、義之與比。君子は、天下一切のことにおいて、專らに、主としてすべきこともなく、又、すべからざることもなし。是れ、萬のこと、善悪一定せず、只、時の宜しき道にしたがふべし。一事を以ていはば、世に出でゝ必ず仕ふるを專にせず、是れ、無レ適なり。つかへまじき時はつかへずして、世をのがるべし。又必ず、仕へざるを以てもれとせず。是れ、無レ莫なり。つかふべき時はつかへて、道を行ふべし。然れば、つかふるもつかへざるも、只、義といもにしたがふべし。つかへてよろしき時はつかへ、つかふまじき時はつかへず。是れ、義にしたがふなり。たとへば、道をゆくに、はやきがよしといふは、適なり。はやきをあしゝとするは、莫なり。はやく行きてよき時ははやく、しづかに行きてよき時はしづかなるは、義といもにしたがふなり。人に物をあたへんと定むるは、適なり。あたへまじきと定むるは、莫なり。あたふべき時はあたへ、

あたふまじき時はあたへず。是れ、義とともにしたがふなり。萬のこと、皆、是を以ておしてしるべし。義は、事の主なり。萬事の善惡一定せず、只義にまかせて行ふべし。是れ、善なり。

◎體遠に曰く、何をか人義と云ふ。父慈・子孝・兄良・弟弟・夫義・婦聽・長惠・幼順・君仁・臣忠、十者これを人義と云ふ。仁は、人を愛する德なり。人を愛する中について、各〻、其の人によりて、相宜しき道あり。是れ、義なり。父は子をいつくしみ、子は父に孝を行ひ、兄は弟によく弟は兄にしたがひ、夫は婦に義あり、婦は夫にしたがひ、君は臣に仁あり、臣は君に忠ある、此の十の者は、人の義なり。義は、各〻、其の人に相應して宜しきなり。是れ、人倫の道にして、宜しく行ふべき道なり。故に、人義と云ふ。

◎見レ危致レ命、見レ得思レ義。論語子張之語也。人の危難なるを見ては、わが命を惜しまず君父の爲に身をすつるは、言ふに及ばず、朋友といへども、時宜によるべし。或は、朋友と相ともなひて、道を行く時、不意に敵する者ありて、朋友を殺さんとす。たとひ、わが老父母ありとも、其の所を退き去りて、身をのがるべき義にあらず。身をすて、敵をふせぎて、友を助くべし。是れ、危きを見て、命を致すなり。此の時、もし、われ父母ありといひてにげさらば、義にあらず。いまだ事もなきつれ

の時に、かれて、朋友にわが身をゆるしあたふるは、きを見て、命をすつるは、義なり。不孝にあらず。凡そ、義をすてゝ行はざれば、死ぬべき節義にあたりても、身をのがれ、かひなき命いきて、はぢを世々につたふ。かくあらんよりは、義を行ひて、死して榮名を世にのこさんこそ、なきあとまでの面目ならめ。見レ得思レ義とは、財と祿とを得るに、みだりに、利をむさぼりて、得まじき物をとるは、義にあらず。此の物、わが得べき義か、得べからざる義かと、みづから思案して、義にあたらば、得べし。義に害あらば、得べからざる義ならば、萬鍾の祿は云ふに及ばず、一介といへども、人にとるべからず。もし、とるべき義にあらば、舜の堯の天下を得たまふも、不義なりとすべからず。得べからざる義にありても、わが得るかたに心ひかれて、得ても義に害なしと思ふは、私欲にひかれて、是非の心まよひくらきなり。

◎義は、天理の公なり。利は、人欲の私なり。二の者は、各〻別のことにて、雪と墨との如し。然れども、義を專らにして、わが身に私せず、人のため宜しくすれば、利を求めざれども、おのづから、わが爲よからずと云ふことなし。故に、易にも、利者義之和也と云ふ。大學に、國は、利を以て、

利とせず、義を以て利とすといへり。利慾をほしいまゝにして、わが身ひとつを利せんとすれば、必ず、人に害ありて、わが身のわざはひとなる。古語にも、さいはひは禍のかくるゝ所といへり。愚者は、此の理にくらくして、只、われ一人のためよからんことをはかれども、是れ卽ち、わが身の害となる。眼前の利をはかりて、後來のわざはひをしらず。

◎子曰、君子義以爲レ質、禮以行レ之、孫以出レ之、信以成レ之、君子哉。言ふ意は、君子の事を行ふは、義を以てしたぢとすべし。義は、事を制する本なればなり。萬の事を行ふに、まづ、義か不義かをかへりみるべし。義にあらずんば、行ふべからず。義に合はば、行ふべし。是れ、義を以てしたぢとするなり。其の上は、禮を以て、すべよく行ひ、孫を以て、へりくだりて、人にたかぶらず、信を以て、始終、眞實に行ふべし。是れ、君子の行なり。されども、義なければ、其の事の主なし。故に、禮孫信の三そなはりても、非義なれば、見るにたらず。尙書に、以レ義制レ事といへるも、此の意なり。

禮

禮は、心につゝしみありて、人をうやまふを本とし、萬事を行ふに、則にしたがひて、正しく理あ

るを文とす。則とは、作法なり。孝經に。禮敬而已矣。言ふ意は、禮は、敬を專らとす。而已とは、此の外にはなしと云ふ詞なり。朱子曰、禮の本は在二于敬一レ人。人をうやまふは、心のつゝしみよりおこる。人をうやまふも、其の人をあはれむ心より出づる故、朱子も、禮は仁のあらはれたるなりといへり。禮記曰、禮は理也。周子曰、理曰レ禮。理は、すぢめなり。すぢめとは、萬事を行ふに、各〻正しき則ありて、其の則にちがはざるは、卽ち、理なり。理にしたがへば、萬事正しくをさまる。理にしたがはざれば、萬事邪にして、みだれて行はれず。朱子曰く、禮は、天理の節文、人事の儀則なり。天理は、自然に定まりて、かくのごとくなるべき道理なり。節文は過不及なきよきほどなるを云ふ。節は、過ぎざるなり。文は、不及なきなり。うやまひ過すは、節にあらず。うやまひたらざるは、文にあらず。かざり過るは、節にあらず。いやしくしてふつゝかなるは、文にあらず。是れ皆、理にたがひて、禮にあらず。萬事の節文、皆、かくのごとし。人事の儀則とは、人の行ふわざの、行儀にあらはれたる作法なり。視聽言動の四の身のわざも、萬事の制行も、よきほどなる自然の法あり。是れ、人事の儀則なり。中庸には、親レ親之殺、尊レ賢之等、禮所レ生也といへり。言ふ意は、親類をしたしむは、仁なり。其の內に、父子・兄弟・諸父・從兄弟などの品あり。其の親疎尊卑の次第

同じからざる、是れ、親レ親之殺也。賢を尊ぶは、義なり。人に、大賢あり、小賢あり、才能ある人あり、識慮恩徳ある人あり。其の内に、大小高下の品あり。是れ、尊レ賢之等也。親類の品に應じてしたしみ、大賢小賢の品によりてうやまふは、是れ即ち、禮の生ずる所なり。しかれば、禮は、仁義を行ふに、各〻、其の品にしたがひて、程よきをいへり。

◎威儀をつゝしみ、衣冠を正しくし、視ること、聽くこと、言ふこと、動くことの四事につきて、各〻、過不及なく、よき程の法あり。又おやにつかへ、君につかふるに、各〻、さだまれる法あり。兄弟夫婦に對し、賓客にまじはり、臣下に對し、民をつかひ、先祖鬼神をまつるも、法あり。是れ、禮は、皆、天理のよきほどなる節文にして、人事の定まれる作法なり。仁義皆理なりといへども、とりわき、禮を理といへるに子細あり。理とは、行ふべきすぢめなり。萬事を行ふに、皆、定りたる作法あり。是れ、人の行ふべきすぢめなり。是れ即ち、禮なり。こゝを以て、聖人のとき給へる禮の字は、理の字にあたれり。されども、理といはずして、禮といへるに子細あり。理といへば、かたちとわざにあらはれたる迹なくして、虚なり。故に、取守しがたし。禮は、理の品節文章とて、人のわざに、しなしなあり、よきほどありて、其の理あらはれ見え、形をなして、實なり。故に、取守るべし。是を以

ての故に、禮といひて、理といひ給はず。釋名に曰く、禮は、體也。言レ得二事之體一也。此の意は、體とは、かたちなり。禮は、心に本づけども、あらはるゝ所は、事の上に見えたるかたちを云ふ。人の行義作法の正しく、三千三百のわざにあらはれて、法の正しきが禮なり。是れ皆、かたちありて、目に見ゆる所なれば、體なりと云ふ。ことにあらはれずして、かたちなくんば、禮にあらず。しかれども、又、かたちの上にかゝはりて、心上に誠敬なくば、文のみにて本なし。禮にあらず。只、敬を本として、外に行ふに文あるは、禮なり。

◎人に、血氣あり。身に、耳目口體の欲あり。心に、喜怒哀樂の情あり。もし、禮を以てこれを節せざれば、人欲にしたがひ、天理をうしなひて、人事亂れ、人道すたる。こゝを以て、聖人、禮を以て教とし、彼の血氣よりおこる情慾をふせぎたまふ。

◎曲禮曰、毋レ不レ敬。凡そ、人事の視聽言動より出づる所、萬事敬まざることなかるべし。敬とは、心に、道にたがはんことをおそれて、ほしいまゝならざるを云ふ。是れ、心をたもち、身をなさめ、事を行ふ則なり。是れ、禮の本なり。いにしへより、聖人賢人の心法は、敬を以て要とし給ふ。凡そ、身の行儀作法なく、道を失ひ、禍おこるも、皆、敬まざるによれり。古語にも、敬しめ

ば、禍にかつといへり。つゝしめば、わざはひなし。白樂天が言に、福與レ禍在二乎愼與レ不レ愼一といへり。

◎凡そ、禮あるを以て人とす。若し禮なければ、人の法すたり、鳥獣に同じくなりて、人道たゝず。禮なきの至りあらはし、父にあひていかりのり、母に帶をとらせて、立ちて辭語し、君の過惡をそしりあらはし、兄と財をあらそひうばひ、東家のかきをこえて、處女をひくの類、皆是れ、禽獣の行なり。人倫の法にあらず。

◎禮の初は、聖人の、心になきことを作り出して、なしへ給ふにあらず。生れつきたる人情に本づきて、過不及なきよきほどとなる理をなしへ給ふなり。人の身に、飢渴、内に生じ、寒暑外にふるゝ故、飲食、衣服せざることあたはず。飲食をよきほどにし、衣服を正しくするは、禮なり。うゑかつえずるとて、みだりに多くのみくひ、人にゆづりなく、あらそひ食ふは、禽獣の行なり。わが身に應ぜざる衣服をきるは、上をおかし、下にせまり、或は、みだりなる服食を用ふれば、身に相應せず。又、男女の色も、心にまかせぬれば、淫亂にいたるゆゑに、夫婦の別、男女の閒を正しくす。君臣父子、凡そ、人倫の交も、其の理にかなひて、よきほどに愛しうやまふ法あり。これ皆、禮なり。禮なければ、君臣・上下・尊卑・貴賤・長幼・男女のわかちなく、師・弟子・朋友・賓客のまじはりうすし。葬祭の禮なければ、死を送り神に仕ふるの道なし。故に、禮は、人の身、禮あればやすく、禮なければあやふし。人の身に、禮なし。故に、古語に、禮は、人之急なりといへる、誠なるかな。人たる者、禮を行はずんばあるべからず。

○禮儀三百、威儀三千とて、およそ、人の行ふべき大禮三百條小禮三千條あり。是は、其の大概をあげていへり、必ず、三百三千に限るべからず。皆是れ、つゝしみうやまふ心よりいで、天理の程よき所にして、人事のしかるべき作法なり。つゝしみうやまふ心は、禮の本なり。三百三千の品は、禮の文なり。文とは、外のあやなり。本なければ、禮たゝず。文なければ、禮おこなはれず。故に、禮は、本をおもんず。文も亦、そなはらずんばあるべからず。

◎君子は、耳に、非禮の音樂淫聲をきかず。目に、非禮なる見物を見ず。口に、非禮の事をいはず。身に、非禮のうごきをなさず。飲食を愼しみ節にして、過さず。皆是れ、禮の制する所なり。

◎口の過なきより、身の過なきはかたく、身の過なきより、心の過なきことはかたし。三のもの、

ともに、禮を以て正さずんばあるべからず。

◎威儀を正しくすとは、身の形儀をつゝしむなり。是れ、禮のおもんずる所なり。外の形儀みだりなれば、内心もともに不敬になる。敬は、心にあるのみならず、内外ともに正しくすべし。坐する時、立つ時、行く時、臥す時、皆、禮ありておこたるべからず。耳をかたぶけて、人の密事をきくことなかれ。ながしめに、人を見ることなかれ。其の勞するにあらずんば、我が家にありても、おこたりて、みだりに臥すことなかれ。立つに、かたし立すべからず。坐して、兩足をのぶべからず。かたぬぐことなかれ。人の密事をうかがはず、たはぶれの顔色をすべからず。

◎朝は、はやく起きて、事をつとむべし。古語に、一日の計は朝にありといへり。朝よりおこたれば、一日のつとめはかゆかず。故に、朝おくることの遲速を見て、其の人の家の、興ると衰ふるとを知るべしと、古人もいへり。夜も、學問家業をつとむべし。夜は、氣靜なる故、事功尤もはかゆくものなり。つとめてやまず、君子の、人にまさるゆゑんなり。おこたりてつとめず。衆人の、君子に及ばさるゆゑんなり。士のみならず、農工商も同じ。よくつとめておこたらざれば、必ず、家をおこす。或る人うたがふ。君子、此の如くに、つとにおき夜半にいれて、おこたらずんば、恐らく

は、精力つかれて、養生の道にあらずと云ふ。答へて曰く、しからず。禮記に曰く、君子莊敬なれば、日につよく、安肆なれば、日におこたる。いふ意は、行正しく、つゝしみありてつとむれば、精力日々につよくなる。是れ、血氣めぐりて、陽氣發生する故、病生ぜず。身をやすくわがまゝにして、つとめざれば、日々におこたりて、よわくなる。是れ、血氣さがりて、とどこほり、元氣めぐらずして、養生の道にたがへばなり。

◎禮記云、禮樂不レ可二斯須去一レ身。君子の道、禮樂の二を以て、身ををさめ、人を教ふ。禮は心の恭敬を本として、萬事身の行の上に節文あるを云ふ。樂とは心の和樂を本として、昔、聖人の作りたまへる歌舞八音（金・石・絲・竹・匏・土・革・木）の音樂の文あるを云ふ。音樂は、心の和をみちびくそなへなり。後代の淫樂の心をとらかすとは。大に同じからず。禮を以て身をつゝしみをさめ、樂を以て、心をやはらげ樂しむ。此の二の事、しばらくも身をはなるべからずとなり。是れ、古の教の法なり。後代には、禮樂のをしへ傳はらず。されど、心のつゝしみと樂みとは、今とても、しばらくわするべからず。つゝしみ樂しみの二は、たがひにならび行はれて、相そむかざるべし。禮勝てば、かたすぎて、人と我との間和せず。樂勝てば、和過ぎて、禮儀をうしなひてあしきかたにながる。禮樂二ながらそなはりて、

よきほどの中道行はる。故に、論語に、禮の用は、和を貴しとすと云ふ。又曰く、有レ所レ不レ行、禮以節すと云ふ。是れ、禮樂の二を以て、身ををさめ、事を行ふよきほどの道あるを云ふ。

◎聖人、禮樂を作りて、人に教へたまふは、本なきことを作り出したまふにあらず。凡そ、禮は天地の序なり。序とは、次第あるを云ふ。陰陽の氣、時節にしたがひて、次第あるは、天地の禮なり。樂は、天地の和なり。和とは、陰陽の氣、時にしたがひて和同するを云ふ。是れ、天地の樂なり。聖人、天地の序と和とに本づきて、禮樂を作り給ふ。故に、禮記に曰く、天高地下、萬物散殊、而禮制行矣、流而不レ息、合同化而樂興焉。是は、禮樂の根源をいへり。禮の本源をいはば、天高く地低くして、各〻其の位にあり。日月星辰より、風雨・霜雪・草木・禽獸等の萬物に至るまで、各〻其の形色をあらはし、各〻時節の序あり。是れ、天地萬物の上に、自然に、各〻高下・次第・品節わかれたり。即ち是れ、天地の禮なり。聖人、これに法りて、禮を作り給へり。禮は、序を以て主とすればなり。序あれば、上下・貴賤・親疎・長幼の位正しくして亂れず。樂の本源をいはば、天地の間、陰陽五行の氣、古今四時にめぐり行はれて、暫くもやまず。其の氣和合して、萬物化生す。是れ即ち、天地の樂なり。聖人、これに法りて、樂を作り給ふ。樂は、和を主とす。和ら

げば、人我一同にしてそむかず、道理にしたがひて、萬事行はる。是れ、禮樂の根源なり。凡そ、聖人のなしへは、皆是れ、天地の道を本とし、これを法としてしめし給ふ、天理の外に、別の教なし。ここを以て、程子も、儒者は天に本づくといへり。聖人の道は、即ち、天地の教なり。

◎君子は、天地をおそれうやまふ。故に、大風・大雨・迅雷などの時は、かたちをあらためて、夜は、おきて衣服をきて坐す。是れ、天のいかりをうやまふ禮なり。是れ亦、天につかうまつる道の一端なり。

◎少儀に曰く、虛を執れども盈をとるが如く、虛に入れども、人あるが如くにす。いふ意は、内に物なき器をとるにも、みちてこぼれやすき器をとるが如く、おそれつゝしむべし。人の居らざる家に入るにも、人あるが如くつゝしむべし。是は、敬の心常にあるを云ふ。禮の本なり。

◎衣服は、身の表なり。人にまじはるに、先づ、かたちを見る。次に、言を聞き、次に、行ひを見る。故に、孝經孟子などに、衣服と言語と德行をつらぬるに、衣服を先にせり。衣服は、かたちをおほふ裏のかざりなれば、えらぶべし。わが位に應じ、年に應じ、處に應じ、時に應ずべし。紫朱紺

紅などの閨色は、禁じて著るべからず。又、大なる繪がた、大なるしま、目にたつ染物おり物などは、ひなびていやし。このむべからず。わが年よりくすみ過ぎたるは、おひらかにして、目にたゝず。みやびやかにして、わかきもおいたるも、人の心の邪正は、おしはからるゝものなれば、えらぶべし。

◎飲食は、身をやしなふものなり、然るに、飲食をほしいまゝにして、慾を制するにあり。飲食の禮多し。中について、放飯流歠をいましむべし。放飯とは、ほしいまゝに、飯を多くくらふなり。飯にかぎらず、一切の食を多くくらふは、放にして非禮なり。ことに、飯を多くくらふは、見ぐるしく、腸胃をそこなふ。流歠とは、ながなるゝがごとくに、あつもの酒など、多くのむを云ふ。此の二は、とりわきいましむべし。凡そ、禮のはじめは、飲食にはじまると、禮記にいへり。禮なければ、飲食をほしいまゝにして、見ぐるしく、禽獸の行にちかし。こゝを以て、飲食の節をつゝしむは、禮の始なり。孟子にも、飲食の人は、則ち、人これをいやしむ。其の小をやしなひて、以て、大をうしなふがためなりといへり。

◎禮は、未發にいましむ。人の情慾の、いまだおこらざる先に、早くいましむれば、邪惡にいたらず。故に、禮の教は、目に見えぬ所に、大に益ありて、日々に善にうつり、罪に遠ざかりて、みづから知らず。法は、既に、惡事いで來て、後に禁ず。其のしるし目に見えて、其の益少しなり。男女の別ありて、禮法正しければ、淫亂にいたらず。凡そ、淫亂は、必ず、初に禮法なきより起こる。わかき子弟のともがら、早く禮を教へ、内外の別きびしければ、かゝる惡事におもむかず。朋友の交、禮ありてうやまへば、あらそひたゝかひに至らず。凡そ、鬪諍は、必ず、無禮より起こる。君は、臣をつかふに禮あれば、そむきはなるゝにいたらず。禮の、人に益あること、かくの如し。故に、禮の教は、本なり。法のいましめは末なり。たとへば、無病の時、身をつゝしめば、病おこらず。病おこりて、藥をのみ、灸をするは、末なり。邵子の詩に、病後能く藥を服せんより、病前よくみづから防がんにはしかじといへるがごとし。又、人家に、火災出來たる時、ちからなつくして、ふせがんよりは、かれて、火用心きびしければ、火災なきが如し。

◎禮記に、子曰く、敬ひて禮にあたらざる、これを野といふ。うやまふは、まことによけれど、禮にかなはざれば、これ野しきなり。うやまひに、よきほどの法あり。過不及ありて、其の法にかなはざるは、是れ、禮にあらざるなり。いはんや、おごりて理にかなはざるは、ことに禮にそむけり。

野しきより、其の害甚し。

◎飲食と、男女と、財寶とは、人の大欲の生ずる所なり。故に、およそ、人の過惡の出來るは多くは、此の三より起る、心のこのむに打ちまかせては、あやぶし、道理にそむき、わざはひ生ずる本なり。此の三をこのむは、人情にして、なくんばあるべからず。されど、禮を以て節せざれば、これを用ふる理を失なひて、必ず、大慾生じ、惡になづがる。故に、禮なければ、人道不ㇾ立して、禽獸の行におなじ。

◎周子、陰陽は、理あつて後に、和らぐといへり。二氣の流行正しければ、四時の和行はる。人の道も、亦同じ。禮正しく、次第みだれざれば、各、其の理を得て、和順行はる。故に曰く、禮者天地之序也、樂者天地之和也。禮は先にして、樂は後なり。人倫の交、先づ、禮法正しく、次第亂れざれば、人と我と和合す。君臣・父子・夫婦・兄弟の閒、其の禮正しければ、おのづから和順なり。若し、禮なくして、臣下のうときが親しきをこえ、賤きが貴きをこえ、庶子が嫡子をこえ、妾は妻をこえて、次第亂るれば、必ず、うらみそむきて、和合せず。朋友の交も、禮正しければ、和睦して、あらそひなくうらみなし。又、喧嘩口論などすることも、皆、無禮よりおこる。若し、禮儀正しくば、和順行はれて、鬪諍何ぞおこらんや。故に、人の鬪諍をやむるの道も、禮を正しくするにあり。

◎朱子曰く、禮は、卽ち理の節文なり。いふ意は、飲み食ふは理なり。されども、のみくふべき理なりと云ふ。飲食の一事をいはば、うるかわく時に、飲み食ふは理なり。されども、のみくふべき理なりとて、みだりに多くのみくへば、放逸にして、みだりがはしく、又必ず、病を生ず。のみくふべき理にあたりて、過不及なく、よきほどなるが、理の節文なり。萬の事、是を以て知るべし。

◎林放と云ひし人、世上の禮を行ふ者、かざり多く、ことわざしげくして、末をもはらつとむるを禮の本意にあらじと思ひて、禮の本を孔子にとふ。凡そ、萬の事、まづ、其の本を得れば、其の末おのづから出來るものなり。たとへば、樹木の根本堅固なれば、千枝萬葉皆これより出づるが如し。本をうしなひて、末のみをつとむれば、其の實を失ふ。故に、其のつとむることしげくして、其のなすわざ小なり。しかるに、時の人のまよへるをさとり、禮の本に志あるを大なる閒なりとて、先づほめ給ふ。さて、こたへてのたまふ意は、萬の禮は、中を得るを貴ぶ。中は、過不及なきなり。是れ、禮の當然にて、至極せる道理なり。されども、中におこなふことならずば、其の本をつとむべし。萬の事かざりのみにて、外の儀文、華美にして、おごらんよりは、只、れがはくは、儉を行ふべし。儉とは、

其の心眞實にして、かざりいつはりなきを云ふ。是れ、禮の本なり。此の如く、儉にして、眞實にかざりなければ、本たちて、末おのづから生ず。又、禮の內にて、取わき、父母兄弟などの死せる時、喪に居るは、尤もせつなる時にて、つゝしんで心を用ふべきことなり。喪に居るに、其の死をいたみかなしむは、喪の禮の本なり。しかるに、外のかざりさかんにして、作法はそなはれども、心にかなしみの誠なきは、是れ、本なきなり。かくあらんより、只、いたみかなしみあつくして、外の法はおろそかならんこそまさるべけれ。凡そ、禮は、先づ、心の誠實なるを本とすれば、本なくして、末のみをさまらんより、しかじ、本立ちて末おろそかなるには。是れ、本末そなはらずして、偏なれども、外のかざりのみ多くして、內心に本とすべき誠なきには、はるかにまされり。本立てば末は是より出づることわりなり。末のみをさまりて、本なきは、誠なくして、禮の道たゝず。喪の禮は、ことさら眞實ならでは行はれざるものなれば、すでに、禮の本をときて、又、其の內より、喪の禮の本をかゝげ出してとき給ふ。

◎禮器に云ふ、先王の禮を立つる、本あり、文あり。忠信は、禮の本なり。義理は、禮の文なり。本なければたゝず。文なければ行はれず。いふ心は、禮に本あり。忠信を本とす。忠信は、まことなり。禮に文あり。義理を文とす。義理とは、外に行ふ所のあらはれたるしわざの、すぢめよきを云ふ。本なければ、禮の道たゝず。萬の事、皆、まことわざ、理にかなはざれば、文なくして、禮の道行はれず。必ず、本末二ながらそなはりて、禮の道全し。されど、先づ、本をつとむるを要とすべし。忠信を本として、禮文行はるゝは、たとへば、味甘き物は、五味（鹹・辛・甘・苦・酸）の和をうけ、色白きものは、五色（青・黄・赤・白・黒）の采をうくるがごとし。忠信ある人は、禮を學ぶべし。質よき故に、外の禮文そなはりやすし。

◎禮は、中を得るをたつとぶ。中とは、過不及なきを云ふ。管仲・晏子、此の兩人、皆才力すぐれたりしかども、聖人の道をしらず。管仲は、身上よりおごりて、禮をうしなひ、晏子は、儉約に過ぎて、禮を失ふ。今の人、儉約なれば吝嗇にして、なすべき禮法をも行はず。是を下に偏ると云ふ。下にせまるとは、わが身上より下なる人の行ひをするを云ふ。奢れば、法制にそむきて、禮をうしなふ。是を上を僭すと云ふ。上を僭すとは、わが身上の分に過ぎて、上なる人のふるまひをするを云ふ。故に、禮は、過不及なき工夫をなすべし。

◎禮は、謙遜をたつとぶ。謙は、へりくだるなり。ほこると、うらおもてなり。ほこるは、わが才力